世に背く―西行出家遁世秘録

奥野忠昭

参考事項

主な登場人物　・←歴史上実在したとされる人物　←　▲　架空人物

・佐藤義清（西行の在俗時の名前）。

・平清盛（平忠盛の長男・ただし実子ではない。白河法皇の子どもだとも言われている。西行と同年産まれ、十二歳で従五位下、左衛門佐となる。後、平家の棟梁となり武家　政治を始める）

・佐藤憲康（西行の従兄、二歳年上）

・源季政＝西住（義清の大の仲良し。後、出家して西住と号する。西行より年上。歌人）

・佐藤仲清（義清＝西行の弟、兄という説もあるが弟とする。後、西行のあとを次いで田仲荘の預所となる）

・待賢門院璋子（鳥羽上皇の中宮。崇徳天皇、後白河天皇の生母、徳大寺実能の妹）

・徳大寺実能（田仲荘の領家の当主、義清の主人、璋子の兄、院近親）

▲善吉（田仲荘の預所である佐藤家の家人・雑務いっさいを引き受ける雑掌を勤める）

▲宗太（田中荘の農民、兼、佐藤家の家人、馬の世話係）

（その他の人物は巻末で）

注　ルビのうち（　　）のついたものは意味を表す。ないものは読み方

一（一一三三年・長承二年、十六歳）

すでに陽が西に傾き、館の影が大路いっぱいに広がっている。十六歳になったばかりの義清（西行の俗名）は、その影を掻き分けるようにして、徳大寺家の屋敷へと向かった。仕え始めた徳大寺実能さまの言いつけで、某貴族の館に書状を届けに行っての帰りである。返事をもらったので、それを実能さまに渡さねばならない。

すると不意に後ろから「義清」と呼ぶ声がした。驚いて後ろを振り返ると、大路と小路の角に従兄で二歳年上の佐藤憲康が折烏帽子に狩衣装束でこちらを向いて立っていた。どうも御所からの帰りらしい。彼はすでに左衛門尉になっていて、えらく立派に見えた。

従兄の憲康は義清（西行）の方へ近づいてきた。

「やあ、久しぶりではないか、なかなか忙しそうだな。徳大寺家の従者の仕事はどうじゃ」

憲康は笑みを浮かべながら言った。

「これまではなんとか無事に。まだ慣れないけれど」

「紀伊の荘園へも行っていたんだって。いよいよ家督をついだんだ。従者と預所（現地荘園の長）の二つの仕事をこなさなければならないなんてたいへんだな」

「はい、それで預所の仕事のために紀伊の那賀へ」

一昨日、義清（西行）は自家の領地で、紀伊の那賀郡にある田仲荘から京に帰って来たところである。紀伊には七日間しか留まっていなかったが、父が義清（西行）の七歳の時に死んだので、その家督をいよいよ義清（西行）が全面的に継ぐことになり、それまで預所の代わりをやってもらっていた雑掌（現地荘園実務の長）の善吉から、さまざまな仕事を引き継いだり、荘園の実情を把握したりした。あたかも一ヶ月ほどそこに滞在していたような気分である。

「吾の父がたいへん喜んでいた。義清は、若いが立派に主家を継いでくれている。あいつはただ者ではない。十六歳という歳に似合わず、本当によくやっている、とね」と従兄の

憲康が言った。

「よくやっているかどうかわからないが。いよいよ、隣の荒川荘（新しく荘園として認められたところ）との境を決める四至（東西南北の境界の杭）打ちに院司がやってくるという話しが聞こえてきて、弟の仲清なんかは、もっと何か打つ手はないのかと焦っている。どうも吾の働きには不満らしい」

「やつはまだ当主の苦悩を理解できる歳ではない。そりゃこちらの思うとおりにはいかないさ。何しろ我らの田中荘と隣の荒川荘の境界を正式に決めるのだから。荒川荘の領主は鳥羽上皇さまなんだろう。吾の父は、今まで四至（境界）を決めるのを延期させただけでもたいしたものだと褒めていた。相手は年の若い当主だから簡単に決められると思っていたのではないか」

「紀伊の国司の徳大寺 公重さま（領家の長である徳大寺 実能の養子）のおかげですよ。とにかく主張することは主張してきました」

「たいしたものだ。若いのに、国司や院司の前で堂々と振る舞うなんて誰でもやれることではない。立派だよ。これからは荒川荘もきたない手をつかってくるから、くれぐれも油断しないようにな」

「はい、ありがとうございます」

義清（西行）と憲康たちは御所からかなり離れたところまで歩いてきた。すると、左京の方から夫婦と思われる二人の人間が天秤棒の真中に藁で編んだ籠を吊し、棒の両端を担いで右京の方へ行くのが見えた。男は汚れた水干を着ていて、脛からあとは裸足だった。女のほうは汚れた布きれを頭に巻き、泥色に焼けた顔をして、淺黄色の着物を着ていた。二人ともひどく瘠せて餓鬼のようだった。顔もその表情もよくわからないが、苦痛に満ちた雰囲気だけは伝わってきた。

「あれは何をどこへ運んでいくのだろうか」義清は尋ねた。

従兄の憲康は義清（西行）を見ながら薄笑いを漂わせ「お前は紀伊の国の育ちで、京のことはあまり知らないらしい。よし、少し教育するか」と言いながら、彼らが進んでいった後をつけて歩き出した。

「彼らはどこへ行くのかね」

憲康にはわかっていそうなので再び尋ねた。

「吾についてこい、もう少ししたら分かるさ」

人の通らないような小さな道を選びながら夫婦らしい男女が歩いて行く。道と言っても、あるときは川になるようで、石ころが無造作に転がっていた。それに、両側の縁には高い雑草が生い茂っていた。しばらく行くと大きな土塀が崩れていて、中の様子がよく見えた。中を覗くと、寝殿造りの家である。貴族もかなり上の人の館らしい。中庭の池も見

えるが、池とは名ばかりで周囲には雑草が生い茂り、池は水草で覆われ、枯枝も無数に浮いている。その向こうの正殿の屋根は半ば崩れ落ち、板敷きの床まで届いている。瓦は、ほとんどが剥がされ、瓦下の板が泥を載せて、ところどころが破れている。かすかに覗ける正殿の間は暗く得体の知れない妖気が漂っているようだった。

「すごいことになっているね」

義清は驚いて言った。

「右京には入ったことがないのかね」

「用事はほとんどが左京の館ばかりで」

「右京はもう住めるところではなくなったよ」

多くの家が放棄されたままになり、その庭が耕されて、野菜や果物が植えられたりしている。田畑になっている所も少なくない。

「危ない！」

突然、石が頭をかすめ、矢が後ろに落ちた。

憲康がすでに剣の柄を持ち、身構えた。五、六人の武者ふうの格好をした男達が彼らを取り囲んだ。義清も剣の手をかけ、辺りを見回した。髭が顔中を覆い、眼と口だけになった男達が、どこで手に入れたのか値のはる剣を持っている。きっとひ弱な貴族たちを脅かして手に入れたのに違いない。

「夜盗たちだ。京も落ちぶれたものだなあ、昼間に夜盗が出るなんて」

「吾らも見くびられたものだ、こんな奴らに襲われるとは」

彼らのひとりが義清を襲ってきた。明らかに素人くさい。剣のさばきがなっていない。なんなく、それを避けると、剣を抜かず鞘ごと腰紐から抜き取り、それを棒がわりにして、腹を叩いた。それだけで地面に這うように倒れ、その拍子に口に泥を咥えてううう、ともがいた。

憲康も同じようなことをした。

「貴族なら、剣を見せただけで驚くやつもいるかも知れないが、俺たちは違うぞ。俺たちは武官だ」憲康が大声で怒鳴った。

夜盗たちは、「わあ、こいつらは兵（つわもの）だ、いけない」と叫びながら、稚児が地面を這うようにして必死に逃げた。

「最近は、土地を手放して、地方からたくさんの人間が京に流れ込んでいる。奴らは食えないので、盗人になって、婦人や、弱そうな貴族を襲って、値打ちのありそうなものを全部かっぱらうということだ」

「世も末だな、末法の世の中になったということか」義清が言った。

「僧侶さえも、京に出てきて、女を手込めにしたりしているって噂もあるし」

「でも、立派な僧侶もいることはいるよ」

「覚鑁（かくばん）さまのことかね。でも、その覚鑁さまが高野から追い出されそうだと言うじゃないか」

義清は黙った。義清もそのことは聞いた。覚鑁さまこそ金剛峯寺に残って高野山の改革をやりとげてほしかった。だが、なかなかそうはいかないらしい。

多くの僧侶は堕落しているようだ。しかし、立派な僧侶もたくさんいる。覚鑁さまの他

にも良忍さま（融通念仏宗創始者）の噂も入ってきている。
義清は僧侶までは堕落してはいないと言いたかった。いや、例え僧侶が堕落しても仏は堕落しない。西方浄土、東方浄瑠璃は堕落しない、と思った。
義清は、母に教えられ、小さいときから必ず朝には母といっしょに西や東に向かって「南無阿弥陀仏」と拝んでいる。そうしていれば浄土へいけると言うのが良忍さまの教えらしい。

夜盗に時間を食われたので、先程の籠（こも）を担いだ人達を見失ったが、憲康はあたかも彼らの行き先を知っているかのようになんの迷いもなく早足で道を歩いて行く。
あちこちに館らしい大きな空き家が見えるが、どれもこれもすべての屋根が落ち、板床が朽ち果てている。
しばらく行くと、そのような家も見えなくなった。ひろい空き地となったところへ出た。ここは辺りより少し高くなっている。水はけがよく、それに長い間、雨が降らないので、土は乾いていて、黄土色になり、風が吹くと土埃が渦を巻いて飛んだ。ところどころに小山のような盛り土があり、その頂上には細い板状のものが立てられている。この光景はどこかで見たことがあると思った。確かにどこかで見た光景だ。
かすかに風が吹いてきた。それに混じって、異様な臭いが漂ってきた。ものが腐っている臭いだが、あまり嗅いだことのない臭いだ。
憲康は慣れていると見えて、なんの躊躇もなくどんどんと歩いて行く。憲康の行く先を見ると先程、見失った天秤棒の男女が佇んでいる。男は天秤棒をまっすぐに立て、じっと地面を見つめている。女は下を向き、嗚咽を繰り返している。彼らの下には藁で編まれた籠が広げられて人が横たえられている。その上に何かが置かれている。
憲康はすでにその近くまで行っているので、義清は慌てて行こうとして何かに蹴躓いた。下を見ると、そこには鹿のそれと見あやまるような、背骨に肋骨をつけた人骨と、前方には髑髏が転がっていた。深く窪んでいる眼の穴がこちらを睨んでいた。危うく声を出すところだったが、かろうじて耐えた。声を出せば、憲康の笑い草になりかねない。
あっ、そうか、と声にならない声を出した。かつて見たものを思い出したのだ。それは、地獄絵の光景だ。父に連れられお寺にお参りをしたときに見たものだ。父はこれが地獄の絵だ、と言った。この世で悪いことをした人間は地獄に堕ちる。ここに書かれている腹の異様にふくれ、頭に角のように毛がそばだって生えているのが餓鬼という地獄に堕ちた人間だ。彼らは、墓場に来て、死体をむさぼり食っているのだ。「塚間餓鬼」といって、このように、娑婆に居るときは人の物を盗んで食ったり、贅沢なものばっかり食べていた人たちがここへやられて、葬られた死体を食べているのだ、と告げた。今、骨だけになった死体を踏みつけそうになったが、あれは、餓鬼がむさぼり食ったあとなのだろうか。それとも野犬たちが来て食ったのだろうか。
父は、地獄に堕ちはしなかったのだろうか、このような餓鬼になって、墓場を歩き回ってはいまいか。そう思うとぞっとした。「南無阿弥陀仏」と自然に声が出た。良忍さまに教えてもらったのだと母親がいつも言っていることがある。「念仏を唱えること、修行することは、自分が地獄に堕ちないだけではなく、一族のためにもなり、亡くなった人のためにもなる。家族が念仏を唱えれば、地獄に堕ちた人も救われる、極楽に行くことができる」と。父は正直な人だったという。だから、時の権力者に疎んじられ、検非違使の職を

追われたのだとか。だから、地獄には堕ちてはいまい。しかし、ひょっとして、とも思う。父も、武力を高めるため多くの獣を殺している。検非違使という仕事柄、人を殺めたかも知れない。父のためにも念仏を唱えねばならない。修行もしなければならない。

骸骨になった死体に手を合わせ、南無阿弥陀仏を十回唱えた。父が地獄へ墜ちて、人肉を食べさせられていませんように。それに、吾もひょっとして、今のままだと、地獄に墜ちるかもしれない。いや、きっと地獄へ墜ちる。だって、弓矢を撃つ練習として、領地の野原に放った野ウサギやイノシシや鹿を数知れず射殺した。彼らはきっと吾を憎んでいるに違いない。牙をむきだして吾の死体をむさぼり食いにくるだろう。食われた吾は今度は餓鬼になって、死体をむさぼり食うかも知れない。いやだ、地獄に堕ちるのは絶対いやだ。

そんなことを考えながら歩いていると憲康の傍まで辿り着いた。そこから藁(わら)の上にあるものを覗いた。十二、三歳の少女が寝かされていた。白い着物が着せられ、藁草履が履かされていた。髪の毛は紅色の布で結ばれている。それが唯一女の子らしい感じを与えた。顔は青白く、頬が痩けて、すでに髑髏(どくろ)に近い気がした。きっと、生きているときはかわいかったに違いない。

棒を持った男がゆっくりと少女から離れて、もとの道に向かって歩み出した。近くにいるのに義清たちには気づかなかった。女は何度も振り返った。それからまた、前のめりによろけながら前へ進んだ。少女が藁の上に寝かされたままだった。

「死とはこういうものだよ」

憲康はぽつりと言った。義清は黙っていた。

「お前も吾もいつかはこのようになって棄てられる。貴族は穴を掘って埋められるが、この少女と同じようなものだ」

憲康は合掌して目を瞑り念仏を唱えだした。義清も同じようにした。

義清の頭の中で、少女はすっくと立ちあがった。そしてこちらに向かって叫んだ。

「わたしはもっと生きたかったよう。粥(かゆ)がほしいよう。米(まんま)がほしいよう。魚(とと)がほしいよう」

義清は少女に向かってまたも念仏を必死に唱えた。

年が明け、如月も半ばになった。めっきり春めいてはきてはいるが、まだ、凍えるような日もある。年を越えてから、京の街は騒がしくなった。あちこちの貴族の家が付け火に遭い、炎に気をとられ、家人たちがうろたえている間に、倉が壊され、家の中の値の張るものが盗まれたりした。裕福な貴族は兵(つわもの)を雇って、家の周りを見回らせている。

物乞いをしても、誰も与えず、そのため食べるものがなく、行き倒れる人もふえ、路上には多くの死体が転がっているのだが、誰もそれを葬らない。身体にはウジが湧き、野良犬が死体を食べ散らかし、悪臭が満ちあふれている。義清は最初にそれらを見たときはぞっとしたが、そのうち慣れてきて、それほど驚かなくなった。

「おてんとさまがお怒りになっている。お偉い方がお祈りを怠っているからか、それとも罪あることをなさっているからか、そのため我々が苦しまなければならない。なんという

ことだ」と京のあちこちで不満を言う人が増えてきた。
　義清は、いったいこの有様の原因はどこにあるのか、天変地異が原因なのだろうか、それとも、人為的な何かが原因しているのだろうか、などと考えながら、内裏近くの右京側の小路を歩いた。ある貴族の蹴鞠（けまり）の会に招かれ、達者な蹴鞠を披露しての帰りである。蹴鞠をした寝殿造りの貴族の館内は、今、京の街ではどのようなことが起こっているかはまったく関係なく、優美な雰囲気を醸し出していた。
　小路の角に来たとき、傾きかけた小家（こいえ）の前に藁を敷いて、子どもが二人と夫婦と思われる男女が座っていた。物乞いをしているのだが、誰も何も与えない。すでに、子どもは座ってはおれず、女の子は地面にうつぶせになっている。頭だけは大きいが首は蛇ほどの細さになり、額を前に突き出して地面に這わせている。五歳ぐらいだろうか。しかし、もっと小さく見える。腕は縄ヒモほどになっている。掌はすでに骸骨のそれに近い。肌は土色である。弟の方は二歳ぐらいだろうか。これも粗末な麻の上着と小さな袴を穿いてはいるが、それらは土と同じ色をしている。母親の腿に持たれかかり、ときどき眼を上に向け、うつろに空を見上げる。眼には涙を溜めているが、泣く力はない。
　義清は咄嗟に有り金のすべてを与え、直垂の上着もその下に着ていた衣類も脱いだ。上が裸になった。寒さが肌を刺し、二、三度震えたが、家がもうすぐだ。どうってことはない、と言い聞かせ、それをも彼らに与えた。二人の男女は頭を地につけお辞儀をした。
　これで、少しは米が買えるだろう。生き長らえるだろう。
　家に帰りつき、母屋の戸口を入ったとき、上がり框（かまち）に座っていた雑掌（ざつしよう）の善吉（よしきち）が上半身裸の義清を瞳を大きくみ開いて見入った。善吉は去年末の年貢米を京に持参するために来たのだろう。
「どうされましたか」
「なあに、物乞いにせがまれて、与えてやった」
「それは、まあ」
　善吉は言葉につまっていた。
「近江や京、播州などで米のできがよくなかったそうで」ようやく、善吉は言葉を出した。
「関東、陸奥などは冷害でたいへんだったそうだ。そのうち、もっとひどいことになるのではと心配している。京ではすでに米が不足しだした」と義清はそれに応じた。
「紀伊では、高野や紀伊の山々が溜めておいた水と紀ノ川のおかげで一昨年の旱魃（かんばつ）には飢饉にもならず、冷害の年でも、紀伊は気温が高いので助かります。水害も一、二度生じたが、たいしたことにはならず、米の値段が上がってかえってよかったぐらいで」
「ここは京、めったなことを言うでないぞ」
「はあ、申し訳ございません」
「でも、善吉の言う通りじゃ。紀伊は本当によい国じゃ。ところで、今日は寒い中、京までご苦労だった。さあ、はよう部屋に上がってくつろいでくれ」
　そう言うと、義清も足を洗い、すぐさま奥の衣装部屋へと行き、下着と上着を着けた。

夜もかなり更けた。すでにみんな寝静まっている。善吉も那賀から京まで来たのだから相当疲れている。ぐっすりと寝ているだろう。仲清も勧学院で学ぶために京に来ているが、難しい文字を読まされて疲れているに違いない。妻も善吉のもてなしに疲れているはずだ。

義清は倉の前に行き、ゆっくりと錠前を外し、扉を開けた。ギギギと静寂の中で音だけが高く鳴った。いくらそっと開けても音は消せなかった。

倉の中は深い闇だったが、持って来た紙燭の光が辺りを鈍く照らした。奥のところの箱の前に立ち、その蓋を開けた。雪のような白い布束（ぬのたば）がそこにあった。その中から三束をとりだした。それから、また、蓋を閉めた。義清を官位につけるために蓄えられている絹布である。

成功（じょうごう）（金で官位を買うこと）が数年遅れたってかまわない。これで、何人もの命が救えるはずだ。義清は絹布を脇にしっかりと抱え込み、戸口を出たときだった。義清の行く手を阻むようにして男がすっくと立っていた。

「ご主人さま」男が言った。

「ご主人さま、何をなされますか」再び同じ声がした。その声は刃（やいば）のように鋭かった。

義清は不意を突かれ、ただ驚いて立ちすくんだ。

「今日の義清さまはいつもとは違っていました。こんなこともあろうかとずっとうかがっておりました」

雑掌（ざつしょう）の善吉（よしきち）の声だった。

「そんなことをなされてはいけません。大切な成功（じょうごう）のためのものです」

善吉はつづけた。

「成功が遅れてもかまわぬ」

義清も善吉に負けないような声を出した。声は木々に反響して、館じゅうに響いた。これでは家中の者が目を覚ます。

「いや、なりません」

「兵衛尉（ひょうえのじょう）などにならなくてもいい。どけ」義清は善吉を押しのけようとした。

と、そのとき、騒ぎを聞きつけた弟の仲清が走ってきた。

「どうした」仲清が息をきらしながら善吉に尋ねた。

「夜盗がおりました」

「ええっ、それで捕まえたのか」

「はい」

「どこにいる」

「ここに」

「兄上しかおらないではないか」

「はあ、その兄上さまが」

「……」
「餓死していく京の衆を助けるおつもりで」善吉が絹布を指さしながら言った。
仲清はしばらく義清をじっと見つめていたが、徐々に怒りのこもった眼に変わった。
「そんなものでは助けられませぬ」仲清が言った。
「それに、その絹は兄上のものではない。田仲荘すべての人々のものです。田仲荘の人たちを救うために使うというのならまだしも、京の衆に使うのは許せません。京の衆を救うのは王家の責任。今、崇徳天皇さまが大いに悩んでおられるということです」仲清の声は善吉の比ではなかった。もし、そうするのなら義清とここで一戦交えることも辞さないというほどの迫力があった。
「兄上は間違っておられる。自分の気休めのためにそうなさろうとしているだけだ」仲清はつづけた。
「気休め？」
義清は、そうじゃないとつづけようと思ったが、その言葉がすんなりとは出てこなかった。
「仲清さまのおっしゃるとおりでございます」善吉が言った。
「その絹は、田仲荘の人々の思いを含んだ絹です。義清さまを官位につけるために、みんなが協力して溜めたものです。義清さまが官位につくことは、田仲荘が安泰になることです。周りの荒川荘や吉仲荘に侵されないために」
仲清は善吉の言うことにいちいち頷いている。
「もし、どうしてもそうなさると言うのならわたしは雑掌のお役目を辞めさせていただきます。田仲荘の人たちにあわせる顔がございません。高い年貢にも、もう少し我慢してくれ、義清さまを官位につけるためにどうしてもお金が必要なのだ、と言ってきました」
「それは困る。あなたを置いて誰が雑掌が務まるというのか」
「だったら、それを元通りにお収めくだされ」
義清は黙ったまま、それを箱の中に戻すために倉に入った。ただ、彼らの言うことに全面的に納得したわけではない。どこか間違っているような気がしてならない。

義清は今日もまた蹴鞠（けまり）の会に招かれ、その帰り、七日ほど前に通った小路の角にやってきた。辺りには人がいて何か騒いでいる。見ると義清が上着を手渡した家族四人がそこに横たわっていた。男の手には刃が握られ、それが首に刺さっていた。妻とおぼしき女性や子どもの首が刃物で鋭く切られていた。血を流し四人は倒れている。莚（むしろ）は血で赤く染まっていて、土の上にも血が飛び散り、あちこち黒っぽくなっていた。
義清は彼らの姿から眼を離さなかった。心のそこに強い揺れを感じた。吾が手渡した衣服が何にもならなかったことが証明された。それはたった七日間しか生きながらえさせなかった。
絹を盗んでそれを米に換え、飢えた彼らに与えたところで何もならないという仲清の考えが正しいかもしれない。何ら根本的な解決にはならない。自分の力が少しでも役立つと思ったのは誤りだった。
しかし、そう思うと、深い淵に落ち込んでいく思いがする。自分の非力が腹立たしい。

やはり、仲清たちが言うように成功(じょうこう)をして少しでも田仲荘の役にたつ方がいいのだろうか。しかし、自分自身、官につきたいという思いがほとんど起こらなかった。

陰鬱な気分に包まれ、小路を歩いた。だが、そのまますんなりと自分の館に帰る気がしない。

大きく右に逸れ、大路辺りまでやってきた。家や館はまったくなく、ほとんどが田畑や荒れ野になっていた。その中に少し小高くなったところに小さな林があった。義清は畝づたいに林の中へ入っていった。下草が刈り取られていて中に入るのはたやすかった。木々もそれほど高くはなく、西日の照り輝く空が仰げた。

しばらく、空を眺めたり、木々の中を歩いたりした。と突然、どこかで雉子(きぎす)の声が聞こえた。雉子は春を告げる鳥ということだ。咄嗟に歌が芽生えた。

生ひかはる春の若草待ちわびて原の枯れ野に雉子(きぎす)鳴くなり（山家集・三二、以後番号のみは山家集から）

林の中にいて、歌を考えていると、心が静まり、先程の心の揺れがおさまっていく。

辺りを見回すと桜の木が何本かあった。これらの木に花が咲きそろう光景を思い描いた。すると、花の咲くのが待ち遠しくなる。桜の木に囲まれている自分を想像すると、みんなの言う浄土にいるような気分がする。現世にも浄土があるのかもしれない。

おぼつかない(まちどおしい)づれの山の峰よりか待たるゝ花の咲き始むらん（五九）

と詠んだ。

かなり気分が落ち着いたので、再び、小路を歩きだした。と、対面から、えらく長いひげを顎から垂らした老人がこちらにやってきた。なんだかひんやりとした空気が身を包むようだ。傍まで来ると、老人は立ち止まり、眼光鋭く、義清を睨みつけた。その目の上には萎烏帽子を被っているが、それからはみ出した白い毛が数本見えた。

「佐藤義清」

鋭い声が身を射るように聞こえた。目は迫力に満ちている。最近はめったにないことだが、身が少し震え、思わず刀に手を添えた。

「藤原秀郷(ひでさと)の子孫、佐藤康清(やすきよ)の長男、義清(のりきよ)だな」

「はい、さよう」

「父は、あまりぱっとしなかったが、おぬしは違う。わしは期待しておる。わしの生まれかわりだと思っておる。わしの魂の一部を入れておいた。だから間違いない」

「いったいそなたはどなたさまで」

「わしか。よく見よ。気づかぬか」

「はあ？」

義清は老人の顔をじっと見つめた。わからぬ。ただ、なんとなく親しみを感じたのには自分でも驚いた。誰かに似ている。しかし、誰かははっきりしない。七歳のとき死んだ父の顔に似ている。父上だろうか。

「わからぬか」

「わかりませぬ。どなたさまであられるか」
「魂の一部まで入れておいたのにわからぬとはな。でも、無理はない。八代も前の人物をわかれというのは無理だのう」
そう言うと、天を向いて、わははと高笑いをした。
八代前というと、藤原秀郷（ひでさと）さま、あの有名な俵の宗太。そう思ったが、そんな馬鹿なことがあろうはずがないと思う。だが、口が自ずから開いた。
「まさか、秀郷さまでは」
「そうよ。よく思い出してくれた。藤原秀郷よ。わしの子孫はみんなよくやってくれている。特に東国のやつらはな。平泉の藤原、関東の小山、足利。だが、畿内はもう一つだ。佐藤家、尾藤家は何をしておる。それで、わしの魂の一つをお前に入れておいたのだ。それがどうじゃ。わしが命をかけて奪いとった田中荘、池田荘が新興の荒川荘に一部奪われそうになっているという。そんなことを聞いたら、冥界でじっとしておられようか。何たることだ。ほんの少しでも奪われてはならぬ。奪い取れ、それが藤原氏の魂、鎌足翁の教えだ。わかったか義清」
「はあ」自然と身体が土の上にひざまずき、頭を垂れた。
「和歌などにうつつをぬかすな。あれは文官貴族の遊びじゃ。武官が文官の真似をしてどうする。武官は武官らしく。いざというときは命をかけて戦う。絶対に負けない力を蓄えておけ。負けない力とは、ただ、体力や武芸の力だけではないぞ。策略も、秘策も生み出せる知力、胆力、人を引きつけ育てる育成力、多くの人を養えるほどの経済力、それらすべてを備えることだ。わしは、国衙役人として下野国（しもつけのくに）に赴任したんじゃが、それを上手に使いながら、経済力も軍事力もつけたのじゃ。わしが打ちのめした平将門（まさかど）も同じじゃった。だから京からは『反国衙（こくが）的武力集団』ということで、罪として『隠岐への配流』という刑まで受けた。けれど誰がそんなものに従うか。多くの兵を使わして、わしを召し取りにきたが、そのようなやつらを片っ端から蹴散らかしてやった。なぜそれができたのかわかるか。力があったからよ。ただ、平将門のように関東を独立国にしようなどとは言わなかった。そのような力は自分にはないことはわかっていた。だから、将門追討の命が下ったとき、まっさきに手を挙げたのよ。そしたら、流罪が取り消され、追討の大将、追捕使（ついぶし）に任命された。将門は強かった。わしの命さえ危なかった。だが、なぜ勝てたと思う。農繁期を狙って、戦をしかけたからよ。将門の兵は農民が多かった。だから、農繁期には家に帰らねばならない。手薄になる。そこをねらったからよ。それに反対するやつらもいた。卑怯なやり方だと言ってね。戦いに卑怯も何もない。勝てばいいのだ。そして、ようやく将門の首をはねた。それを持って京に上ると、帝の喜ぶこと、官位が、従五位下から、従四位上まで跳ね上がったのよ。そのとき、田中荘も池田荘も功田（こうでん）としてもらい受けた。わかったか、義清」
「はあ」

「お前は、その先祖の領地を引き継ぎ発展させる義務がある。それがお前の宿命だ。和歌などは何の役にもたたない。ただひたすら武芸を磨け。田畑を広め、私兵を増やせ。それが秀郷流なのじゃ」

鋭い声が矢のように飛んでくる。

「はあ」と再び、老人に頭を垂れた。

「陰鬱な気分だと、そんなことでどうする。武芸を怠けているからそのようなことになる。もっと武芸も気持ちも強くなれ」またも鋭い声。

全身、汗びっしょりだ。身が震えてくる。こんな経験は初めてだ。

しばらく頭を下げることしかできなかった。秀郷さまの魂が自分の中に流れていると思うと、誇らしげな、たまらない興奮が生じた。何としてでも田中荘の領域を守らなければならない。強い決意が生まれた。

「田中荘、池田荘は守って見せます」ふれ伏しながら大声を出した。それからそっと顔を上げると、そこには誰もいなかった。すでに秀郷さまは消えていた。

二（一一三四年・長承三年、十七歳）

まだ、競べ馬の決勝が始まるまでには少し間があった。義清（西行）は馬場の端で愛馬・秀丸の世話をしながら、この戦いに挑むに当たって考えたことを反芻してみた。

紀ノ川を挟んで田仲荘の南側は以前は国衛（国の所有）の土地だったのだが、宇治平等院の行尊さまが荘園として院に申し出て受理され、平等院の荘園となり、荒川荘と名付けられた。さらに行尊さまはそれを鳥羽院に寄進した。それで、院庁が、周囲の荘の了解のもとに、荘園の正式な四至を決めよと、国司に言いつけたのだが、なかなかそれができなかった。業を煮やした院庁は、使者として奥盛弘を送り込んでくるという知らせが伝わった。

なんとしても、新しく開墾した紀ノ川以南の土地を守らねばならない。しかし、鳥羽院が自分の土地を狭く確定するなどということはありえない。それに噂では、院使の奥盛弘は清和天皇の子孫の源義盛を先祖として、一族は陸奥国に住まいし宮道と称したが、後に、奥と改名したそうである。また、先祖は世間から陸奥三郎と呼ばれて、尊敬を集めていたと言う。盛弘はその一族のひとりで、なかなかの切れ者で、由緒ある貴族の出ということもあり、鳥羽上皇にも信頼が厚いそうだ。それに四至をきちんと決めることができれば、盛弘には荒川荘の公文の職が用意されているという。うかうかしていると、紀ノ川以南はすべて荒川荘にされかねない。

最初に吾の祖先の秀郷さまに与えられた功田は、紀ノ川を境に、その北側であったが、その後、洪水などで、川の流れが大巾に変わり、もと田仲荘であった土地を貫いて川が流れ始め、田仲荘の土地は大巾に削りとられてしまった。このような場合は、取り決めで、紀ノ川の以南となった土地が田仲荘の土地として認められるということになっていたのだが、今回の四至決定でそれがどのようにされるかわからない。すでに、下司に指名された荒川荘の平野家は川を境界にするように要求しているらしい。吾が若いから何とでもできると思っているのかもしれない、ではいったい吾はどうすればいいのか。

田仲荘は名目上は徳大寺さまに寄進してあるので、徳大寺実能さまの妹君で鳥羽上皇の后であらせる璋子中宮さまが、田中荘の領地を狭めないようにお願いするとの手紙を鳥羽上皇にしたためてくれたという。また、実能さまの「お願い状」も併せてお渡しになったとか。しかし、一方、現在の寵愛のひと、得子さまはそれが気に入らないらしい。父上、藤原長実に頼み込み、鳥羽領荒川荘の領地を狭めないようにと、上皇さまに願い出たとか。長実も実能もともに鳥羽院の大切な院近親である。上皇は璋子には後ろめたさがあり、得子には愛しさがある。たいへん迷っておられると、どこから仕入れてきたのか、従兄の憲康が吾に耳打ちをしてくれた。

いったいどうすれば田仲荘の土地を守れるか。それには、もうこの競べ馬に勝つしかない、という思いが義清の心にふつふつと湧いてきたのだ。この競べ馬に一番になれば、賞品は、ほしい物を書状にしたためて上皇に渡せる権利が与えられる。それを見て上皇さまが賞品をお決めになるということになっている。

上皇さまが「田中荘を狭めるな」と院使に言ってくれれば田仲荘は守れる。それには、一等になって、上皇さまに直接書状を書き、今耕している段地区をすべて田仲荘にして欲しいと述べることである。そのためには、どうしてもこの競べ馬で平清盛に勝って、一番にならなければならない。

いよいよ始まる合図がなされたようで、どよめきが義清の馬・秀丸にも伝わったのか、首を左右に振って興奮を自ら静めようとしている。この馬で何度も流鏑馬の儀式に出て、的を射るのに成功している。また、城南宮の競べ馬に出て、左方の勝利に大いに貢献した。だが、競べ馬はそれが初めてで、今回は二度目である。とは言え、これに出るため、桂川の堤防沿いの道で、必死に練習を重ねてきた。秀丸は名馬に近い。走力はどの馬にも負けない自信がある。しかも利口で、こちらの言うことを理解するのが早い。いささかあらっぽく、負けず嫌いなところがあるが、それがむしろ競べ馬には適している。普通、競べ馬

は二頭で競い、しかも、同時ではなく、追馬という方法で行われるのだが、今回は、幅の広い鳥羽離宮の馬場で行われるので、三頭同時に走り始め、優劣を競う方法がとられた。これは鳥羽院さまの御発案らしい。直線距離で三十三丈（約千メートル）である。

午前中の予選では文句なく義清は三頭中の一着だった。三頭ずつ走って、それが三回行われた。つまり、今回の競べ馬の出走馬は全部で九頭である。この九頭は、今年になってすでに行われた賀茂神社の競べ馬、城南宮の競べ馬、摂関家の内競べ馬などの様子を見て、院執事が近衛官人に命じて決めさせた。それに、選ばれた乗尻（騎手）はいずれもすぐれた者ばかりである。この競べ馬に選ばれただけでも名誉であり、馬もまた名馬ということになる。乗尻の九名の内、衛府官人が二名、検非違使が二名、北面二名、摂関家武者三名であった。決勝に残ったのは衛府一名、北面武士一名、摂関家から一名である。北面一名とは十三歳ですでに北面の武士になった清盛で、摂関家からは、内競べ馬で優勝した義清である。衛府からは源のなにがしで、名前は知らない。

義清は鐙に足を掛け、ゆっくりと馬の背に乗り、出発地点の馬出へと馬を進めた。

午の宴も終わり、鳥羽院以下、貴族招待客は馬場の真ん中辺りにある見物席に座り始めている。出走の合図の法螺貝が吹かれ、衛府の役人がそれぞれ馬の鼻輪を持ち、出発点へと引っ張っていく。義清は右方であり、清盛は左方である。

義清はいつになく興奮して、呼吸が荒くなる。これでは冷静な判断ができない。落ち着け、落ち着けと自分に言い聞かせる。この競争に勝って、鳥羽院に印象づけ、田仲荘の領地を守らねばならない。これは自身の戦いだけではなく、田仲荘全員のための戦いなのだと言い聞かせる。しかし、そう思えば思うほど、興奮度が高まる。清盛の方を見るとすでに若武者の風格を漂よわせ、堂々としている。だめだ、清盛を意識すると、すでにそのことでひけめを感じる。相手を意識せず、終着地点を目指すことだけを考えようと思う。

中方の馬は衛府の指示をきかずに、なかなか馬出のところに来たがらずに手こずっている。それに比べ、秀丸は落ち着いてじっと出番を待っている。

ふと、馬上から見物席の上皇さまと左右におられる璋子さまや得子さまに目を移した。彼女たちのあでやかな袿の衣装が目にしみる。特に璋子さまの衣装は美しい。その璋子さまがきっと義清を応援してくださっていると思うと、よし、なんとしてでも勝たねばならないという気合いが入った。

三頭の呼吸がそろったところで鐘が鳴らされ、いっせいに出走のための蹴りを入れ、馬を走らせた。馬の走る律動に合わせながら、少し前屈みになり、両足で腹を圧迫し、蹴りを入れつづける。すでに中方は遅れ気味だが、清盛の馬は調子が良さそうだ。それに清盛は乗馬を楽しむように悠然と馬の律動に合わせている。

やがて院や璋子さまのおられる見物席の前を通り過ぎるが、横を向く余裕などない。必

死に、手綱を持ち、馬の腹を両足で圧迫し、再なる速さを要求する。

清盛の馬は秀丸より一廻り大きく、走るのに迫力があるが、秀丸も清盛の馬には負けない脚力を持っているはずだ。だが、どんどん遅れていく。すでに半馬身は遅れた。どうしたのだろうか。今日は体調でも悪いのか。そう思っているうちに一馬身遅れそうになった。義清は焦りだし、蹴りを何度も入れた。だが、そうするごとに馬の脚の律動がちぐはぐになっていく。何か、乗り方が悪いのか。ふっと、先日会った秀郷翁のことを思い出した。それから家にあった秀郷直筆の乗馬の秘伝書を思い浮かべた。何事も馬に絶対押しつけるな。馬を慈しみ、馬と一体になれ、そのとき、馬は思うざまに動く、と書いてあった。どうも是非勝ちたいという思いが強すぎ、秀丸が速く走ることを押しつけている。秀丸を信じ、秀丸と一体にならなければならない。教えは常に心に思い浮かべていたのに、肝心な時になって忘れてしまった。自分の心の弱さを痛感し、馬の律動に身を合わせ、馬と一体になることを心がけ、蹴りも柔らかく、必死に走ろうとしている秀丸に感謝の気持ちを込めて腹を打った。すると秀丸の速度は飛躍的に速まり、瞬時に差を縮め、追いつきそうになった。と、遠方に、埒を越えて、一匹の鹿が入ってくるのが見えた。危ない。途端、義清が反射的に手綱を引いた。秀丸もそれに気づき、瞬間に速度を緩めた。鹿は、走ってくる蹄の音に気づいたのか、慌てて、身体を翻し、元来た方へ帰ったが、秀丸はその鹿の横をかろうじてすり抜けて走った。あのとき、手綱を引かなかったら、鹿を蹴散らかして走ったに違いない。本当によかった。だが、速度を緩めた分、清盛の馬に再び差をつけられた。かまわぬ、お前の力はわかった。焦るな、負けたっていい。鹿を蹴散らかして一番になるより、うまくすり抜けた方がどれだけいいか。

すでに、一馬身半の差がついている。しかし、秀丸は必死に走り続ける。打ち木の所をはるかに超え、最終地点に差しかかった。清盛は鞭を入れた。しかし、義清は大きな蹴りを一つ入れただけで、鞭は使わなかった。それでも半馬身まで追いついたが、清盛に勝つことができなかった。「鹿と田仲荘の農民達とどちらが大切か」という秀郷翁の声が聞こえてきそうだったが、義清にはその答えは簡単には出せなかった。ただ、気分はすがすがしかった。秀丸も同じようだ。ひひひーん、と一声高々と鳴いた。

清盛はこちらに向かってやってきて、馬上から「鹿が出てこなければ、この勝負は吾の負けだ、お前の馬はすばらしい」と言って、左手を長く伸ばし、義清の手のひらを握ってほほえんだ。

競べ馬があってから三ヶ月が過ぎたとき、紀伊の国司・徳大寺公重さまからの呼出状が届いた。荒川荘の四至を決める会議を知らせるものだった。

義清はいよいよ来たかと思いながら、まだ夜も明けきらない暁の頃、家人で雑掌の善吉と馬の世話をしてくれている宗太を伴って、紀伊・那賀郡にある田仲荘の自宅を出、紀ノ川沿いの街道を名草にある国府の館に向かって馬を進めた。

東の空はうっすらと明かりを増してきて国境の山々の稜線がくっきりと浮かび上がってきたが、数日前、京の自宅から淀川を下り、浪速から駅馬で紀伊に入ったのだが、そのおりに通った孝子峠（きょうしとうげ）辺りはまだ暗く、木々の姿も闇の中に消えていた。

日中は暑いが、まだ、この時刻はそれほどでもない。

義清の馬に添うようにして歩いている雑掌の善吉が頭を上げ、こちらを睨みつけるようにして言った。

「まさか、段地区にある与一の田圃や弥右衛門（やえもん）の田圃が荒川側にとられるということはないでしょうね。あそこは、領主さまのご指示で与一や弥右衛門が必死で耕した田圃なんですから」

「大丈夫だろう。先祖から伝えられている書状もあることだし、いくら荒川荘は鳥羽院さまへ寄進されたからといったって、上皇さまは理にかなわないことはなさるまい。それに、国守さまからも院のお偉方にはこちらに理のあることはお話をしてくれているはずだ。することはすべてやった。だから……」

そう言いながらも、先頃の競べ馬に敗れたことがやはり悔やまれた。

「でも、荒川荘の下司（げす）（荘園を取り仕切る役）の平野さまも、院庁にお知り合いがたくさんおられるとのこと。第一、院使さまのお父上も北面の武士だったと言うではありませんか」

「上皇さまは理を重んじられるお方だ。それに院使の奥盛弘（もりひろ）どのは陸奥の国で非常に尊敬された一統の方だ。おかしなまねはなさるまい。きっと、理を守ってくださるだろう。相手方の荒川荘はつい最近、荘園に立券（りっけん）（荘園として認められる）されたばかりであり、我々の土地は秀郷さまのときからだ。その時の書き物もちゃんと残っている。紀の川が何度もの洪水で、川の流れがかなり北へ寄った。それは、絵地図でもはっきりしている。だから、その分、川から南や東も我が田仲荘と認めてくれるはずだ。そうだろう善吉。だから間違いない」

「おっしゃるとおりで。はい」雑掌（ざつしょう）の善吉（よしきち）が答えた。

義清はそう言いながら、強い不安に巻き込まれている。

とにかく荒川荘は鳥羽院さまのご領地なのだ。院庁が自分の所領を狭く見積もるはずがない。できるだけ広めようと考えるのはしごく当然である。それもまた理にかなっている。

四等官の最下位に過ぎない左官掌（さかんしょう）の奥盛弘（もりひろ）さまをどうして院使に選ばれたのか。よほど、信頼されているということか。だが、この場合の信頼とは、院の意向に沿ってことを運んでくれるということだろう。それ以外には考えられない。

盛弘さまは、院使に抜擢されたのだから、ここで手柄をたて、院庁に認められ、何らかの利を得ようと考えるのも当然であろう。だから、もし、段地区が全部、荒川荘に組み入れられた場合、吾はいったいどのような手を打てばいいのか。せっかく田堵、名主として

自立しかかっている与一や弥右衛門一家をどう救えばいいのだろう。、境界の争いは、領主の土地争いだけではなく、そこに住む人間の生き死にの問題なのだ。

何だか、胃のあたりがもぞもぞと不快感を覚え始める。考えれば考えるほど、陰鬱さがまし、前途が暗澹としてくる。ええい。考えるのはよそう。

馬を止め、馬上から左側の方に目をやった。空はうっすらと夜明けを示しているが、その下の紀伊山地の峯々は、まったく光を受けつけずに、黒く沈んでいる。身体を捻って、東側に見える山々を眺めると、和泉の山々より高くてどっしりとしていた。そこは高野（こうや）の山々で、あそこに不死身の大師さまがおられるのかと思うと、黒い山々も黄金に輝いているように見える。しばらく馬を留め、眺めていた。すると、これから行われる境界の争いなどまったくくだらない出来事のように思えてくる。段地区が荒川荘であろうが田仲荘であろうがどちらでもいい。そんな思いが起こってくる。今先ほどの、もし、荒川荘なら、与一や弥右衛門をどうしようと悩んだことが馬鹿げているようにさえ思える。だが、そこから目をそらし、行く手を眺めたとき、やはり、それはとても大事なことで、人の将来、いや、孫末代にまで関わることで、また、先祖代々が汗水流して勝ち取った土地をおめおめと差し出すことは、先祖に対するこの上ない裏切り行為だと思えてくる。なんという重い荷を背負わされたことか。吾はまだ十七歳（現在では十六歳）だ。重い、重い。耐えられないほどの重い。

すると、今、懸命に暗唱している古今和歌集の一首が思い浮かんできた。

雁（かり）の来る峰の朝霧晴れずのみ思ひつきせぬ世の中の憂さ

（よみびとしらず・古今集・九三五）

こんなとき和歌など思い出すなんて何事か、という秀郷翁の言葉が聞こえてきそうだ。和歌をすてよ、武に徹せよ。自分に言い聞かせる。和歌を捨てるな、和歌に徹せよ。誰かの声がする。

「兄上、何としてでも田仲荘の土地は守ってくだされ。荒川荘の下司・平野 俊春（としはる）などに負けてはなりませんぞ」と出発間際までつきまとわれ、必死に懇願してくる弟の 仲清（なかきよ）の姿が目の前にちらつく。もちろん、守れるものなら守りたい。だが、最後の手段だった競べ馬も清盛に敗れた。それに、院庁という最も手強い権威に立ち向かうことなど不可能なことだ。できることは、もうこちらの正当性を主張することだけである。もし、理不尽な裁定が下されたら、将来に大きな禍根を残すことであり、両荘にとって決して利益にはならないことを盛弘さまにこんこんと説得すること以外にはない。ただ、盛弘さまが聞く耳をお持ちかどうかだ。義清をまだ若造と考え、なめてくるかも知れない。そうならないように、できるだけ威厳を保たねばならない。

道はよりいっそう紀ノ川に近づいたのか、悠然と流れる川面が馬上からは近くに見えた。川幅も広く、すでに、向こう岸の近くは金色の筋となって見える。何という清々しさだ。お釈迦さまは川を眺めながら、さまざまなことをお悟りになった。自分もまた、紀ノ川を眺めながら何事かを悟りたい。だが、むしろ、迷いの方が勝ってくる。いよいよ正念場だという思いがふつふつと湧いてくる。まあいい。お釈迦さまも若いときは大いに悩ま

れたという。放蕩も為されたようだ。空海さまもまた同じ。悩みが大きければ大きいほど、仏に近づけると言うではないか。

そのとき、ふと思いついた。和歌を捨てよ、と秀郷さまは言われた。だが、仏を捨てよとはひとことも言われなかった。彼はきっと仏の身元においでになられるのだ。兵だって、仏を信じれば極楽に行けると、身をもってお示しになったのに違いない。

道が少し上り坂になり出した。だから雑木の切れ目があると、川幅が広くなった紀ノ川がはっきりと見える。水がとうとうと流れている。黄金色の筋が面となって輝きだした。まるで大日様がそこに鎮座されているような気がする。

手綱を持ちながら、川に向かって合掌した。それは合掌しようとしてしたのではない。自然と手が動いたのだ。

「この坂を登り切れば、名草郡に入ります」

後ろから雑掌の善吉が声をかけてきた。

「そうだな。荒川荘が立巻（りつけん）されたので那賀の土地では国衙（こくが）は名草だけになってしまった」

「しかも高野（こうや）のお寺さんが荒川荘を狙っているという噂が飛んでおります。今、高野のお偉方が荘園を増やそうとやっきになっておられるとか」

「馬鹿なことを言え、行尊さまは高野山にではなく鳥羽さまに差し出されたのだから」

「それは、そうですが、高野のお寺は鳥羽さまへたいへんお近づきになっておられるということで」

「それは違うぞ。鳥羽さまが空海さまをたいへん尊敬されておられるのだ、だから、高野へも御幸されるのだ。鳥羽さまは人にだまされるようなお人ではない」

「はあ」善吉は不服そうに答えた。

どうもいかん、これから主人として仕えようとするお人を悪く言われると、まるで自分の母親の悪口を言われているような気がする。

馬を進めながら、義清は今度は鳥羽上皇さまのことを思い描いた。上皇さまは、催される歌会には必ずお招きくださり、そこで詠んだ歌をお褒めになり、やさしいお言葉で励ましてくださった。上皇さまに背くようなことはあってはならない、鳥羽さまは自分にとっては生き仏のようなお方だ。もし、異を唱えるはめになったとしても、それは決して鳥羽さまに対してではない、平野さまに対してであり、奥盛弘さまに対してである。

義清は何度もそう心の中で呟いた。

道は下り坂になり、馬の脚も速まった。すぐに、平坦な道に出た。あちこちの田圃には大きく成長した葉っぱがそよいでいる。すでに、何度目かの草取りも済み、後は、実りの秋を迎えるだけだ。五月辺りには、田の草取りや、水引で、この時刻にはかなり人が出ているのだが、今は、しばらく、稲の生育を見守る季節である

紀ノ川沿いは恵まれている。温暖な気候の上に、水も豊かだ。紀伊国は山の国で平野が極端に少ないが、紀ノ川沿岸だけは違う。広い平野があり、土地もよく肥えている。で、作物のできもいい。紀ノ川は少々雨が降らなくても、水の減ることが少ない。紀伊の山々が豊かな水を、腹一杯ためているからである。だから、多くの田圃は紀ノ川に頼っている。ため池は少ない。それでも、たまには渇水になることもある。するとすぐさま水争いが始まる。ただ、それよりも、紀伊は雨がやたら多い。だから川がよく氾濫する。田畑が水浸

しになり、稲が浸かったり、流されたりして、多くの田圃が収穫無しになる。それに川筋が変わったり、川沿いの田畑がなくなったりする。

去年の夏は例年になく雨が降らなかった。だから、水量が少なくなり、上流の村々が我先にと水を奪い、下流の村々は例年よりかなり米が穫れなかった。しかし、これはまだいいほうで、東国など、米がまったく穫れなかった地方もあるらしい。

馬がだんだん名草に近づいていく。義清の心がざわつく。不安も増してくる。こんな気弱なことではどうする。自分は佐藤家の家長であり、俵藤太として有名なあの秀郷を祖と仰ぐ佐藤家の当主なのだ。何代もの間、左衛門尉としてつかえてきた武官の家柄でもある。肝っ玉を据えろ、何ものも怖れるな、怖れるものなど何もない、と何度も自分に言い聞かせる。すると腹底から力が湧いてくる。迫力で荒川荘の俊春を圧倒せねばならない。院使の盛弘さまに怖れを抱かせねばならない。

ようやく義清、他二名は、国府の館に着いた。馬のための庭の馬止めに手綱をくくった。

義清、善吉は国府の役人の案内で、正殿の広間に通された。すでに、鞆淵荘、神野荘の預所が座についていた。左側端には鞆淵荘、次に神野荘、いずれも、萎烏帽子、直垂、括袴に脛巾という旅装束のままだった。義清もまた同じ装束である。彼らの横に座ればいいのかと思ったのだが、一つ座を跳ばして座るように言われた。程なく、荒川荘の俊春が役人に案内されて入ってきた。彼もまた吾と同じ装束だった。彼らは一番左端に座った。彼は口髭をハの字型にのばし、あご髭をのばしていた。

最後に、吉仲荘の平信綱が入ってきた。彼だけが立烏帽子に水干姿だった。彼もまた口髭、あご髭をのばしていた。彼は先程一つ跳ばした座に座った。義清の隣である。

これで、荒川荘をとりまく周囲の荘園がすべて出そろったことになる。

「たいへんご苦労さまでございます。これから、荒川荘の四至を定める会議に入る。最初に、院使さまがこれが最後の申し立てをお聞きになられる。その後、しばらくお待ちいただき、院使さまより四至の言い渡しを申し上げる。みなさまに署名していただき、直ちに榜示（境界の主要なところに杭をうつ）に参る。よろしいかな」

驚いた。今日、この場で決めるなんて。奥盛弘さまに全権委任されているということか。

「では、国守さまと院使さまをお呼びいたす」

国府の役人が消えると、部屋は緊張に包まれた。

「今日決めるなんて聞いていたか？」と平信綱がそっと義清に尋ねた。

「今日はまだ、こちらの言い分を聞いてもらえる会議だと思っていました」

「前回、お互いに、さらに自分の方が正しいという証拠なり理由なりをもって参上しろということだったな」

「その通りです」

「どういうことだ、これは」
「容易ならない策略を感じます」
「まさにその通りだ」
「盛弘さまは院使に抜擢されたお方だけあって手強い相手かもしれません。あの襖の向こうに、数名の武者が控えておるのが襖をあけて入ってくるときちらりと見えました。もし、異を唱えて署名を拒んだ者がいたら、捕縛するつもりでしょう」
「うん、やつめ、やりおるな」
どうも、平信綱は今回のことについては何も知らないでやって来たようだ。膝の上の拳をぐっと握りしめていた。それからしばらくの間をおいて義清の耳元に口をつけてきた。
「やつめがどう決めようと、わしのところは、思うようにやるからなあ。おまえとこもそうしろよ。ときをみはからい、いっしょにやろうや」
信綱は義清の目を見つめながらにっと笑った。決まった通りにはやらない。もし、荒川荘から文句が出たら武力で脅すということだろう。武力に自信がありそうだ。あるいは平忠盛（清盛の父、平氏の棟梁）を頼みにしているのかも。
そのとき、国守の公重（きんしげ）と院使の盛弘さまが、立烏帽子の直衣姿で襖（ふすま）を開けて部屋に入ってきた。義清たちすべてが頭を床につけた。
「頭を上げて、堅苦しい挨拶は以後不要じゃ」
公重が大声をだした。院使の盛弘は首を何度も上下に振ってそれに同意を示した。それから盛弘さまは周りを睥睨するように見回した。目にはまるで真剣勝負に望む兵（つわもの）のような迫力があった。それと同時に国守を見るときには、この無能力者めというさげすんだ目をした。もう五年も前に、荒川荘の四至を定め、榜示を打てと鳥羽院下文（くだしぶみ）を国守に出されている。にも関わらず、未だにそれができてはいない。荒川、吉仲、田仲の間で折り合いがつかないとのことだ。何というふがいなさだ。これでは国守としての仕事を放棄したも同然ではないか。そんな思いがこもっている目だ、義清はそう思った。
「みなの知ってのとおり、五年前、つまり大治四年、宇治の平等院におられる行尊さまが荒川荘を立券され、それを上皇さまに寄進された。そして、この度、上皇さまから私に四至を決め、榜示（ぼうじ）を打ってこいと命じられ、院使としてここに参った。今日は、まず、みなの言い分をよく聞き、そのあと、明確に四至を決め、ここに書き込むつもりである」
盛弘さまは一枚の紙を片手で高々と持ち上げた。白い紙がひらひらと揺れた。それを今度は両手でしっかりと持ち、広げて義清たちに見せた。
「これを見てみよ。荒川荘の四至を書くところは白地である。だが、後には、院庁の評定衆の名前と花押がすでに押してある。つまり、我に白紙委任をされたということだ。だから、それぞれの言い分を聞いた後、吾が四至を決める。これは院庁下文（くだしぶみ）と同じものだ」
盛弘さまはやや高い口調で述べた。言い終わると、五荘の下司や預所をきっと睨み付けた。特に義清を強く睨んだ。
「こんな下っ端役人に全権委任とはなあ、我々もなめられたものだ」と吉仲荘の平信綱は

誰に言うともなく小声で呟いた。
「では、さっそく、鞆淵荘から言ってもらおうか」と公重が言った。
「前回、院がお示しになったとおりで、意義はございません」
そういうと恭しく頭を垂れた。その後、神野荘も同じようなことを述べた。この辺りから、義清は他の荘の言い分が耳に入らなくなった。自分がどのような手順で院が仮案として示した案に反対を表明するか、家で考えてきたことを反芻することに専念した。
平信綱がやや声を荒げ、必死で何かをしゃべっていたが、ほとんど頭に入らなかった。ただ、さかんに「貴志川が氾濫して」というのだけは頭に残った。
「よし、吉仲荘の言い分はよくわかった、では最後に田仲荘の考えをお聞かせねがいたい」
義清の口中（くちなか）にはもう唾がなかった。舌先も歯の裏も乾ききっている。こんなことで一家を代表する家長と言えるだろうか。まだ若いでは通用しない。すでにれっきとした佐藤家の当主である。例え鳥羽上皇さまの代理といえどもひるんではならない。そう思いながら、ふっと、国守の公重の方を向いた。公重は義清の視線を受けるとそっと目をそらした。その仕草に、「すまない、私の力不足で」といった心が読みとれた。公重さまを悩ましている、と思うとさらに緊張し、同時に何としても盛弘さまを説得せねばという力が湧いてきた。
公重さまは、養子とはいえ、徳大寺さまの一員である。徳大寺さまは義清の父の代から、家人として使えてきた家である。公重さまが紀伊の国守になられたときは、いち早くお祝いに駆けつけた。それから何度もお会いし、京に来られたときは、徳大寺家にお尋ねしたこともある。だから、田仲荘の言い分はよくわかり、そうなるように荒川荘にも働きかけてくれたが、荒川荘は承知しないということだった。
「前回にも申したとおり、昔の紀ノ川は、『最初が峰』の山麓にそって流れ、三船神社付近まで入り込んで西に曲がっておったそうで、父、康清の子どもの頃でさえ、『上村』辺りまで入り込んでいたということです。前の会のとき、お示し申した古い書き付けには、紀ノ川の流れが、北に変わった場合、以前耕していたと同じ広さの土地を紀ノ川南岸から譲渡し、田仲荘と認める、という紀伊守の署名のある文書をお見せし、その写しをお渡ししたはず。それから、今回、新しい文書も見つかったのでここにもって参りました。父・康清（やすきよ）が、我々の土地と荒川さまの開墾地とが接しているところを図で示し、荒川の土地と田仲荘の土地の境はこことすると、両家の家長の署名がなされています。これにより、明らかに、院から先日示された境は承服しかねます。紀ノ川の以北が田仲荘、以南が荒川荘などという案には到底承納得でいません。境は紀ノ川の流れとは無関係です。どうか、この図のようにお取りはからいをお願いいたします」
義清は父と荒川氏（当時平野氏は荒川氏と言っていた）との約束の文書を盛弘さまのところに持参し、突きつけるように差し出した。
我々にはもう正論を述べることと、それを裏付ける文書（もんじょ）を示すことしかない。これが最後の砦だ。我々に残されているのは道理だけである。盛弘さまはじっと書き物を見つめている。効果があったかもしれない。一縷の望みを抱いた。
横を見ると、信綱が大きく頷いている。それを見て、さらに勇気が湧いた。

「これで、荒川荘を取りまくすべての荘の考えを聞いた。これから熟考し、昼どきが終わったら、裁定を言い渡す。合図するから再び、この場所に集合せよ」
盛弘さまはできる限りの威厳を出そうと苦労しているようである。まるで馬のいななきのような声である。
庭に行き、馬にも餌をやり、家人たちと、持参した握り飯を食べ、竹筒から水を飲んで少しくつろいだ。
そのとき、義清の検非違使への志願のことが頭をかすめた。「鳥羽さまが義清を大いに買っている。成功（じょうごう）の額によっては、評定衆を黙らせ、検非違使になれるやもしれん。くれぐれも、王家に関わることは注意してやれ」とわざわざ叔父が家までやって来て、義清を諭した言葉が甦ってくる。さらには、どうして行尊さまが荒川荘を立巻されたのか、それに平野家がどう絡んでいるのか、また、平等院の領地にするのならまだ分かるが、すぐにそれを鳥羽さまに寄進されたのはなぜなのか、誰がいったいこの度の中心人物なのか、行尊さまか、平野さまか、上皇さまか、それとも上皇さまの近臣の誰かなのか？　それらのことを考えると、これには義清のわからない、深い訳がありそうだった。
身体のどこかに重い塊のようなものが膨れあがってくるのを感じた。それが気になった。「憂き」という言葉が浮かんできた。憂き世か、と思った。すると、「お浄土、お浄土」と言って、先祖さまの祀られている小さな館に手を合わせていた母の姿が目に浮かんだ。
「お浄土」は西や東の彼方にあると母は義清にいつも言っていた。「苦しいことがあれば西や東に手を合わせ仏を拝め。そうしたら仏がきっと助けてくださるから」と母は口癖のようにつぶやいた。義清はじっと西の空を眺めた。その向こうには雑賀崎があり、紀伊の海が広がっている。さらにずっと先、空の向こうに浄土がある。
浄土の方から風が吹いてきた。空の清々しさをいっぱい含んでいるものだった。すっと身体を通り抜けていく。すると、身体が軽くなる。瞬間だが、輪郭の定まらない得体の知れない塊が身体から抜けていくような安らかさを覚える。風がかすかな音をたてる。それが声の低いお経のように聞こえる。
突然、木をたたくような音がして、「お集まり願いたい」という声が館の方から聞こえた。だが、義清はしばらくはじっとしていた。それからゆっくりと、正殿の間へ向かった。
朝と同じように正座し、隣にそっと目をやったが、兵（つわもの）らしい信綱も緊張しているのか前を向いて微動だにしない。
国守の公重さまが先導して盛弘さまが入ってきた。一段高い段の上に登り、二人は座った。
「それでは、院使、奥盛弘殿から院庁下文（くだしふみ）をお読みいただく、謹んでお聞きするように」
盛弘さまは朝我々に示した紙を竹筒から恭しく取り出して広げた。
「言っておくが、これは吾が各々に言い渡すのではない。院庁、すなわち鳥羽上皇さまが、各々に言い渡すのである。それをよくわきまえて、聞くように、いいな」
「ははあ」
義清は鳥羽と聞いただけで自然と頭が下がり大きな声を出した。横の信綱は頭を少し垂

れただけで、声はまったく出さなかった。

「では言い渡す。荒川荘の四至は、東は桧橋峯ならびに黒川を限り、南は高原(たかはら)ならびに多須木峯を限り、西は尼岡ならびに渓谷を限り、北は牛景渕ならびに紀陀渕に限る」

北は、牛景渕、紀陀渕、何？　これでは段地区のほぼ半分は荒川荘に属すことになる。段地区は元々、紀ノ川の北側にあった。それが紀ノ川の洪水や流れの変化で、南側になってしまったのである。だから、段地区は「田仲の里・段の郷」と呼ばれているではないか。

「これでは納得しかねる。書き付けには、ちゃんと段地区は田仲荘に属するとなっているはず」と言おうとした。それを察してか、盛弘さまは先に声を出した。

「皆から提出された書き物は大いに参考にさせてもらった。例えば田仲荘の古文書(こもんじょ)には、例え紀ノ川の流れが変わっても、ここに書かれてあるとおり、南側も田仲荘にするとある。これを守らせてもらった。これは上皇さまのおさしずでもある。故に、この文書(もんじょ)に書かれてある通りにさせてもらった」

何を言う。それなら、段地区はすべて田仲荘ではないか。どういう理由でそんなことを。

「この古文書には紀ノ川北岸の田仲荘は、川端(かわはし)から三百尺となっている。きちっと川端から三百尺のとこに線が引かれていてそう書かれている。つまり、川から三百尺が田仲荘に属すると書かれているのだ。現在、この規定を正確に守ると、丁度、渕までとなる。従って、渕は田仲荘に属するが、それ以南は荒川荘に属することになる。それ以南も耕されたところがあるが、それは、荒川地区が平等院のものとされてから耕されたもので、認めるわけにはいかない。洪水で田畑が流れてしまった。前のものはすべて消えたも同然、村だって、消えたのだ。すべてが新しくなったと考える。平等院のものとなってから耕された所はむしろ奪取したものと考える。いいか、評定衆の中には、紀ノ川南岸をすべて荒川荘にすればいいという者もいたが、それには従わず、文書通りにせよというのが上皇さまのお考えだ。紀ノ川の南側も田仲荘にきちっと入れてある。文句はないはず。あなたはお若い、これから仕官される御身だ。上皇さまにどれほどお世話になるやもしれん。そこは、くれぐれも慎重にな」

文書(もんじょ)には、例えば川が北に三百尺ずれれば南側三百尺は田仲荘のものと見なす、と書かれていた。それはあくまでも例に過ぎないのだ。義清はそれを言おうとしたが、言葉が出なかった。鳥羽さまという一言がすべての言葉を止めてしまった。ただ、黙って頷いた。

「今は何を言ってもだめ。あとはいかに自分たちの力をつけるかだ。ここはひとまず矛を収めておけ」

平信綱は義清の耳元に口を持って来て、小声でそう言うと義清を見てにやりと笑った。その時はお互いに力を合わせようや、という意志をひしひしと感じとれた。

「では、役人に榜示を打ちに回らせる。各荘からひとり、監視人をだすように」

公重は義清のほうは見ないで、荒川荘の方を向いたまま言った。

帰り着いた田仲荘の屋敷で、義清は二歳違いの弟の仲清と遅い夕食を共にしながら彼の

態度に何か変化がないかと気遣ったが、今のところ何もなかった。
　田中荘の屋敷に帰り着いたとき、迎えに出てきた仲清に荒川荘の四至のことを話したが、仲清は「そうなると思っていた」と言うだけだった。ただ、そういうとき、ふっと笑いを漏らした。その笑いはどこかで見た笑いだった。そう、平信綱が院庁下文を聞いたときに義清を見てにっとしたあの笑いとそっくりだった。
　義清は不吉なものを感じた。信綱はもう四十に近い。仲清はまだ十五歳を少し過ぎただけだ。だのに同じ笑いをするとは。
　どういう訳か仲清が平信綱といっしょになって兵を率いて、荒川荘に攻め入っている姿が思い浮かんだ。そんなことはあり得ないはずだ。吾が当主なのだから、決してそんなことはしない。だが、今日の平信綱の「そのときはいっしょになってやろう」と言った言葉が気になった。即座に、「『平氏』といっしょにやれば、佐藤家はつぶされるぞ」という訳のわからない思いがどこからともなく湧いてきた。
「気をつけろ、義清」という声まで聞こえた。どうもそれは父の声のような気がする。
「今年は、日照りがきつく、多くの田圃が干上がった。来年もまた、同じようなことになったらたいへんなことになりますね」仲清が言った。すでに四至の件から別のことへと興味が移ったようだ。
「今年の米はいつもの年の米とは違いますよ」と付け加えた。
「来年は飢饉になるということか」
「そう思います、間違いなく」仲清は言った。
「我々の国はありがたい。紀ノ川と、紀伊の山々のおかげで、少々の日照りでも水には不足しないから」
「ですから、今年の米はとりわけ大切にしないと」
　仲清の思いは分かっている。今年の米は例年よりも値打ちがでる。それを生かせば、成功（官職を得るために差し出すお金）のための絹布を例年より多く得られる。そう言いたいのだろう。何だか自分がとても悪いことをしているような気さえする。成功などしないでも仕官ができないものか、とつくづく思った。
　どうも成功は意にそまない。銭で官位を買うというのはどうも納得がいかない。弓矢や剣の力だけで仕官者を決めてくれればいいものを。それに、そうまでして兵衛尉にならなければならないのか。昨年は内舎人（天皇の身辺警護をする官人）に志願したが、なれなかった。どうも成功の額が足らなかったらしい。佐藤家のみんなは何としてでも来年は成功させようと節約に節約を重ねている。田仲家は豊かな家だから、絹や米などいくらでも出せるなどと言っている輩がいるらしいが、とんでもない。みんなが犠牲になってくれているのだ。
　それに報いるためにはぜひ官位を得なければならない。官位を得ることは、佐藤家を安

泰にすることである。またそれが、家人を安泰にすることであり、荘の農民たちを安泰にすることである。

やはり、父の遺言のとおり、できるだけ早く仕官を成功させなければならない。仕官が成就してこそ父の死で揺らいだ佐藤家を立て直すことができる。

そこまで考えたとき、突然、仲清が立ち上がり、板の間への上がり口にしつらえてある剣の置き場へすっ飛び、剣を持った。お膳が揺れ、お椀が汁ごと吹っ飛んだ。仲清の勘は鋭い。何かを感じたのだ。

それに促され義清も身構えた。

「たいへんです。ご主人さま。たいへんです」

戸口の障子が開けられて、家人で雑掌係の善吉が倒れるように入ってきた。

「どうした」

「与一や弥右衛門や彼らの一族、それに段地区に田圃のある村人たちまで門のところへ押し寄せてきています」

「何！」仲清はすでに刀のつかに手をかけ、裸足のまま、土間へ降りようとしていた。義清は彼の腕をつかみ、それを制止した。

「吾が会う。おまえは前に出るな」と叱りつけるように怒鳴った。

「全員、客間へ通せ」と善吉に言った。

「いいんですか。裸足で来たやつもいますが」

「いい。客間は彼らのための部屋だ」

義清は、食事場所から、立ち去り、着替えの間へ入り、立ち烏帽子をかぶり、単と裾くくりのない下袴をはき、あこめをつけ、指貫と狩袴をまとい、狩衣を着けた。これでよし、狩衣姿になったはずだ。

客間へ行くと、数十人の農民たちが、突然、客間に通されたので、驚いたのか、静かに座っていた。

「いずれ、こちらから来ていただこうと思っていた。そちらから来ていただき申し訳ない。皆の知ってのとおり段地区が半分が向こうにとられた。だが、なんとか、紀ノ川南もこちらの方に入れてもらった」

「何を言っておられる。とられた身になってみろ、これでは生きていけない。領主さまは我らに死ねと言われるのか」

「そう、そう」とあちこちで賛成の声があがる。

「いや、段地区全部をこちらにできなかったことは吾も残念でならない。申し訳ない。お詫びいたす」

「当主さまはお詫びしてすむかもしれないが、我々は田んぼをとられ、流人になれとでもいわれるのか」弥右衛門の悲痛な声がとどろく。

「当主さまのお考えをお聞かせくだされ、我々に我慢しろと」与一が言う。

「みな、そう興奮するな」

「これが興奮しないでおられましょうか。領主さまは、今作っているところは田仲荘になる、安心せよと言っておられたではありませんか」

「確かに。だが、これは院庁からの命令でいたしかたのないことだ。謝る。申し訳ない」
義清は頭を板の床まで下げた。
「これでは我々は明日から生きてはいけないということですぞ」
「わかっている。それで、与一、減ったのはどのぐらいか」
「八反です」
「弥右衛門のところは」
「同じほどで」
「減らしたのはすべて吾の責任である。申し訳ない」
再び頭を下げた。
「だから、謝ってもらっても、我らの田んぼは帰ってこない。どうして生きていったらいいのか。それをお尋ねしているので」
「そうだ、そうだ。どうしてくれるのだ」
「わかっている。だから、すべて吾の責任だと言っている。いいか。これで納得してもらいたい。打田村に我が家の田んぼが一町ある。それを与一に。上野村に同じく一町の田がある。それを弥右衛門に譲り渡す。それをおのおのの名田（みょうでん）としてもらってよい」
「何を言われます。それはなりません。それらは先祖代々、佐藤家が引き継いできたもの。気でも狂われたのか、兄上。それはなりません」
部屋の端で農民たちとのやりとりを聞いていた仲清は大声を張り上げて義清を制止した。
「黙れ、当主は吾ぞ。吾が決めたのだ。何を言う」
鋭い声で、仲清をにらみつけながら言った。あまりの鋭さに、村人たちは水面（みなも）のように静まった。咳する者もない。
「痛みはすべて吾が引き受けるのだ。それが領主のつとめだ」
「荒川のやつらは、院使を公文（くもん）にすると言って、自分らに都合のいいようにしようとしたのだ。うちの領主さまは、そんなお人ではない。清い心のお人よ」誰かが言う。
「領主さま。今、おっしゃったことに二言はないでしょうな」
「ない。盛弘さまから言い渡されたときから、そう決めておった。二言はない」
「わかりました。こんなに大勢で押し寄せてきて申し訳ない、お許しのほどを」と与一が何度も頭を下げた。弥右衛門は床に頭を擦りつけ、しばし上げなかった。

京の家に帰ってきても紀伊のことが絶えず心を去来した。それで、何度も紀伊に行った。しかし、二ヶ月ほどは何もなかった。ところが、一昨日、雑掌の善吉が馬を飛ばして、京までやってきた。与一家の作人や弥右衛門家の作人が、荒川荘の何ものかに捕まえられて、どこかに連れ去られたというのである。さっそく雑掌の善吉が下司の平野家に出向いて、居所と、彼らを解き放すように申し入れたが、知らぬ、存ぜぬで取り付く島もなかったらしい。
紀伊にいた仲清は、もし、彼らを解き放たなければ、平野家に火を放つ、と息巻いているらしい。そのようなことをすればとんでもないことになる。とりあえず、荘に帰郷して

もらい、どうするかをお決め願いたいというのである。雑掌の善吉はそれだけ言うと、夜を徹して帰って行った。それで、義清は、昨日、伏見から舟でなにわの八軒屋まで来て陸に上がり、馬を借り、熊野街道を雑賀まで来て、そこで、迎えにきていた馬に乗り替え、紀伊の田仲荘までやってきたのだ。着いたのは夕暮れであった。

翌朝、目を覚ますなり、書院造りの家の庭に出て、母の教え通り、西を向いて念仏を十回、東を向いて同じく十回唱(とな)えた。それからまた、振りかえり、日がまだ昇らない西の紀伊の山々を眺めた。山の向こうに彼岸があり、此岸と彼岸を分ける分厚い衝立のような感じがした。山の上はすでに濃い柿色の帯が南に向かって流れていき、さらにその上には透明な藍色の帯が流れていた。それらは丁度、彼岸を表す光のように思えた。彼岸がかすかに見えている、そのような感じである。東の山々に向かっても合掌し、念仏を唱えた。

念仏など、仏に関わることをしているときが一番心が安まる。だが、ここのところ、自分で心に決めた阿弥陀経の写経も最近ではまったく手もつかずにいる。それどころか、古今集を暗唱することもできていない。今日も崇徳天皇さまが催される歌会に出席できない。崇徳天皇さまには丁重なお詫びの手紙を出しておいたが、私がいないことを一番残念がっておられるのは崇徳天皇さまではないか。すでに、崇徳さまとは歌のやりとを何度もしたし、天皇が私的に催される歌会にはかならず参加した。だが、今は身体が二つあっても足らない。歌会と田仲荘の仕事とが重なってしまった。田仲荘の預所、徳大寺の随身と二つの仕事をこなすのはたいへんである。その合間を縫って、仏道の修行や和歌の修行をしなければならない。

ときどき、遠つ祖(とおつおや)・秀郷さまからのお諭し「兵(つわもの)の修行に専念せよ、和歌などどうでもいい」という言葉が蘇ってくる。するとまた必ず「歌の道をこそ優先せよ。いい歌を作れ」といった声が聞こえてくる。

しかし、今は、そんな愚痴めいたことを考えているときではない。自分の荘で起きた事をどう解決するかを第一に考えなければならない。それが家督を継いだ者の責務だ。

義清にはまだいい考えが浮かんでこない。とりあえず、彼らはどこに捕らわれているのか、なぜとらえられたのかも知りたい。それがわからなければ動きようがない。

本当に奥家にも平野家にもいないのか。彼らが知らないことなのか。ただの人さらいの仕業なのか。もしそうなら、彼らから要求が来るはずである。

とにかく、こんなこともあろうかと、荒川荘の住人・荒川元幹(もとみき)という親しい村人をひとりつくってある。彼は平野家の一族だが、平野家から無視されていて、荒川荘のやり方にはかなり批判的である。それに、歌がうまく、義清に教えを請うために、ときどき歌を持ってやってくる。彼から情況を聞きたい。そうすればもっと正確なことがわかるだろう。ただ、この時期、こちらから日中、彼の家に行くことは難しい。彼から事情を聞きに来たと思われ、彼が村に居づらくなっては困る。今夜でも、夜陰にまぎれて彼の家に行くしかない。

そんなことを考えながら、義清は屋敷に戻り、仲清といっしょに朝食をとった。

「兄上、ここで弱みを見せたら、彼らはますます増長して、何をしでかすかわかりませんぞ」と言った。仲清はこのようなために、有力農家や田堵の息子たちを集めて、武芸の手

ほどきをやっているらしい。それを今こそ使いたいと思っているに違いない。しかし、それをさせてはならない。ことは穏便に済まさないとますます荒川荘と我が荘との村人たちの仲が悪くなり、諍いが絶えなくなる。そのようなことに精力を使わせてはならない。それよりも、田畑を耕し、少しでも作物の生産を多くした方が双方のためである。それに、鳥羽さまの耳にでも入ればたいへんなことになる。

「仲清、そなたの気持ちはよくわかるが、ここはとりあえず捕らえられた者たちを取り返すことが先だ。そのために何故捕らえられたのか、その原因を知りたい。あまり慌てて、ことをなしてはならんぞ」とやや強めに言った。仲清は黙って義清を睨んだ。どうも、兄上がそう言うなら仕方がない、といったふうだった。

朝食を済ますと、与一と弥右衛門を呼びにやった。与一と弥右衛門がすぐにやってきた。彼らを客間に通した。

「作人にいったい何をやらせていたのだ」と尋ねた。

「ただ、今年、植えた米の刈り取りにいかせたまでで」と与一が言った。

「わたしのところも与一と同じで。ただ、その日は段地区に行くつもりはなかったのですが、与一の作人が行くと言うので、昼飯などいっしょに食べられていいかなとか言って急遽、段地区の田圃に行くことにしたそうで」と弥右衛門が言った。

「二人は仲がよかったのかね」

「はい、そのようで」

「それで？」

「彼らの嫁が言うには、田圃へお茶をもって出かけたら、田圃の中に十人近い人が大声を出し合い、殴り合いをしていたそうで、荒川荘の人間かと思われる男たちが、彼女を見ると、慌てて、数人で与一と弥右衛門の作男を捕まえて、引きずるようにして連れ去ったというのです。どうも、相手方も、その稲を刈り取りにやってきたようで、その土地が、この間の四至で、荒川荘に入れられた所です」

「どうも、即座に、その田圃が、自分たちの荘がもらえるものと思い、刈り取りにきたようで。それまで何の世話もしていないくせに、今年の収穫は自分たちのものときめてかかったようで。当然、今年は植えた者の取り分でしょう。渡すとしたって、今の収穫を終わって後でしょう。植えもしない。世話もしない。それで、穫れた物だけが自分たちのものにするって、それはないでしょう」と与一が言うと、弥右衛門も大きく頷いた。

「ここを永遠に返さないとでも思ったからかなあ」

「それはあり得ることだ」義清が答えた。

「だって、田圃を分け与えてくださった預所さまにしたって、今期の収穫は、植えた男が穫ることになっているでしょう」と与一は、奥目を光らせ、口から唾を飛ばして言った。

「わかった。収穫した物は誰の物かでもめ、それで荒川荘のやつらが二人を連れ去ったのだな。原因がこれでわかった」と義清が言った。

なんと小さなことでもめるのか。だが、そう思うのは吾が貴族のためで、農民たちはそうは思えないのだ。米一粒が、黄金のように大切なのだろう。

すぐさま彼らに、与えた田圃の今年の米は彼らに与えると言ってやれば、この問題が生じなかったであろう。だが、そう言えない事情がこちらにもあるのだ。与一や弥右衛門の収穫物を与えてしまえば、その米を育てた我家の家人の努力はどうなる。報われないことになる。それでは、彼らにとってひどすぎる。

これの根本的な解決は、範囲の執行を米収穫後まで待つということでしかありえない。荒川には、実質的損害はまったくないのだから、これはのんでもらわねばならない。そこまで考えの及んだ義清は、荒川荘との取引以外にはないと判断した。そのためにも荒川荘の様子を探らねばならない。とりあえず、今晩、荒川荘で唯一、義清と心を通じ合っている荒川 元幹（もとみき）の家に行くことにしようと思った。

夜、渡し舟を操り、向こう岸に着けた。幸い、満月に近く、舟を操るのに苦労がなかった。村人に見つからないように、辺りに注意をはらいながら、畦道伝いに、元幹の家を目指した。

元幹の家の門戸を叩いた。門の横の部屋に寝泊まりしている家人が気づき、「どなたさまで」と尋ねた。「田仲荘の預所、佐藤義清と申す者、元幹どのにお会いしたくて参った」と言った。「しばらくお待ちを」と言って、母屋に取り次ぎに行った気配がした。しばらくすると門が開かれ、元幹が迎えに出てきた。

「さあ、どうぞ、どうぞ」

すぐに客間に通された。

「おいでになると思っておりました」と元幹が言った。

「二人の作男の件でございましょう。そのことはこちらでも噂になっております」とつづけた。

「して、誰が？」

「それはよくわかりませぬ。だが、何故というのはわかります」

「では、なぜ？」

「どうも、どこかの作男が、先日の四至決定で、荒川荘の地区になったとされる田圃の米を刈り取りにいったそうで。そこで、居会わせた旧地主の作男ともめ、荒川荘の 地下（じげ）（この村）の者も加勢して、お宅の荘の作男を捕らえたそうで」

与一らの言うとおりだ。

「捕まえられた男たちは今どこにいる」

「それは吾にはわかりかねます。ただ、すでに、オトナ衆（村のリーダーたち）が寄り集まって、田仲衆が攻めてきたらどうするかと相談しているという噂もささやかれております」

ううん、と義清は呻った。四至を決めるときには、今年の収穫物は、旧来のまま、という取り決めをしておくべきだった。

今回は、その収穫物をどうするか、荘と荘で決めなければならない。再び、義清の肩にどっしりと重いものが被さった。

「して、平野どのはどのようにお考えか」

「わかりませぬ。ただ、そこまでして、収穫物を手に入れようとしている以上、それを放棄させることは難しいでしょうね」

「収穫物をお渡しすると言うまでは人質は帰さぬおつもりなのだろうか」

「少なくとも捕縛した者はそのつもりでしょう」

「どこにおるかわかりませんか」

「わかりませぬ」
「それをするために、お力添えをいただく訳には参りませぬか」
元幹は、突然言葉を発しなくなり、黙ったまま屋根裏を眺めた。
「噂を聞いたらお知らせ願えればありがたいのですが」
「いや、できるだけのことは致します。だが、探るとなるとその手立てがわかりかねます」
「ご無理をなさらなくて結構、わかったことだけでいいのです。お願いします」
「わたしとて、田仲荘と荒川荘が仲良くしてもらわねば困ります。大手を振って義清さまのお家へ伺うことができなくなりますから」
「本当に。そうなるように努めますので、よろしくお願いいたします」
そう言ったとき、ふと、次の句が思い浮かんだ。

たが方に心ざすらむほととぎす境の松のうれになくなり（残集・四）

元幹の家から帰ってきてから寝床に着いたが、一睡もできずに朝を迎えた。今朝もまた西と東の空を見上げながらお念仏を十回ずつ唱えた。空が曇っているせいか、どんよりと薄暗く、東の方を眺めると、山並も埃の幕に遮られているようだった。
家に入ると、戸口の所に仲清が立っていた。
「兄上、眼が赤こうござる。いかがなされた」
「いや、捕らわれたものたちはどこにおるのか気になって」と答えた。
「昨晩はどこかにお出かけになられたが、どちらへ」
「いや、その辺をうろついたまでよ」
「言えぬ所へでございますか。いや、村の者どもが捕まえられたと知って騒ぎ出しはしないかと」
「吾もそれが心配で」
「いかがいたしますか」
「なんとか、それはお前の力で押さえてくれないか」
「わかりました。それはこちらでやってみます」
「頼む。あとはこちらで何とかするから」
「兄上、いざというときには、力ずくでも取りもどすお覚悟をお持ちくださいよ」
仲清は義清を睨み付けながら言った。
「わかっている」と義清は答えた。そうは絶対させないぞという思いも起きた。
朝食を終えてから、脇殿に籠り、久しぶりに、持参した阿弥陀経を写経した。
又舎利弗　彼土何故　名為極楽　其国衆生　無有衆苦　但受諸楽　故名極楽　又舎利弗……
（舎利弗よ、かの土地をどうして極楽と呼ぶのかと言えば、そこの住人には、心身の苦しみがまったくなく、永遠の安らかさに包まれているから、極楽と呼ばれるのです。また舎利弗よ……）
経を写していると、心の中の白い塊や眼の前にあった灰色の幕がだんだんと溶けていく。何だか、経を写すことが、極楽へ呼ばれていくような気がしてならない。それに加えて、この世の中にも極楽に近いような所がありそうだとますます思えてくる。それは経を写すところであろうか、経を唱えるところであろうか、仏について語るところであろうか、

それとも、自然に包まれたところであろうか。歌を詠むところだろうか、現世のどこかにもそのような所があるに違いない。もしあるなら、そこへ行ってみたい、このような人々の争いのない世界へ。

とその時、戸の向こうから、「入ってもよろしいでしょうか」と言う声が聞こえ、家人の男が障子を開け部屋に入るなり、「与一と弥右衛門が、捕らえられている作人の嫁を連れて参っております。いかがいたしましょう？」と尋ねた。

義清は筆を置いた。今日はここまでとしよう。このようなことをしている場合ではない。捕らわれている作人のことを思うと一刻もはやく取り戻してやらねばならない。そのための方策を考えつかねばならないのだ。

「夫の安否を聞きに来たのであろう。正殿の客間に通しておいてくれ」と答えた。

義清は置いた筆と経を眺めた。もう少し写経していたかった。しかし、そうはいかない。いつも、経を読んだり、歌の本を読んだりしていると、きまって何か用事が起こり、それらが中断される。誰かが意地悪をしているようにさえ思えて、ときには叫びたくなるほど腹立たしいときがある。しかし、北面の武士や、田中家の当主を務めている限り致しかたのないことだ。今回だって、捕らわれた男の家族としては、そりゃ、居ても立ってもおられないだろう。しかし、まだこちらには何の方策も立っていない。そのような中、家族に会うのは気が重かった。だが、致し方がない。彼女たちの不安を取り除いてやらなければならない。それが荘民を預かっている佐藤家の当主の役目だ。

義清は立ち上がり、客間へと向かった。

お互いに形式的な挨拶を済ますと、「うちの夫はどこにおるのでしょうか」と妻たちが交互に尋ねた。

「残念ながら、それはまだはっきりしたことは申しあげられないのだ」

「はっきりとでなく、予想でもいいんです」

「今のところそれさえも。今、探りを入れているところで」

その後、昨夜、元幹から聞いたことを告げた。

「もうすぐ、居所もわかる。そうしたら絶対自由の身にするから。安心しておいてくれ。間違いなくそうするから」

「絶対に取り返してくださいよ。間違いありませんね」

妻たちが必死の目付きで義清に懇願した。彼女たちの眼からは血の熱線がほとばしってくる。

「我々のお手伝いできることなら何でもいたしますから」と与一も弥右衛門も頭を下げた。

「安心しておいてくれ、間違いなく取り返す。わたしたちに任せておいてほしいのだ。決して軽はずみなことをしないように。与一や弥右衛門がみんなを押さえておいてくれ」

「わかりました。それは先程仲清さまからもとくと言われました。息子たちは平野家へ剣を持って討ち入る覚悟をしているようで、仲清さまが声をかけられれば三十人ぐらいはすぐに集まると言っております」と与一が言った。

「そんなことは絶対させぬように、すでに取り返すめどがついておるから」

義清は嘘をついた。何の方策も思いつかない。だが、そう言うとそれを思いついたような気がした。いや、すぐにでも思いつくような気がする。

「義清さまの言葉を聞いて安心した。おまえたちも安心してもう少し待つように。義清さ

まが取り返してくださるから」弥右衛門が彼女たちの顔を眺めながら言った。妻たちは頷いている。

何としても考えつかないといけない。いや、それがすでに頭の先まで来ている。もう少しで意識の先に現れる。

彼らは退席の挨拶をすると、部屋から出て行った。

彼らが立ち去ると部屋はしんとした。何の音も聞こえない。まったくの無音の世界になった。その中で、両手を膝の上に置き、眼を宙の一点を見つめ、背筋を直立させてしばらく座りつづけた。もしこれが歌を考えるために座っているのならばどれほどいいことだろうかと思った。

再び「入ってもよろしいでしょうか」と言う家人の男の声がした。

「どうした」と声をかけた。

「元幹さまからの使いの者が来て、このような書き物を」

「そうか、はやくその書き物をこれへ」

家人が書き物を渡すとすぐに出て行った。義清は急いでそれを読んだ。

そこには、捕らえられた男たちの居場所が見つかったと書いてあった。そこは平野俊春（としはる）の家人である徳太郎の屋敷ということである。

一統の平野守景の父、善右ヱ門が病に伏しているので、元幹が病気見舞いと称してそこを訪れ、守景から聞き出したという。守景は本家と親しくしていて、特に、徳太郎とは親しく、相談相手にもなっているのだという。だから絶対に間違いないと。

平野本家の当主でもあり、荒川荘の下司でもある平野俊春は鳥羽上皇さまから周防守（すおうのかみ）にも任じられており、きっと現地に赴いているはずだ。その子の俊季（としすえ）は北面の武士を目指して京に滞在しているという。実質、徳太郎が荒川荘のことを全権ひっかぶって仕事をしているようなものだ。よし、それなら話が早い。徳太郎と交渉すればいい。そのことはまだ俊春や俊季には通じていないようだ。徳太郎の一存でどうにでもなるということである。

義清はそう思うと、すぐに徳太郎の家を訪れたくなった。しかし、まだ、どのような交渉をすればいいのか定まってはいない。彼をうんと言わすいい方法を思いつかねばならない。

とその時、従兄の佐藤憲康（のりやす）が言ったことを思い出した。憲康（のりやす）はすでに北面の武士になっていて、院庁のことをよく知っているのだ。

彼はあるとき、荒川荘の実質的支配者である下司を平野俊春にしたのも、また彼を周防守（すおうのかみ）にしたのも待賢門院であると言っていた。義清は、俊春が鳥羽上皇に気に入られ、忠勤を励み、その恩賞として、平野の荘をもらい、周防守にもしてもらったのだろうと思っていた。どうもそうではないらしい。待賢門院に忠勤を励んだためで、「女性だからといって侮ってはいけない。門院は上皇に次ぐ権力者で、荘園や国司に関する権限をかなり持ち、

一部の国守を任命することもできるそうである」と言っていた。
俊春どのが周防守の地位にあるのも、また、平野家が今の状態にあるのも待賢門院さまのおかげだということだ。この際だ、それをうまく使えないだろうか。

徳太郎の家は農家としてはかなり大きい。土塀で囲まれ、門構えもしっかりしている。もちろん農家なので寝殿造りの庭とは違うが、前栽などのある庭があり、高い茅葺き屋根の母屋などがある。また、母屋の周囲には独立した小さな家や倉などがあり、かなりの農家であることがわかる。おそらく田堵（田地を自ら経営する有力農民）として広い田畑を持っているのだろう。作人や下人を数多く雇っているということである。前もって訪れることを告げてあったので、徳太郎が門まで迎えに出てきた。
客間に通されて挨拶を済ますとすぐに本題に入った。
「与一と弥右衛門の家の者がそちらに連れ去れたということで、引き取りにまいった。捕らえられた理由は、今般、荒川荘の四至内にされた田畑に植えられていた稲をお宅の村人が、刈り取ろうとして、やってこられたそうで、そこで、争いになり、吾どもの作男を捕縛して、そちの村に連れ去ったということで、しかし、植え育てたのは吾たちの方で、与一や弥右衛門がその稲は自分たちの物だと主張するには一理あると思うのですが、いかがでしょうか。その米の成長期間の大部分は、まだ、我々の田畑であるときの物。我々に権利があるのは当然ではありませんか。それを捕縛して連れ去るとは承服しかねます。とりあえず、二人を当方にお返していただきたく参上しました」
「ほうほう、どうしてそういうことをお知りかな、いや、詮索は止めておこう。理由はその通り、誤りはございませぬ。捕らえたのはうちの村人で、捕らえた後、わたしの所へ連れて参った。わたしの方から二人の取り扱いについてそなたさまにご相談申しあげようと思っていた矢先で。そちらがお渡し願いたいと言うからには、何か、謝罪とか見かえりをお持ちいただいたものとお察しいたす。それはどういうものかな？」
「先程申したようにその土地の収穫物は、我々のもので、謝っていただきたいのはこちらの方で。したがって、見かえりの品物など持ってまいりません」
「それは、勘違いもはなはだしい。理にかないませぬ。四至が打たれた瞬間から、あそこは私たちの荘のものになったのです。私たちのものを私たちが穫って何が悪うござるか。あなたたちは私たちの物を盗もうとされたのですぞ。あれをすっぱりとお渡し願えれば、お二人はお返し申そう。そうでなければ返すわけにはまいりませぬ」
「いくいくはあなたたちのものになるとしても、収穫するまで我々に世話をさせておいて、収穫物だけを自分たちが穫ろうなんて、それはあまりではございませんか」
「我々は世話を頼んだ覚えはありませぬ。あなたたちが勝手にしたこと。そのようなことを言われる筋合いはありません」
「つい最近まではあそこは我々の土地だった。稲も我々のものだった。それをすぐにあなたたちの物になるとは到底考えられませぬ」
「それはへりくつというもので」
正義は明確に我々の側にある、と義清は思う。しかし、相手側はすでにそこを占有している。このような場合、いかに理を主張しあっても解決の糸口など見つけることはできな

い。解決の方法は二つしかない。一つは、暴力を用いて闘い、勝った方の言い分にしたがうか、もう一つは、どちらも妥協し合い、一致点を見出す。その場合、正義を主張している立場の者もいったんそれをおろし、妥協しなければならない。もし、暴力を使いたくないなら、第二の方法しかない。しかし、その場合でも、まず、攻めねばならない。そうでないなら、条件のいいところで妥協が成立できない。そのようなことを考えながら、攻める方法を義清は考えた。

「このようなことをお互いに言い合っていても埒があかない。それでは、話を変えましょう。俊春さまは周防守であらせますが、もうすぐ六年になり、新しく国司の任免を内定する季節となります。俊春さまは北面の武士の時、待賢門院さまの警護を担当し、たいへん気に入られたそうで、門院さまのはからいで平野荘を賜り、彼女の推挙で周防守という国司にもなられたとのこと。それはお聞きになっておられるでしょう。ところが、俊春さまは北面の武士をご子息に譲ろうと考え、北面から退かれました。現在、門院さまの警護は藤原義正さまが勤めておられます。それで、門院さまは、次回、周防守を、俊春につづけさせようか、それとも新しく藤原義正にしようかと迷っておられるとか。貴殿はすでにお知りと思うが、吾は徳大寺家の家人でして、実能さまを親しく存じ上げております。門院さまは実能さまの妹君で、何かと相談をなされるとか。もし、この時期、吾を通して、領家である自分の田仲荘に荒川荘の輩が無理、難題を押しつけ、人質まで取って、暴れ回っているということをお知りになり、待賢門院さまにそれをお伝えになったらどうでしょう。俊春にはすでに平野荘を与え、荒川荘の下司にもした。この際、周防守は藤原義正にしようと思われるのが必定。貴殿はそう思われぬか」

義清がそこまで言ったとき、徳太郎の顔に緊張が走るのを見てとった。よし、これなら、もう一押し、何とか人質と収穫物を手に入れることができる、と確信した。

「もし、わたしの条件を呑んでいただけるのなら、徳大寺実能さまにもその子息、公能さまにも、また待賢門院さまにも、今回の件は報告せず、荒川荘の俊春さまはなかなかの人物で、周りの荘ともめ事が起こっても双方納得できる形でおさめられ、吾が荘でもたいへん人気があり、信頼されております、と言っておきましょう。いかがなものですか」と言った。と、徳太郎の頬が一気に明るくなり、にこやかな顔付きになった。今までの緊張がかなりほぐれたようにも思えた。

「条件は次のようなことです。もし、収穫物を田仲荘のものと認め、両人を帰していただければ、今回の出来事は一切他言はいたしませぬ。もちろん、徳大寺実能さまにも申し上げません。それどころか、俊春さまは荘民に信頼され、敵である田仲荘の荘民にまで、あの方は立派なお方だと言わせるほどです、と告げておきます」

「ううん」と徳太郎は呻った。思いもよらない提案だったようだ。これは損にはならない

と思ったに違いない。第一、俊春さまが周防守がつづけられるというのは、平野家にとって最大の喜びであるはずだ。地方において「ある国の国守」であるというのが尊敬される最大の要因である。それで、平野家は荘内にある有力農家を押さえ、中心の地位が得られる。また、領家が何家になっても力を見せつけることができ、下司の権限を確固としたものにできる。

「わかり申した。貴殿からのそれを書いた書状が届き次第、二人はお渡し申そう」

義清は出されたお茶を飲み、お互いに退室の挨拶を交わし、義清は徳太郎の家を出て、紀ノ川を渡り、狭い畦道を田仲荘の家へと向かった。

こちらの思うように解決できた。だが、喜びが湧くどころか、ほっともしなかった。なんということだ、という思いが体中を取り巻いた。このようなことに時間を割き、一生を終えるのかと思うと、いたたまれない思いがふつふつと湧いてきた。例の心の内に潜む白い塊が大きく膨らんだ。

三（一一三五年・保延元年、十八歳）

成功に絹一万匹（一匹は二反＝二十三メートル）（今の金で約三千万円相当）を出し、義清（西行）は兵衛尉になることができ、北面の武士を命じられた。勤所は院の下北面の五軒長屋である。

鳥羽上皇に近づけることはうれしかったが、院や里内裏の見回りなどの仕事はおもしろくなかった。

そのおもしろくもない仕事として、今、検非違使ともども内裏を中心とした左京の警備に出ている。最近、とみに強盗、付け火、強姦などが頻繁に起こり、京職の兵や検非違使だけでは手におえず、兵部省のお偉方が院に来て、北面の武士をお借りしたいと願い出たことから、京の街の警備が北面の仕事として加わった。

二人一組になり、京の街を巡回し、不審な人物がおれば取り調べるという仕事である。義清は平清盛と組んで割り当てられた左京の内裏に近い箇所を巡回した。

「先日の鳥羽離宮での花の宴ではえらく世話になった」と清盛は笑顔で義清に言った。

「あのようなことはおやすいことで」

「白拍子の舞いがあるから、というので宴に参加したら、上皇殿が、突然、北面の武士といえども風雅を解さねばならない。今から歌の会をするなどと仰せになり、歌を披露せよなどととんでもないことを おっしゃった。肝をつぶしたよ。貴殿が横からそっと歌を差し出してくれなかったらおお恥をかくとところだった」

「私がおれば、あのようなことはできるが、貴殿も少しは歌の勉強をしてはどうか」
「いや、それはこらえてくれ、歌など作れと言われたら身体にむしずが走る。なぜ、武士に歌などが必要なのかわからぬ。武士は弓矢や刀や乗馬ができればそれでいい。貴殿はそう思わぬか」
「ああ、それも一理はある」
「そうだろう」
清盛は、うれしそうに何度も頷いた。
「おおい、あれは何だ？」
清盛の顔が突然引き締まった。唇を一の字にして左右に延ばし、眼が獣のように一点に集中し、内から光を出した。それを見て義清も緊張し、清盛の視線の方向に眼を走らせた。
あちこちの家の塀の陰のところに布で顔を覆った男たちが立っている。豪邸の板塀にはしごがかけられ、すでに一人の男が、それを登り、屋敷の中へと飛び降りた。と、大きな悲鳴が響き渡り、それと同時に、門の扉が苦痛の叫びのような音を立てて開いた。と、あちこちの家の影から、男達は門の中へと走り入っていく。強盗に間違いないと義清は思った。すでに、陽はかなり西に傾いているとは言え、陽があってまだ明るい。そのような中で、大胆にも盗みに入るとは、我々を見くびったものだと思った。だが、一方で、これから彼らと対峙しなければならないと思うと、空気が重く、それを吸い込んで、身体全体が何倍にも重くなったような気がした。
「あの家は誰の家か知っているか」清盛が言った。
「いや、この辺のことは何も」
「大江久守の家だ。やつは、貴族だが、密かに運送業もやっていて、大もうけをし、さらには、その金で、米を買い占めては高く売りさばいて、これでも大もうけしている。今は飢饉だ。去年は十年に一度の不作の年で長承の飢饉と言われている。それでも倉には米が大量に積まれている。もっと飢饉が強まったところで高い値段で売るつもりだろう。貴族でも米を蓄えず絹で蓄えている者が多い。だが、絹は食えぬ。家人に渡す米のためにも、絹を米に替えねばならない。それで、絹の値段を下げ、米の値段を上げて大もうけをする魂胆さ。けしからんやつだ。京の衆はそれをみんな知っている」
それを聞くと、義清はいっそう身体が重くなった。ふと、地面を見ると、急に風が吹いてきて土埃が舞い、眼を痛めつけた。
眼を上に向けると、辺りのものが、すべてざらざらした感じがした。板塀も、茅葺きの屋根も、家の中からはみ出している高い木々の葉も、みんな砂をかぶって、ざらざらとし、すべてが灰色がかっている。
「さあ、行くぞ」清盛が力強く言った。
「ちょっと待ってくれ、貴殿は何も思わないのか」
「何を」
「そんな悪賢い貴族を我々が身をもって守ってやらなければならないのか。それはおかしいではないか」
清盛は不思議そうな顔をして義清を見つめた。
「それが俺たちの役目だからさ。俺たちは貴族のための用心棒なんだから」
「その役目を何とも思わぬのか」
「思うさ」

「だったら……」
「だから、武士の世の中を作らねばならないのさ。吾はそのために命をかけるつもりだ。今、俺たちは彼らの使用人なのだ。彼らから恩を売られている。貴殿だって、自分たちが開発した荘園を持っているからといって、それを摂関家に寄進して、摂関家に守ってもらっているではないか。彼らから恩を売られている。恩を返す絶好の機会だ。いや、今、彼らに恩を売っておく。大江久守は役にたつぞ。そこいらの貴族とは違って金をしこたま持っている。いざというときにはそいつを吐き出させる。それに、検非違使が気づき、彼らが大江久本を守れば、やっぱり北面の武士は役にたたない。金で地位を買った脆弱な輩ばかりだと罵られるぞ。貴殿はそれでもいいのか」
「それは困る。吾は脆弱だから躊躇しているのではない」
「だろう。分かっている。だったらつべこべ言わずについてこい」
清盛は、ゆっくりと大江久守の家の門に向かって歩き出した。その姿は、堂々としていて、力が漲っている。義清も彼の後について門に向かった。だが、どうもまだしっくりとしない。しかし、清盛の迫力に圧倒される形で、彼に従うことにした。
邸内に入ると、どういう手段を使ったのか、すでに倉の扉が開かれていて、何人かの男が米俵を担いで出てきた。それを取り囲むようにして、これも四、五人の男がすでに刀を抜いて辺りを見回している。久守の家人たちは、ただ、彼らの周りを取り囲みながら、見ているだけだ。家人のひとりが門に向かって駆け出そうとした。それを知った男のひとりは、走って彼に追いつき、さっと剣を太ももめがけて突き刺した。強烈なうめき声を上げて倒れ、同時に血しぶきが矢のように出た。
「検非違使に告げに行こうなど不届きなやつだ」と剣を刺した男が家人たちに向かって大声を出した。家人たちは青ざめ、何歩か後ずさりした。多くの者は震えている。
清盛はそれを見て「大伴源太（おおとものげんた）の一味かもしれん。気をつけろよ」と呟いた。大伴源太のことは義清の耳にも入っていた。奈良時代、蘇我氏に滅ぼされた大伴氏の末裔ということだ。それが、今、盗賊となって京中を騒がせている。盗みに入って、見つかっても、決して人を殺めないらしい。深い傷は負わせるそうだが命は奪わないということだ。それに剣はかなり立つそうで、多くの武士たちも歯がたたないということである。
「検非違使などに告げなくても、ここに北面の武士が来ておる。こやつらは不届きな奴らだ。お相手申す。我らは大江殿をお守り申す」
「騒々しい、どうした」男が言った。
家の戸口から出てきた男は、四十代ぐらいの男で、袴の帯を掴んでいる。男の顔は髭だらけで、真っ黒に日焼けした頬に、窪んだ眼から鋭い視線をほとばしらせる。それに、いやに背の高い、鼻筋の通った、いい男だった。がっしりとした腕がいかにも強そうである。
「名を名乗れ、我々は北面の武士、左衛門佐（さえもんのすけ）、平清盛である」
「同じく北面の武士、左衛門尉（さえもんじょう）、佐藤義清である」
二人は男の前に立ちはだかったが、その間にもせっせと一味の者は米を運び出している。
「名乗るほどのものではない。だがお相手申す」

男は即座に義清めがけて切りつけてきた。義清はひょいと身体をかわして、それをよけたが、なかなかの剣の使い手であることがわかった。相手は少しよろけたが態勢を立て直し、今度は清盛と対峙した。それを見ていた久守は慌てて、大声を出した

「こら、うちの者、平殿をお助け申せ」

家人たちはまったく動く気配はない。

「名を名乗れ」またも清盛は大声を出した。

「大伴源太(おおとものげんた)」

男が言うが早いか清盛の肩をめがけ剣を突き刺した。清盛はさっと横に逃げたが、袖が吹っ飛んだ。清盛は剣の裏で彼の脛をこっぴどく殴りつけた。さらに、返す剣で肩を打ちつけた。素早かった。

そのとき、義清の眼の前を別の男の刃が横切った。身体が勝手に反応してくれて、一撃を食らうのを免れた。すぐさま、振り向き、剣の裏で相手の首を殴りつけた。刃のほうでやれば、首が飛んでいるところである。相手はううとうめき声を上げて倒れた。

「相手は手強いぞ、逃げろ」

源太は倒れた男を引き摺りながら、出口へと向かった。

「野郎共、米を置いておけ」義清が米を奪い返そうとして彼らの後を追いかけようとした。

清盛は義清の帯を持ち、それを引き留めた。

「運び出した米ぐらい彼らにやっておけ」

清盛は笑いながら首を何度も縮めた。

大江久守は庭に這いつくばり、地面に深々と頭を下げた。

「平殿、佐藤殿、かたじけのうぞんずる」かなりの間、頭の先を地面につけ、上げなかった。

「言って置くが、我らは検非違使ではないぞ、院の北面の武士だ。くれぐれもお忘れなく」

清盛は門の方へと歩き始めた。

「あのう、ちょっと、ご休憩でも」と久守が言った。

「俺たちは忙しいのだ」と清盛が答えて、歩みを止めなかった。そして、振り向きざま、義清に向かって「うまくいったなあ。貴殿には人殺しを見せたくなかったから。いずれは見ることになると思うが」と言った。

四（同年、十八歳）

義清(のりきよ)が預所(あずかりどころ)の用で紀伊に来ているとき、それを見計らったように、叔父の、つまり父の次弟にあたる俊範(としのり)が屋敷にやってきた。客間に上がるやいなや「仲清はおるか」と食事処に向かって大声を出した。顔はにこやかだが酒でも呑んできたのかと思うほど赤味がかっていた。緊張しているのかもしれない。

困ったことになった、と義清(のりきよ)は思った。自分にも今、どう叔父に対応すればいいか戸惑

っている。叔父が、仲清の縁談の返事を聞きに来たのだ。叔父はこれを慶事ととらえる理由も分かりすぎるほど分かっている。仲清にとって決して悪い話ではない。だが、仲清は首を縦に振らない。

「まあまあ、お忙しいところをわざわざ、それに私共のことを気遣ってくださって」

母は何度も叔父にお辞儀を繰り返し、分厚い上敷きを勧めてからお膳とお茶を持って来させた。

「わしは兄の康清（義清の父）から彼が死ぬ間際に、この家の後のことは、俊範、お前にお願いする、よろしく頼むと言われた身なのでのう。そのときは義清はまだ七歳じゃった。あれからもう何年たつか。義清は幸い北面の武士になってくれて、もう何の心配もないのだが、弟の仲清のことが心配で」

義清の父が亡くなって以後、俊範叔父は何くれとなく面倒を見てくれた。義清の元服の儀式も彼が中心となってやってくれた。もちろん、仲清の元服の式は義清がやったのだが、そのやり方をいろいろと教えてくれ、助けてくれたのも叔父である。

「ご心配をおかけし、申し訳なく思っております」義清は丁寧にお辞儀をした。

「聞いたぞ。京からのたよりで。貴殿、先だって、盗人の大伴源太をとっちめ、大江久守を守ったというではないか。大したものじゃ。何しろ相手は五十人もいたそうで。それを切っては棄て、切っては棄てと言うではないか、京の街はおおさわぎじゃ。さすがは北面の武士、と言うてな」

「いや、たいしたことではありません。それに五十人とはちと大げさすぎます」

「そうか、それでも今まで大伴の何とかは刃向かった武者たちに負けたことがないというではないか。それをあっさりとやっつけたというのはさすがじゃ。上皇さまも上機嫌じゃろう」

「はあ、清盛さまと二人、おほめいただきました」

「そうじゃろう。お前のことは、爪の先程も心配しておらん。だがな、仲清のことじゃ。お前も父・康清の遺言書のことは知っておろう。あそこに何と書いてあったか。義清には家を継がせ、田仲荘の預所として荘園を任す。できれば、自分の跡を継いで左衛門尉になって欲しいとな、仲清については、どこか立派な家の養子か婿養子に入り、そこの家督を継いで、これも立派に出世して欲しいとな」

「はい」

「そうだろう」

「はい」

「それでじゃ、今度の話はまたとない話だと思うのじゃが。何しろ重通さまは道長さまから数えて五代目、現在、蔵人頭から参議に成られたお方じゃ。将来は左大臣間違いなしと言われている。男の子が一人しかおらんので、娘に招請婚をさせたいということじゃ。重通さまとは京に行ったときの碁の仲間で、その話を聞いて、『うちの仲清はどうじゃ』と言ったら大いに乗り気で、仲清のできは十分おわかりで、なんでもご先祖の秀郷さまとう

り二つ、肝っ玉が座っているし、武芸にもすぐれている。言うことはないとおっしゃっておられる。娘の器量もたいしたものだということじゃ」
「仲清のことでたいへんお気をお遣いいただき、かたじけなく存じます」
「仲清には文句はなかろう。一度、通わせてみてはどうじゃ」
「はあ」
「何か不服があるのか」
「はあ」
「はあじゃわからん。不服があるのなら申せ」
「不服はございません。もったいないお話だと思っております」
「そうだろう」
「ただ」
「ただ、何じゃ。申せ」
「仲清が頷きません」
「何、仲清が！」
「はい」
「何故じゃ。何故こんないい話、頷かんのじゃ。相手のことで変なことでも聞いて参ったのか」
「いいえ、そんなことはないと存じます。わたしも少し探ってみましたが、それは気立てのいい、器量も申し分ないお方だと、もっぱらの噂でございました」
「よし、わかった。仲清を呼べ。きっと貴殿は仲清に遠慮しているのだろう。自分が田仲荘を全部引き継いだことに。そんなことは遠慮はいらん。長男が引き継ぐのが世の習わしじゃ。お前の押しがたらんのじゃ。仲清を呼べ」
母は慌てて立ち上がり台所のほうへ走っていった。
母といっしょに仲清は口を一文字に結び、眼を奥のほうに引きつけながらやってきた。
「叔父上、いろいろご心配、ご配慮をいただきありがとう存じます」
仲清は正座し、深々と頭を床につけた。
「お前の縁談のことだが、この縁談、貴殿、不承知と言うではないか。何故じゃ」
叔父はかなりゆっくりと穏やかに言おうとしているが、すでに怒りが含まれていることがその声の端々に現れている。
「はあ、たいへん結構なお方だと、わたしの身にあまる縁談だとは思っておりますが、ただ」
そこで彼は息を飲み、しばらく躊躇した。叔父も義清も母も、息を詰めて彼の口元を見つめた。
「ただ？」
「ただ、何じゃ？　すでに好きな人でもおるというのか、もしその彼女と添いたいというのなら、そのお人のお父上の身分を言え。もしそうでないなら、貴殿は勘違いをしておるぞ。道長さまとその弟とのことはよく知っておろう。道長さまは立派な父上の娘を娶ったために大出世じゃ、だが、弟君は、好きな人を娶って、たいへん落ちぶれてしまわれた。どういう娘と夫婦（めおと）になるかで男の将来がきまるのじゃぞ」
「はあ、そのことは重々わかっております」

彼は、好きな女がいるともいないとも言わなかった。ということはいるのかもしれない。仲清の好きな女子とはどのような女子だろうか。

そう思うと、義清の前に待賢門院のお姿がふと思い浮かんだ。何故、思いもよらない高貴なお方を。なぜだか自分でもわからない。御所を警備しているとき、御所の奥でひっそりと佇んでおられるお姿をちらっと見たことがあるのだが、その時のお姿が思い浮かんできたのだ。

その瞬間、思いもよらない緊張と熱線が心の奥から走り上がってくるのを覚えた。

「叔父上、理由はそのようなことではございませぬ。吾は武者の子どもでございます。吾の家は秀郷さま以降、武者の家系でございます」

「それがどうしたというのじゃ」

「重通さまは武官ではございませぬ。私は武官を通しとうございます」

「重通さまも武官であらせるぞ、検非違使を務めておられる」

「でもそれは司法の方で、決して武者ではございません。それに私は紀伊が好きです。そこを離れとうはございません」仲清はきっぱりと言ってのけた。

「何を申しておる。貴殿は京にもときどき住んでおるではないか。紀伊の荘園主の家で跡取りのないところはいないはずじゃ。それに貴族の仕事はほとんど京にある。地方には国司だけじゃ。だったら、結婚した後、重通さまから上皇さまに紀伊の国守にしてくれるよう頼めばいい」

「……」

「義清、貴殿からも、とくと勧めてみよ」

義清はそのとき、ふと、仲清は田仲荘の預所になりたいのではないかと思った。自分の方が田仲荘を守っていくのに適している、兄上がどこかの文官の家にでも養子に行き、自分が跡をとるのが理にかなっていたのにと。そして、それは正しいかもしれない。しかし、自分が家督を継いだ以上、また、預所にいる限り、不可能なことだ。

だが、不思議に、仲清の肩を持ちたくなった。仲清にこれ以上、この縁談を勧める気にはなれなかった。彼には好きな女といっしょにさせてやりたい。自分は年若くに母や叔父の勧める縁談を承諾してきた。それが悪かったとは思わない。しかし、どこか、空しさが残っている。充たされない思いがある。仲清には親がお膳立てした結婚をさせたくはない。二人が共に選ぶ結婚をさせてやりたい。また、仲清は、例え一生、この自分の下で働いても悔いがないと覚悟しているような気配さえ感じる。よし、断ることに手助けをしてやろうと腹を決めた。

「叔父上、申し訳ございませぬ」義清は頭を床に擦りつけた。「この話はなかったものにしてやってください。本当に申し訳ございませぬ」義清は頭を何度も床に擦りつけた。きっと額が赤くなっているに違いない。

「貴様までが」叔父にはその後の言葉が出てこない。腕や掌が震えているのがわかる。首に青筋をたて、頬を青ざめさせ義清を睨んでいる。

「俊範さま、申し訳ございませぬ。仲清も義清もああ申すもので」母もまた頭を床に擦りつけた。

「わかった。わかり申した。以後、いっさい本家のことには口を挟まぬことにする。これで縁を切らせてもらうわ」

「そればかりはご勘弁を」母はきりっと叔父を睨めながら言った。

それには答えず、叔父は立ち上がるなり上がり框へ行き、草履を履くと玄関の戸を力一杯閉めて外へ出ていった。
「母上、兄上、申し訳ございません」仲清は今度は我々に頭を下げた。
「よい、よい」と母は言った。そして言葉をつづけた。
「いずれ、このようなことになる。これでいい。赤飯を炊いてお祝いをしたいくらいじゃ。分家から本家が独立した記念じゃが」
母は大笑いをして義清と仲清の肩をやさしく叩いた。

五（同年、十八歳）

鳥羽上皇が里内裏としている京の「二条万里小路第」へ行幸なされるのだが、その街道を先回りして、異常がないか確かめておく役目を仰せつかり、義清は紀政則といっしょに、鳥羽の作り道から、京に入り、三条通りを万里小路へと歩いていった。
三条通りには大きな屋敷も多いが小家も多い。小家からは、子どもたちやおなごなどが路上に出てきて何かを喋り合っていた。どうも顔付きがいつもと違って明るい。笑っている人も多い。頬などは桜色にし、大声で話していて、その声も弾んでいる。鳥羽離宮内のどこかで見た顔も混じっている。米を積んだ荷車を牛に引かせて、五、六台止まっていて、その一つの俵が開けられ、米が見えている。葉月も半ばを過ぎ、新米が出てきてもいいものだが、今年も、あるときは長雨、あるときは日照りで、凶作となり米が京には多くは入って来ていないらしい。荷車の周りを、下北面の武士たちが取り囲んでいる。それはすでに顔見知りの人たちである。
「何をしているのでしょうか」義清は先輩の政則に尋ねた。
「上皇さまが京戸（京の人と認められている人）にお米をお与えになっているのだ。長承の飢饉と名付けられている去年の凶作につづいて今年も凶作らしい。それに、まだ、新米が京に届いてはいない。一番、京に餓死者が出る時期で、鳥羽さまが、お持ちになっている米を京戸で食べるものに困っている市人たちに配っておられるのだ。京戸でなくても京に三年以上住まいすることが証明されれば、もらえるらしい」
「それはすごい。さすがはおやさしい鳥羽さま」義清は思わず声を挙げた。以前見た餓死者の死体が眼の前にちらついた。
「すごいですね、すばらしい上皇さま」義清はつづけて言った。
そのような上皇に仕えていることを誇りに思った。心の内に朝日がぱっと差し込んだよ

うな気がした。だが、政則(まさのり)は少し暗い表情をしている。称賛の声を挙げない。
「そうはお思いにならないのですか」
「いや、素晴らしいことはすばらしいよ。なかなかできることではない。鳥羽さま以外、これのできる人は京にはおるまい」
「でも、貴殿はなんだか素直に評価していないようにお見受けするが」
「ううん。あれをご覧よ」
「あれって、『鳥羽上皇さまからのお振舞』という旗ですか。それがどうかするのですか」
「そのうち、貴殿にもおわかりになるときがきっとくると思うが」
政則は義清を見てにっと笑った。
「ええっ？」
政則どのが何をお述べになっているのかまったくわからなかった。ただ、「貴殿はまだ若い、純粋だなあ」と言っておられるような気がした。
そんなことはどうでもいい。いいことはいいことである。義清は久しぶりにいい気分になった。心の内にわだかまっている得体の知れない白い塊も少しは小さくなった。辺りの景色も雨上がりに陽が差し始めたときのような鮮やかさだ。
義清たちは、米配りの頭(かしら)らしい男を捕まえて、この道にいる時間などを尋ね、行幸の時刻にはすでにここにはいないことなどを確かめてから、さらに、万里小路(までのこうじ)へと向かい、左に折れ、三条通りの方向に向かった。すでにお米をいただいたのであろう、米袋を大事そうに抱えた女たちが三、四人、髪に布を巻いてそれを見えなくし、小袖の着物に前掛けをした姿で何やら話し合っている。それを取り囲むようにして、仕事途中で主人待ちの牛飼童(うしかいわらわ)などが喋りに加わっている。
「やはり上皇さまは違うなあ。我々のことを気遣って、お持ちのお米をすっぱりと放出してくださった。大したお方だ。それでこそ治天の君さまだが」
「それに比べて崇徳さまはどうじゃ。米一粒もめぐんではくださらぬ」
「あの方はだめじゃ。あの方は不義の結果、お出来になった方じゃろう。だから、いくら神にお祈りしても神は聞いてはくださらぬ。日照り、大雨、災難続きじゃないか。あの方にははやく退位してもらわなきゃ、我々は生きてはいけんぞ」
「そんなことはないわ。崇徳さまも立派なお方だ。ただ、米を放出すると言ったら、左大臣さま、右大臣さま、中納言さま、みんな反対なされたというではないか」
「年号を長承から保延に改めたりして何とかしようと努力なさってるわ」
「だめ、だめ、そのくらいでは効果はないよ」
「そうそう、退位していただくのが一番。それがみんなのためだ」
「わたしもそう思うわ。退位よ、退位がいいわ」
そんな声が聞こえてきた。義清は、先程、政則どのがそのうちわかると言ってたのはこのことに違いないと思った。上皇さまはそこまで考えてなされたとは思いたくはなかった。純粋に民のことを思ってなされたのに違いない。だが、結果として、崇徳さまを貶めることになっている。

今まで明るさで充ちていた気分が一気に曇った。心の中の白い塊が以前のようにまた膨れた。
ようやく万里小路第の門の所に着いた。と物陰から、一人の男が不意に現れ、こちらにやってきた。
「鳥羽上皇のご家来衆であるか」と言った。
「そうである。北面の武士だ」と政則が答えた。
「私は、賀茂一統の陰陽師（おんみようじ）だが、名は名乗らないでおく。信じるかどうかは貴殿たちの判断だが、言っておくことがあるので、お待ち申した」
「陰陽師？　して、何ごとを？」
「この国のことを占い申したのだが、一つ気になることが見えてきた」
「この国のことで？　気になること？」
「さよう。鳥羽上皇と崇徳天皇、ともどもに不吉な事象が見て取れるのだが、どうかそのようなことが起こらぬように、ご家来衆でご注意していただきたい。私は、まだ修行の身で、勝手な占いは禁止されている。従って、このことは上の者には報告できない。だが、自分の占いには自信がある。だから、誰かに告げてそのようなことの起こらぬよう、手を打たないといけないと思って、お待ち申しておった。もちろん、このことは天皇側の方にもお話しするつもりだが」
「不吉なこととはどういうことか」政則が尋ねた。
「例えば戦いとか」
「戦い？　いったい誰と誰が戦うのじゃ」
「それはわからぬ」
「そんな馬鹿な。鳥羽さまは戦いを治めるために努力をなさっておられるお方だ。瀬戸内海で海賊が暴れておったが、それを鎮圧するために忠盛さまを派遣なさった。そのような戦いがこれからも起こるかもしれないが、それ以外にはまったく可能性はない。それ以外の戦いは上皇さまが生きている限り起こり得ないことだ」
「それだったらいいのだが……」
陰陽師が眉間に深い皺を刻み、瞑想するような表情を繰り返した。
「私の眼の前には、上皇さまも崇徳さまもともに兵（つわもの）の服を着て立っておられます」
「何！　そのようなことがあろうはずがない。まあ、聞き置くことにするが」
「信じるかどうかはあなたたちが決めることだが、そのようなことを申した陰陽師がいたことは記憶しておいていただきたい」
「不吉なことを申す陰陽師ですね」義清は小声で政則の耳元へ呟いた。
「修行の陰陽師と言えども侮れんからな」
政則もまったくでたらめな占いとは思っていないようだ。
「まあ、我々の勤めは、鳥羽上皇の身をお守りすることだから、それに専念すればいい」
政則はそのようなことがあれば、上皇側に立って戦えばいいと割り切っているようだ。
もし上皇さまと天皇さまが争うようなことがあったら、自分はどちらにつけばいいのだろうか。もちろん鳥羽さま側だろう。とすると崇徳天皇さまを敵に回すことになる。あの、和歌でつながり、この上なく尊敬申し上げている崇徳さまに弓矢を向けなければならな

い。考えただけでぞっとする。そんなことはできない。ええい。そんなことは絶対に起こらない。上皇さまが戦いをなさるなんて考えられない。そう思いながらも不安が強まっていく。ひょっとして、ひょっとして、と思えてくる。

「では、私はこれで」

陰陽師は一礼すると、素早く歩き出した。白い上着と黒袴が風のために立ちのぼった埃の中でも鮮やかに見えた。

突然、陰陽師が止まって、こちらを振り向いた。義清の方を獲物を狙う獣のような目付きで睨んだ。

「ああ、一つ言い忘れた。北面の武士のお若いの、貴殿の身体から吉と凶の両方の妖気が出ておる。ようく自分の行く末をお考えになられや。それに、吉の方向に行くには自分の……」

そこまで言って、彼はすたすたと歩き出し、それに前を向いていたから、後の言葉をよく聞くことができなかった。ただ、自分の義務を忘れないように、とでも言ったのではないか。

里内裏（さとだいり）に着いた。すでに待賢門院（たいけんもんいん）さまが到着しておられるようで、東門を入ったとき、中門を通して、たくさんの女房たちが、庭や家屋内を歩きまわっているのが見えた。

政則どのと二人、侍所に通され、お茶を振る舞われて、それをゆっくりと飲んだ。侍所と渡殿とをつなぐところから庭内や寝殿が見えた。寝殿の蔀戸（しとみど）はすべて上げられ、中がよく見える。廂（ひさし）の辺りを、髪は垂髪（すいはつ）で衣袴姿（きぬはかますがた）の女房たちが右や左にと忙しそうに行き来している。ここからはかなり離れているので顔などは小さくてはっきりとは見えないが、その動きの清潔さや晴れやかさなどから若い女房たちに違いない。それに着物の桜色や萌葱色が揺れながら動くのを見ると、心まで明るくなる。先程の陰陽師の言ったことなど瞬時に忘れてしまいそうに思えて、心が和んだ。

「よくおいでくださいました。お役目ご苦労さまです」

女房がひとり入ってきて、両手をついて丁寧にお辞儀をし、お膳の上に和菓子を置いた。和菓子から香ばしい匂いが漂ってくるだけではなく、女房の首筋や袖から出たふっくらとした手から出てくる芳しい匂いが心を溶かせていく。

女房が顔を上げて義清の方を見た。何だ、それは堀河局（ほりかわのつぼね）ではないか。

「おお、堀河どの。しばらくお会いできずにいたが、いかがお過ごしですか」義清が言った。

堀河は微笑んで義清を見る。それは、歌を習いに彼女の父・顕仲（ありなか）さまの家に伺ったとき、そこで見る彼女とはまったく違って、優美であでやかだった。

「ああ、こちらは北面の武士の先輩、紀政則殿で。こちらは待賢門院堀河さまでございます。私が歌でお教えを乞うておりまする神祇官（かみづかさ）・源顕仲（みなもとのあきなか）さまの娘さまで、実家でとき

どきお見受けをするもので」
　義清はどぎまぎしながら答えた。二人は丁寧に挨拶を交わした。
「では、ごゆるりと」堀河は出て行った。
「そなた、若いのになかなかやるではないか」
　政則は義清をはやすように「堀河どのはそなたをいとおしゅう思っておられるぞ、顔付からわかり申す」と言った。
「いや、そんなのではなくて、彼女も歌をつくるもので、歌のことでいろいろとお話をし合う仲でございます」
「いや、そう照れなくてもいいではないか。分かっておる。彼女は崇徳天皇といい仲だという噂が立っておる。崇徳天皇に歌を献上なさったというではないか。あれがその堀河どのか」
「へえ？　そんな噂が。それは誤っております。堀河さまと崇徳さまとは何もございません。天皇さまも歌がお好きで、それでお話などをなさるのだと思いますが。また、天皇さまに歌をお読みいただきたくて堀河さまが献上なさったのだと思います。彼女は本当に歌がお上手で、私など『くろかみのわかれをしみきりぎりす　まくらのしたにみだれなくかな』などを詠まれたときにはそれはもう心が震えて、女が男の胸に顔を寄せてむつみ合う姿が思い浮かんできて、どうしようもなかったぐらいですから」
「やっぱり、そなたも堀河どのに心を寄せておるのじゃ。今の言い方でわかる」
　政則どのはいじわるく笑った。
　廊下の方がやかましかった。そちらを見るとふっと若い女房の顔が消え、笑い声が聞こえる。再び政則どのの方をながめ、さらに廊下の方を眺めると、また上と下に二人の女房の顔が半ば出ていて、義清を眺めている。義清が彼女たちの方に視線を向けると慌てて顔を引っ込めた。義清の驚いた顔に気づいたのか、政則がまた笑顔になって、何度も頷いた。
「若い女房たちがそなたを見にまいっておるのじゃ。新しい北面の武士が来たというのでな。しかも、そなたの名前はすでに女房たちの間では評判らしい。なにしろ、流鏑馬（やぶさめ）では一番の射手だし、歌はうまいし、身体は大きくて美しい。顔付きは光源氏に似ていると言われておる」
「おからかいになるのもいいかげんにしてくだされ。私はそんなのではありません」
「いいや、気をつけた方がいいぞ。おなごの思いは強いぞ。どういうことになるやもしれん」
　堀河が再び入ってきた。先程の和菓子のお椀を下げにまいったのであろうが、義清を見て手招きした。行ってみると、また、口を耳元にお寄せに成り、ふっと息をかけられた。訳のわからない興奮が起こった。
「政則どのといっしょに、ちょっと庭でもお歩きにならないですか。待賢門院さまが義清がどのように成長なさったかを見たいと仰せられておられる。ぜひそうしてくださらぬか」
　待賢門院さまが自分を見たいと申されているとは何と光栄なことだろう。北面の武士になるときにも徳大寺実能さまから待賢門院さまを通して鳥羽院さまの方にお話を通してもらっている。お世話にもなったことだし、断る理由などまったくない。
　堀河どのが部屋を去ってからしばらくして、義清が政則に言った。

「お庭でも拝見いたしませぬか」
「里内裏の庭を拝見しておくのもよかろう。そういたすか」
二人は板の間から草履を履いて土間に下り、中門を通って庭に出た。天気がよく、秋の陽射しが心地よく肌に降り注いできた。庭には細い小川がありそこに小さな橋が架かっていた。欄干の朱色が鮮やかに陽に映えていた。橋を渡って土庭に出て紅梅の近くまで歩んだ。

義清はそっと寝殿の蔀(しとみ)を眺めた。廂(ひさし)の向こうは母屋(もや)の部屋なのだが部屋の前は御簾(みす)が垂れていた。だが御簾の目が荒いのか、その向こうにはっきりと女人の輪郭が見えた。垂らし髪に十二単衣の姿だった。しばらく見とれていた。あのような美しい院さまに自分の歌をお読みいただけたらどんなにかうれしいだろうと思った。そっと自分の歌の書かれた色紙が手渡され、それをじっとお読みくださる待賢門院さまが浮かんだ。それだけで額に汗が滲んできた。心臓から鼓動が聞こえてくる。よし、いつかはそうしてみせよう、と思う。いまはまだだめだ。堀河どのの歌にさえ劣っている。もっと鋭く、優美に、激しく歌わねばならない。そんな歌をつくりたい。

待賢門院さまはじっとこちらを見つめておられる。それは視線の強さでわかる。しかし、どのような表情でそうなさっているのかはわからない。いつか、きっとお近くで見たい。できれば、言葉を交わしたい。そう思うと、突然、また、待賢門院さまと寄り添っている様子が思い浮かび、先程よりまして鼓動が激しく、額、首筋、掌から汗が飛び出てくる。だが、その汗は決して塩からいものではない。きっと熟れた甘柿のような味がするものであろう。

「もう、上皇さまは鳥羽殿を出て、作道(つくりみち)の半ばを過ぎたであろうのう」

政則の突然の言葉でわれに戻され、次の仕事に就かねばならないことを思い出した。次の仕事とは、さっそく鳥羽殿に帰り、里内裏への付き添いで多くの北面の武士が抜けた後、鳥羽離宮の警護にあたることである。最近、付け火が多い。鳥羽離宮と言えども安心してはおれぬ。それに、鳥羽離宮には建物が多い。その全部を警護することなど不可能なことである。だが、せめてその内の鳥羽殿だけは守らねばならない。
「そろそろおいとませねばなるまい」政則は言った。
「そう致そう」義清は侍所に帰り、持ち物を背負うと、大声で「おいとまいたす。後はよろしくお願い申し上げる」と東対屋(たいのや)に向かって言った。

慌てて何人かの女房たちが走り寄ってきた。その中に堀河もいた。
「もうお帰りで、今、新しいお茶をご用意いたしておったところで」
「いや、そうはしておれない。役目がまだ残っておるので」政則が言った。
「では、ちょっとお待ちを」
堀河は対屋に向かって何かを取りに帰った。
「先に外に出ておく」
政則は東門へすばやく出て行った。
堀河が帰ってきた。

「こんなのを詠んでみました。お読みいただけたらうれしい」と言って、玉章（手紙）に似たものを手渡した。開くと優美なかな文字で歌が数首書かれていた。さっそく読んでみた。

はかなさを我が身の上によそふれば　袂にかかる秋の夕露（千載集）

さらぬだに夕べさびしき山里に　霧の　まがき　にを鹿鳴くなり（千載集）

逢ふことをとふ石神のつれなさに　我が心のみうごきぬるかな（金葉集）

この他にもまだ、数首が書かれていたが、ただ、特にこの三首めがいやに心に止まった。これを読ませるために他の歌を書き添えたのではないかとさえ思えた。どのような言葉を返せばいいのだろうか。すべての歌を褒めた後「なかなかに馴るゝつらさ（深い仲になって思うように会えない辛さ）に比ぶれば疎き恨みはみさをなりけり（まだ耐えられる）」（六八一）とでも返しておこうか。

六（一一三六年・保延二年、十九歳）

九条家が領主である隣の井上荘、および、井上新荘との間で樋を巡っての水争いが起こっているという知らせが紀伊から届いた。

紀ノ川上流の井上新荘内にある樋は田仲荘の田圃にとっては欠かせないものである。あそこが封じられたらたいへんなことになる。だから、何とか円満に解決しなければならない。

その解決のため、ぜひ義清に田仲荘に帰ってきてもらいたい、と言ってきた。だが、今、義清が京を離れることはできない。鳥羽上皇は熊野に行幸中である。北面の武士もかなりの数が随身となってそれに従っている。故に、残った者たちの仕事が極めて多いのである。

それでしかたなく、弟の仲清に任すことにした。仲清は気が強く、秀郷似だと言われている。だから心配である。できれば自分が指揮をとって収めたいところであるが、仲清も責任を持って交渉する経験も必要であろうと考え、彼に任せた。

北面の武士の仕事の一つとして、街内にある里内裏の警護の他、要請を受けて街の警護にもあたっている。今、京の街は非常に物騒で、白昼、堂々と付け火をして、火事を起こし、人々が慌てふためいている間に、邸内に入り、金目の物や絹や米を奪うのである。火事と聞きつけたら、多くの人たちが駆けつけてきて、辺りはすごくごったがえし、火消しどころではなくなる。それに茅葺きや板葺きの屋根が多いので、すぐに隣の家に火が移り、大火となる。

上皇や妃の里内裏には金目の物もたくさんあり、付け火されたり、類焼にあったりしたらたいへんである。それで、今日もまた、それらの警護にかり出され、清盛といっしょに

二条辺りを歩いていた。
「義清、何も感じないか」と清盛が言った。
「いや、ちょっと考え事をしていたので、何も感じない」
「だめだよ、そんなことでは。いくら弓矢が上手でも、かなり離れた所の様子も手に取るようにわからなければ」
「何かあるのか？」
義清は慌てて辺りを見回そうとしたが、清盛はそれを制した。
「そのようなことをしたら自分が気づかれたと相手に教えてやっているようなものだ」
義清は、後ろを見ないで背中に何かを感じないかと必死で気持ちを背中や首裏に集中させた。そう言われれば確かにかなり強い視線を感じる。
「強い視線を感じる」
「そうだろう。吾をつけてきているやつがいる。あっ、危ない」
清盛は身体をのけぞらせ、義清の横を矢が通り過ぎ、それが遠くの路上に落ちた。と思うまもなく、第二の矢が飛んできた。義清は振り向きざま、刀を抜いてそれを打ち落とし、賊を追いかけようとした。賊は慌てて、小路を後ろ向きに逃げ始めた。
清盛は義清の腕を持ってその動きを止めた。
「追うな、そのままに」
「どうして。貴殿にしては珍しいではないか。追って取り押さえろと言うのが貴殿流ではないのか」
義清は不思議に思って尋ねたが、清盛は首を何度も横に振り、それには答えなかった。
そのうち、賊の姿はどこかに消えてしまった。清盛は平然として、何事もなかったように歩き始めた。
と、そのとき辺りがざわつきはじめ、何人かの男が路地を走って内裏の方へ行く。
「火事でも起こったのではないか」と清盛が言った。
走って行くひとりの男を捕まえ、何があるのかと尋ねた。
「いや、わからない。みんなが走っているので何かあるのに違いないと思って走っている」と答え、前の男を見失わないように慌てて走り去った。
「俺たちも行こう」
清盛の足は速い。彼に遅れまいと義清も必死で後を追った。
内裏近く、すでに朱雀門が見える所に来た。人が溢れている。どいた、どいたと言って人垣をかきわけ、前に出た。
数組みの男達がとっくみあいをしている。牛車が一台、人々に囲まれ、動けなくなっている。その周りを、背の高い、身体つきのがっしりした男が三人取り囲んでいる。
取っ組みあっている一人の男の立烏帽子（たちえぼし）が飛んだ。髻が見え、その男が帽子を拾おうと屈んだ瞬間に、相手の男から蹴りを入れられ、路上に倒れた。
「何をする。狼藉者」と倒れながらも男が叫んだ。倒れた男を助けようと、牛車を警護していた男のひとりが駆け寄り抱き起こした。
「何もしないという訳にはいかんだろう。京の警護の役目なのだから」と清盛は義清に小声で言うと、大声で怒鳴った。

「闘乱（けんか）はやめろ」
その声を聞くと義清はすぐさま殴り合っている二人の間に入り、それを引き放し、さらにすぐ横で同じように殴り合っている二人を引き離した。力を入れたので、二人はともによろけながら路上に倒れた。清盛もすぐさま何組かを引き離した。
「貴殿たちは何ものだ」
と誰かが言った。
「京の警護を仰せつかっている北面の武士、平清盛である」
「同じく佐藤義清」と名乗った。
彼らの顔付きが変わった。少し青ざめたようである。
「これはいかん。捕まったら面倒なことになる。逃げろ」と誰かが叫ぶと、おそらく闘乱を仕掛けた方だろう、一団の男たちが逃げ出した。
「忠道の郎党めが。弱いくせして」と誰かが怒鳴った。
「どうした」牛車の中から声がした。
「おそらく忠道の郎党と思う一団が襲ってきましたがなんなく追っ払いました」と随身のひとりが告げた。
「牛車を動かせ」と横にいた随身の男が牛飼童に命じた。すると、車はゆっくりと動き始めた。見物に来ていた男達もやや落胆したように義清たちをじろじろ眺めながら立ち去りだした。すぐに二人だけになってしまった。
「奴ら、お礼の一つもいいやがらん。奴らは俺たちをいかに見下げているかわかるだろう」
清盛はしなびた菜のような顔をして言った。
「ところで、牛車に乗っていたのは藤原北家の藤原頼道ではないのか」と義清が尋ねた。
「その通り、喧嘩をふっかけたのは、頼道の兄・忠通の郎党に違いない。彼らの父・忠実が弟ばかりを可愛がり、兄の方をないがしろにしている。兄は一応関白なのだが、知っての通り、天皇には何の権限もない。それに比べ、弟は上皇と繋がり、内覧の父とも繋がり、大臣として大いに腕を振るっている。何しろ、氏長者（一門の当主）を弟の頼道に継がせるつもりらしい。これでは兄の方が面白くなく、兄弟で争っているのさ。だが、これは笑っておれない。吾のところの問題でもある。先ほど吾を襲ったのは誰だと思う？」
「ええっ？　まったくわからぬ」
「きっと吾の弟、家盛の郎党さ」
「何？　まさか」
「間違いない。吾は父・忠盛の実子ではないことは貴殿もよく知っておろう。だが、吾は本当の父だとも思い尊敬もし、頼ってもいる。父も吾を見込んで平家の氏長者に選ぼうとしている。だが、一族には、それに反対する輩がいて、家盛に継がせろと言い寄ってくる。家盛の家人や郎党はみなそう思っている。だから、今日のような奴らが出てくる。お恥ずかしい限りだが」
清盛が今まで見たことのないような悲しげな表情をした。豪放磊落な清盛にもこのような悩みがあるのかと驚いた。

「家盛は頭がいい、武術にも長けている。だが、繊細すぎる。武士を束ね、戦に勝ち、天下を治めるには吾の方が数段すぐれている。父はそれを見抜き、吾を選ぼうとしているのだ。吾が天下を取り、平和になったら家督を譲ってもいい。そのようなことはたやすいことだ。だが、今はできぬ」
「だったらどうする」
「家盛にそれをわかってもらうより他はない」
「わからなければ？」
「闘う。兄弟でも闘うよ」
清盛が息を詰めるようにして言い切った。それから、しばらく言葉を出さなかった。
「そうならないことを祈るよ」と義清は言った。それからお互いに黙って、もと来た道を引き返した。
歩きながら、義清は考えた。それはそうと、自分のところはどうか。仲清と自分との仲にはそのようなわだかまりがないのか。自分にはないと思っているが、仲清はどうか。
ああ、嫌だ。そのようなことを考えることだけでも嫌だった。だが、考えなければいけない問題である。
弟の仲清とは小さい時から仲がよかった。二人して乗馬の稽古も、弓矢の稽古も、剣の稽古もした。ただ、すべてにおいて、自分の方が勝っていた。特に文字の読み書きでは自分の方がはるかに上だった。だから、父上が自分を跡継ぎにするということには仲清は納得せざるをえなかったのだろう。いや、不満はなかったはずである。だが、遊び友だちとの争いでは仲清は強かった。常に勝っていて、周りに多くの友を引き連れ、仲清が中心になって遊んでいた。自分には友は少ししかいなかった。それに争いごとが嫌いだった。仲清は闘いの仕方やいざこざの解決には才があり、吾よりもはるかに上手だった。
もし、今度の井上新荘の出来事を上手に解決できたとしたら、自分の方が預所に適していると思うに違いない。そうすれば、自分と対立することになるのではないか。もし、今度のことがうまく行かず、兄上、よろしく頼むなどということになれば、自分の方が兄上より適するなどとは思わないだろう。だったら、井上荘との事件、うまくいかなければいいのに、いや、むしろ、井上荘との問題がこじれて、義清がいかざるを得なくなればいいのに、と思った。
そう思った瞬間、自分はいったい何という怖ろしいことを思うのだろうと、身震いがした。自分にもそのような心があったことに驚いた。
「おい、どうした。気分でも悪くなったのか」と清盛が尋ねた。
「青ざめているではないか、どうした」とつづけて言った。
怖ろしい、怖ろしい、このままでは自分が怖ろしい人間になっていく。義清の額から汗が滲み出てきた。すでに寒さを覚えるほどの季節なのに、汗とはどういうことなのか。
「何か、考え事をしているのだろう。弱い心ではだめだぞ。そのようなことではこれからの世の中、生きてはいけない。これからは、生きるか死ぬかの世界に入る。それが末法の世界と言うものだ。古い秩序が壊されるときは常にそのような世界になる。それをくぐり抜けなければ新しい世界など来ない」
清盛の顔は夕日に照らされて、輝いている。清盛は自分の生きる道をきっぱりと見定めて、それに邁進する決意をかためたようだ。
自分だってそのようになりたいと思っている。だが、それがどの道かわからない。迷い

道の中にいる。
「まあ、そうくよくよするな。そう急ぐな。そう悩むな」清盛は愉快そうに笑った。
まるで義清の心の中を見透かしたような言葉である。その鋭い勘は怖ろしいほどだ。
「今日の勤めはこの辺で終わりとするか。後は、夜の役目のやつらに任せよう」
清盛はさっさと馬をつないである館へと足を速めた。

七　（同年、十九歳）

義清（のりきよ）が家人として仕えている徳大寺実能さまが、今年始めに従二位に、三月には正二位に昇叙され、今回は権大納言に昇任された。その祝いの会に呼ばれ、酒を例になく多く食（く）らった。すでに夕暮れに近く、師走の寒風が上着を貫いて肌に凍（し）みるが、酔いのためか身体はそう寒くはなかった。
例の井上新荘との樋の問題は、仲清が見事に仲清流で解決して見せた。
井上荘や新荘は隣の粉河寺の悪僧に悩んでいたそうで、それを郎党をつれていって退治し、粉河寺ともそのような悪僧を出さないと約束させたそうで、井上新荘、井上荘は共々大喜びで、樋（ひ）の問題は田仲荘のいいなりに解決したそうである。
まことに目出度いことだが、義清の心の中に巣くっている白い塊はいっこうに小さくならず、それが膨れるばかりで、気分が晴れない。ねっとりとした陰鬱さが身体全体を覆っている。それは、自分がそのことを心の芯からは喜んではいないからだろう。仲清流の解決の仕方をうらやんでいるのか、それとも悲しんでいるのか。きっと、あの怖ろしい考えがうごめいているのに違いない。
それに、このごろたびたび変な夢を見る。昨夜も見た。細い鉄の棒で作られた網の上に何人もの人間が細い鉄線でくくりつけられ、乗せられている。下から紅蓮の炎が激しい勢いで上がりつづけ、人たちは断末魔の声を上げている。その声もかすれがちになり、口から血が吹き上がる。気を失い、すぐに身体が燃え始め、そのうち炎と一体となる。しばらくすると炎が弱まりやがて消える。すると、焼け焦げ、人間の形をした炭状になったものが徐々に人間に戻り、苦しそうに網の上でのたうち回る。すると、再び火が燃えさかり、強い炎が下から上がる。人々の苦しみの声が上がり始める。それが何度となく繰り返される。
ああ、これは源信さまが我々に教えてくれた火炎地獄の姿だ。老僧が現れ「網の上の一番こちら側の人の顔をよく見よ」と言う。その顔を見ると、上歯を下唇の上にのせ、それをかみ切るように力をいれ必死に苦しみをこらえているが、それも炎によってかき消される。よくわからない。だが、どうもそれは自分のような気がしてならない。この自分が火に焼かれ始めている。そう思うと、口からううううという声が出た。
「そう、お前だ。仏の道をよく知りながら、それを行わない罪は、普通の人間の罪よりも重い。また、修行を目指しながら、修行を怠っている人間も普通の人間よりも重い。それ

に、お前の修行は仏事のみではないはず」
「それは何ですか」
「それはお前にはよくわかっているはず」
「いいえ、わかりませぬ」
「わかれ」
そう言うと、老僧も地獄の様子もふっとかき消えた。
と、目が覚め、口はからから、体中がほてっていて、汗まみれになっている。吾は地獄などに落ちたくはない。そのために、母の教えを守り、朝は必ずお念仏を唱えている。吾は極楽に行きたいのだ。できれば、この世でも極楽に近い所へ行きたい。何という夢を見ることか。
そのようなことを考えながら歩いていると、突然、後ろから声が掛かった。
「おお、義清ではないか」
振り返ると義清の大の親友、源季政（後の西住）が寒さのためか頬を赤くして笑っている。季政を見ると、憂鬱さが少し遠のいた。今、一番会いたい人間に会ったような気がした。
「いったいどうしたのか。貴殿がいないと寂しくてしかたがない。今日はどういう日か忘れたのか」と季政（西住）が言った。
「忘れるものか。今日は、成通さま（二人の歌の師匠）の月次歌会だということは重々わかっている」
「だのに、なぜ、来ない。酒など食らって」
季政は笑顔を絶やさない。責めているのではないぞ、理由を聞かせろと言っているだけだ、ということがよくわかる。
「今日は徳大寺さまの権大納言への昇任のお祝いで、どうしても出なくてはならなくて」
「ああ、そうか。貴殿もたいへんだな。田仲荘はあるし、徳大寺さまがあるし、鳥羽さまもあるし。歌だけを考えているわけにはいかないものな」
あとの言葉は少し皮肉っぽかった。先月も休んだ。先月は、馬術の練習日で鳥羽上皇さまが見に来られるということで、それをすっぽかすことができなかった。二ヶ月も休むとみんなからおいてきぼりをくうようで不安がよぎる。それに歌の力もみなから離されそうで、焦りのようなものさえ生じてくる。このような生活をしていていいのか。このようなことに時間を費やしていていいのかと。仏と歌だけを考えて生きられたらどんなにいいだろうと思う。ますます焦りが膨れあがる。
「どうだった」と義清が尋ねる。
「おもしろかったよ。成通さまも今回はみんな期待以上だったと機嫌がよかった。自分の歌も披露された。『ひとりぬる身を浮雲のはれぬ夜や恋せぬ月もかけに成らん』（成通集）といったものだった」
「今回のお題は確か、『月』と『恋』だったな」

「貴殿の得意分野ではないか」
「そんなことはないが、いくつか詠んだものがあったのだが」
「それは残念だったな。ここで一つ披露してくれないか」
「いや、それは恥ずかしくってできない」
「そう言わずに、一つだけでいいから」
「ううん」
「罪滅ぼしだよ」
　罪滅ぼしと言われれば、一首ぐらい詠んでもいいか。季政（西住）に聞いてもらって、感想を述べてもらうのもいいかもしれない。
「では一首だけだよ、罪滅ぼしに。『葉隠れに散りとゞまれる花のみぞ忍びし人に逢ふ心地する』（五九九）」と詠む。
「なかなかいいではないか。やはりな」
「『やはりな』とは？」
「やはり、貴殿は忍ぶ恋をしておる」
「そんなことはない」
「いや、実感がこもっている。間違いない、貴殿は恋をしておる」
「ただ、想像して詠んだまでよ」
「これは想像では詠めない。相手は誰だ。吾だけに告げろよ」
「相手などいない」
「本当か」
「本当だとも」
「そうか。やはり言えぬ相手か。それならいたしかたがない。聞くのはよそう」
　季政はまたも笑顔で言った。
　そう言えば、この歌を詠むとき、頭の中に、以前、簾越しに見た待賢門院さまを描いていた。待賢門院さまに恋などしていない。ただ、自分の歌を読んでもらいたいだけだ。院さまが読んでくれている姿を想像するだけで心が高まる。うれしさが波のように押し寄せてくる。しかし、そのようなことを恋とは言わないだろう。
「恋と言えば石川郎女と大津皇子のことを思い出すな」と義清が言う。
「草壁皇子との三角関係か」
「大津の皇子の『あしひきの　山のしづくに　妹待つと　我立ち濡れぬ　山のしづくに』のあれか。草壁も歌を送ったそうだが返歌がなかったという」と義清。
「そう。大津への返歌は『我を待つと　君が濡れけむ　あしひきの　山のしづくに　ならましものを』だな。さらに、その後、大津皇子は『大船の津守の占（うら）に告（の）らむとは　まさしに知りてわが二人寝し』（大船の泊まる港にいる津守がこのことを占いに現すであろうことを知りながら、私たちは共に寝たのだ）と返している。大津皇子は津守に監視されていることを知りながら、しかも彼が持統天皇に告げ口することを覚悟の上で石川郎女との恋を成就させたのだ。その結果がどうなるかをある程度予想されたと思う。持統天皇はカンカンに怒ったであろう。草壁が石川郎女を好いていることを知っていてよくも邪魔をしたなと。何しろ、草壁は実子、大津は継母だからな」と季政（すえまさ）。

「恋とは命をかけてするものか」

「そう。この世ではそうするものだ」と笑いながら季政(すえまさ)は答えた。

八（一一三七年・保延三年、二十歳）

今日は義清(のりきよ)が北面に出仕する日なので、朝早くに鳥羽離宮の詰め所に来た。

そこにはあまり付き合いたくないような男達がたくさんいる。どうして彼らが北面の武士になったのかよくわからない。彼らの得意は、弓矢や腕っ節だけで、仏にも歌にも興味がなく、ひたすら、どうしたら検非違使になれるのか、どうしたら、正五位上になれるのかなど出世の話だけで、出世ができた人たちの北面の武士時代の噂をどこからか仕入れてきて、お互い得意げに話し合っている。たまに違う話といえば、どこそこの姫君が美しいとか、どこそこの誰々と、どこそこの奥方とが密会しているとか、誰々と誰々とが男色に違いないといったような噂話である。

義清は、彼らとは離れて、いつも部屋の隅にいるのだが、彼らからすれば、付き合いにくい変わり者と思っているだろうし、歌が上手で弓矢はもちろん、蹴鞠まで上手で、上皇にえらく気に入られている。それをかさにして威張っている鼻持ちならない輩だと思っているに違いない。義清が傍に寄ると、今まで大声で笑っていた男達が急に静かになり、いかにも迷惑そうな表情をする。その点、清盛は違う。彼らとさかんに談笑する。海賊退治に父といっしょに参加し、手柄をたて、彼はすでに位は上なのに、談笑相手にはそれを感じさせないで上手に付き合っている。北面で最も人気のある武官である。

義清は、彼らから離れて、一人、部屋の縁の端に座った。今日は話し相手の清盛がいない。

義清が手持ちぶさたで、じっと空を眺めていると、競べ馬を取り仕切っている院の仕所(つかえどころ)（院の雑用官）の役人が義清のもとへやってきた。

「そろそろ返事を出さないといけないのだが、出馬(しゅつば)ということでいいでしょうか」と役人が眉間に皺を寄せながら言った。今度行われる競べ馬の出場の件を尋ねにきたのだ。返事を出し渋っている義清の態度が理解できないといった感じである。馬の体調がよくないので、しばらく返事を待ってくれと言って、承諾の返事を延ばしているのだが、それは口実であることぐらい、仕所(つかえどころ)はとっくにお見通しであろう。

どうも出る気がしないのだ。もちろん競べ馬は好きである。だから、やりたい。馬に乗って、空気を切りながら走る爽快感はすばらしい。馬もまた、他の馬と競いながら走るのを喜んでいるようだ。馬術には自信がある。それに、前回の競べ馬では清盛に負けている。それを取り返すには、絶好の機会だ。

しかし、先日、街の警護に見回っているとき、ある小家(こいえ)の前で、何人かの女たちが立ち

話をしていた。その話し声が義清の耳に聞こえてきたのだ。
「今度、また、競べ馬があるらしいよ」
「そう、いやね」
「男どもは喜んでいるわ、また、有る砂金や米や絹をみんな使い果たされるのね」
「それならまだいいわ。それを借りてまでやるのよ。借りた砂金が返せなくて、借り主から責められ、娘を差し出して許してもらったという話も聞くし」
「借金を返せず、殴られて命を落としかけたやつもいるんだって」
「自業自得よ」
「競べ馬なんかなかったらいいのにね」
「日頃は賭博はご法度というのに、あれだけが許されるなんて、おかしいわよ」
「上皇さまもご覧になるそうよ」
それを聞き、得意になって参加していた競べ馬の裏にこのような不幸が生まれていたと思った。義清にもそのようなことがあるかもしれないと気づいていたものの、生身の女たちからそれを聞くと強い衝撃を受けた。
自分の行為が、ある人たちの不幸を生んでいるとわかると、競べ馬に参加していていいのか、という思いが強まる。
清盛ならきっとこう言うだろう。「お前が走らなくったって、誰かが走る。不幸を生み出すことには何ら変わりがない。悪いのは走る馬や乗尻（騎手）ではない。賭ける輩（やから）だ。彼らは賭を楽しむ術を知らないのだ」
清盛の論理は正しい。だが、面白いものがすぐ傍にあればそれについ手を出してしまうのが人間の悲しい性（さが）でもある。それに手を貸してもいいのか？
自分が走らなくったって、状況は何一つ変わらないが、自分の中の何かが変わる。そういう予感がするのだ。
ただ、上皇さまが義清が走るのを楽しみになさっていることは確かだ。この間、歌会があったとき、義清を見て、「今度の競べ馬を楽しみにしている」と申された。自分が走らないと言うのは、仕事の放棄でもあり、上皇の楽しみを奪うことでもある。それはできない。競べ馬に出たくなければ北面の武士を辞めればいい。しかし今のところ、義清にはそのつもりはない。
もし、仏ならどう思われるだろうか。どうされるのだろうか。それを聞きたい。
答えない義清を役人は睨み付けている。
「どうされるのですか。出馬でいいのですね」
役人は何をぐずぐずしているのか、はっきりせよ、と言わんばかりの大声で言った。
「ちょっと待ってくれ、もう一日、わたしの方から申し出に行くから」
「困ります」
「頼む、もう一日、馬の様子を見たい」
「明日でいいのですね。絶対ですよ」
役人は、吐き捨てるようにそう言うと、怒りを表すように早足で義清のもとを去って行った。

すると、入れ替わりに、今度は、従兄の憲康が院の衛府（院の警護）関係の役人を連れてやってきた。

「義清、今日は貴様と組むことになったよ」と憲康が言った。

「久しぶりだな。だが何をするためにだ」明るい声が出た。

先程からつづいている陰鬱な気分が憲康をみた瞬間、いささか遠のいた。例の白い塊は心の底にいつもどっしりと留まっているのだが、それへの意識は薄らいだ。

「今日はちょっとやっかいな仕事をしていただかなくてはなりません」と役人は義清を覗き込むようにして言った。

「昨日、衛府の役人から頼まれ、今日の詰め所の人名を見ていたら貴様の名前があったので、義清を選んだのだ。貴様にはもってこいの仕事だ」

「従兄の憲康といっしょなら、引き受けるより仕方がないだろう」声が明るく出た。

衛府の役人は手招きし、人のいない詰め所の裏へ義清たちを誘った。大きな楠の下で、役人は立ち止まり、耳元へ口を持って来て、小声で言った。

「今日は賭博の取り締まりをしていただきたいのです」

「何？　賭博の取り締まりは我々の仕事ではないだろう。刀禰（今で言う町内会長のような人）たちの仕事だろう、さらには検非違使庁の仕事だろう」と義清が言った。

「お声を小さく。これは内密のことで」と慌てて役人は言った。

それからさらに言葉をつづける。

「それが、検非違使庁の役人の言うには、どうも屈強の男たちが見張りをしていて、刀禰たちが近づけず、検非違使が行くと、すでにもぬけの空で、どうも検非違使の動きがいちはやく彼らに伝わっているようで、歯が立たないそうです」

「困ったことだろう」と従兄の憲康が言う。

「どうも検非違使庁の動きを彼らに伝えているやつらがいるらしい。刀禰の方では、はやく何とかしてくれ、と再三の願いが出て、院庁にまで願いが上がったようで」と再び役人が言った。

何と言うことだ。それに、屈強な男たちが見張りをしているとなると、かなり大がかりな賭博のようだ。遊びの延長の賭博とは違う。大きな砂金が動いたり、暴力沙汰の取立があったり、子どもの売り買いが行われたりしているのかもしれない。貴族もかなり中に入っているのではないか。

「よし、わかった。場所はどこで、開帳はいつだ？」

「左京五条 四坊一保あたりの小家、刀禰の 秦重正が案内するということです。開帳は今日の 申の刻（午後五時）あたり。集まり出すのは、未の刻（午後三時）から。詳細は重正が会ったときに申しあげるとのことです。刀禰の重正が、家人を使って、それまでの様

子を監視しておくと言っております」

「では、鳥羽殿から街まで時間がかかるので、午（うま）の刻（昼・十二時）、ここに集まって、いっしょに出掛けよう」と憲康が提案した。

義清は同意し、家人で武芸に通じている者を数名、同道させることも約束した。

大勢で刀禰の家を訪れれば、賭場を開いているやつらに気づかれるので、義清ひとりが刀禰の家の外門をくぐった。中門の前に、萎烏帽子、直垂、指貫袴を着けた刀禰らしき人が立っていた。こめかみにたくさんの白髪がはえている。かなりの歳のようである。

義清を認めると、名を告げ、礼を言い、すぐに、義清を伴って門を出て、「あの邸宅の裏にある小家がそうです。元は藤原元信の家人の家だったのですが、元信が亡くなり、しばらく空き家になっているのです」と言った。ここからだと小家はまったく見えなかった。

「大勢の人がすでに小家に入りました。今日は大きい賭博が行われるようです。一網打尽にひっとらえてください。ここら辺りの住民は夜は危なくていっさい外に出ることができません。賭博に負けたやつらが自暴自棄になって何をしでかすかわからないからです」と刀禰が告げた。

「わかり申した。北面の武士の面子にかけても捕まえて見せます」と言い、再び、憲康のいるところへ帰っていった。みんなは、義清の帰ってくるのを二条万里小路の里内裏の中門のところで待っていた。義清がつくと、刀禰を交えて賭場への踏み込みかたを相談した。

義清は張り切った。自分のやることが人々の役にたつことがわかったからである。

酉（とり）の刻（夕方・六時ごろ）を一つ過ぎたあたりで押し入ることを決めた。さらに、入口を塞ぐ役目、賭博者を捕縛する役目、見張り番をやっつける役目などを決めた。それまでは彼らに気づかれないよう、小路の裏で隠れていた。

いよいよ踏み込む時刻に近づいた。東洞院大路をまっすぐ下って、例の小家に近づいた。

「おい、あれはなんだ」と康清は突然叫び、指さした。

「ああっ」

義清はそれを見るなり走り出した。憲康も、ついてきた数人の家人もいっしょに走り出した。

小家の家の門のあたりから、萎烏帽子や立烏帽子をつけた男たちが慌てながら、必死で四条大路を西に向かって走っていく。何人かは出てきたところで転んでいる。

「やられたのでは」と憲康が言う。

「どうしてだ」と義清が叫ぶ。

みんなはすぐに家の中に押し入った。土間には、藁草履などが散らかっていた。部屋にあがると、賭けに使う双六盤がいくつか転がっていた。訳のわからない表も貼られていて、名前と○や　が書き込まれていた。

遅れて刀禰が入ってきた。

「今日もまたやられましたか」と相当落胆したのか、力なく言うと、土間に崩れ落ちるように座り込んだ。

「検非違使でもだめ、北面の武士でもだめ、京はいったいどうなっていくのでしょう」と刀禰は座り込みながら、天井を仰いだ。

×

「申し訳ない」と義清が深々と頭を下げた。いったいどうなっているのだと、自分が叫びたいほどだった。
「通じているやつが院庁にもいるな。一足遅かった」と憲康が言った。
「それは、北面の武士の中にもいるってことか」と義清が尋ねた。
「そういうことだってありうる」
「探せないのか」
「むずかしいだろうな」
「どうして」
「やつらに伝えに来たやつを捕まえても、そいつらは北面の武士でも検非違使でもないからね」
「よくわからん」
「仲介者がいるってことよ、だからいくらでも言い逃れができるってこと」と憲康がふてくされたように言う。
「義清さま、これを」と家人のひとりが奥の部屋から和紙に書かれた大きな表を手渡した。そこには競べ馬の出走予定者の名前が書かれていた。義清の名前があった。その下に何人かの名前がすでに書かれていた。一番人数が多かった。表を覗き込んでいた憲康が言った。
「ほほう、一番人気ではないか」
「笑い事ではないよ」と義清が言う。
「賭博を取り締まりに来て、自分が賭博の対象にされているって、どんな気分ですか」と家人のひとりが、皮肉のつもりなのか、それとも不思議に思い、それを尋ねたのかわからないが言った。だが、どのような気分なのだ、と自分に尋ねたかった。とにかく不快だった。それは間違いない。
「競べ馬に出られるのですか」と刀禰が首を傾け、義清をじっと見つめる。
「いや、出ない」

義清は思わず言う。すると、そんなことは疾(と)うの昔に決めていた、と思えてきた。
「こいつは競べ馬の名手なのだ」と憲康が笑いながら言う。
「出ないと言っているではないか」
義清は怒りながら言う。
「ほうほう、よく考えろよ。鳥羽上皇さまはお前が出るのを楽しみにしていらっしゃるんだから」憲康がいさめてくる。
「そのようなことはわかっている」
「わあ、すごい剣幕だな」と憲康は相変わらず、笑いながら言う。
笑っているのに眼光だけは真剣な表情をしている。こいつめ、何かを決めたな、という思いがしたのだろうか。
今日の一日はいったい何だったのだろうかと思う。そう思った途端に、暗記していた古今集の歌が思い浮かんだ。
「み吉野の山のあなたに宿もがな(あったらなあ)世の憂きときの隠れ家にせむ」（古今集・九五〇）
「あしひきの山のまにまに隠れなむ憂き世の中はあるかひもなし」（古今集・九五三）
それらをつぶやきながら、今後、競べ馬にはいっさい出ないぞ、と思った。

九（同年、二十歳）

義清は待賢門院庁の侍所の役人から、密かに、今日、お付きの者を従えず、女院さまが白河法王火葬塚へおいでになると聞いた。女院さまはときどき、そのようなお忍びの散策をなされるそうだ。

白河法王の火葬塚とは、大治四年（一一二九）七月十五日、法王が崩御され、香隆寺（こうりゅうじ）の乾（いぬい）（北西）にある「衣笠岳（きぬかさだけ）」の東下の野で荼毘（だび）に付されたのだが、その場所に造られたものである。

お骨は、最初はしばらく近くの香隆寺に置かれていたが、遺言により鳥羽殿に建てられた三重の塔の下に厳重に収められた。従って、お骨は香隆寺にも火葬塚にもない。だのになぜ女院はときどき火葬塚においでになるのか、しかも、途中からはお一人で行かれるとのことである。

義清には何となくわかるような気がした。門院さまはきっと白河法皇の魂はまだこの火葬場においでになると思っておられるのだ。香隆寺にも鳥羽殿の三重の塔の下でもない、この火葬場に。だから、法皇さまにお会いになるためにここにおいでになる。

女院は白河法王に寵愛（ちょうあい）され、また、女院は法王をしたい、愛し、尊敬なさっていたに違いない。法王は女院のためなら何でもなさった。何でも許された。法王にとって、女院はわが子であり、わが弟子であり、愛人でもあったのだろう。また、女院にとっても法王は親であり、師であり、愛人でもあった。それをお亡くしになったのだから、悲しみはいかほどであろうか。他人には窺いしれないほど深いものであろう。

そのようなことを思い、お参りなされるお姿を想像していると、女院を遠くからでもいいから一度拝顔したい。遠くからでもいいからそれとなくお守り申し上げたいという思いがふつふつと湧いてきた。それは非礼なこととはわかりながらも、そうしたいという欲求を抑えることができなかった。

ただ眺めるだけだ。女院に気づかれなければそれでいいではないか。

義清は、自分の行為を正当化する理屈を考えた。決して気配を感じられたり、顔をみられたりしてはいけない。それは絶対避けねばならないと思った。だが、どうしてだかわからないが、歌を書き付けた懐紙だけは忘れなかった。

義清は朝早くから火葬塚に行った。火葬塚は土が方形に盛り上げられ、そこに木々が植えられ、正面には白河法皇火葬塚という立て札が立てられていた。質素なものである。それは当然だろう、そこで荼毘が行われたというだけであり、遺骨や遺品が置かれている訳でもない。何だか寂しさを感じさせる塚であった。

法王はとてつもなく大きな力を持っていたと聞いている。それが、ここで焼かれてしまうと、あっけなく力が無くなり、貧弱な記念塚となってしまったことが哀れさを感じさせる。これを見て、女院さまはさぞ残念で悲しく思われるだろう。支えをなくした不安さはいかばかりであろうか。たとえ鳥羽上皇が背後にいて、彼女を支えていても、それは白河

法皇ほどではない。女院にとっての法王は、唯一絶対的な支えであったのだから。
　そのようなことを思いながら、義清は火葬塚の周囲をあちこち見回し、女院に見つからないで、拝顔できるようなところを捜した。
　あそこならいける、と、塚から少し離れた所にある木の茂みを発見した。義清はそこに向かって歩き出した。それは正面のすぐ後ろの少し丘になっているところだった。茂みと言っても木が数本植えられているだけである。だが、木には大きくてひろい葉っぱがたくさん付いていて、茂みの後ろにおれば姿は見えない。ところがこちら側からは、葉の隙間を通して、塚の様子はよくわかる。
　ここはおあつらえ向きの場所である。顔の表情まではっきりと見えそうだ。まるで、誰かが義清のために造ったようなものだった。
　義清は、どっかりと木の根っこあたりに座り、何度も塚を見る工夫をしながら、待賢門院さまの到着を待った。
　一ときほどすると、かすかに人の動く気配を感じた。それは風の音に混じって、人の歩く音のようである。草履とはいえ、土と草履との間でかすかな摩擦を起こし、音を立てる。さく、さく、さく。かすかな音だ。
「いよいよ来られたか」
　細い道の先の方を見つめると、壺装束に眼を射るようなあでやかな柿色の袿をかずいた三十四、五歳の公家婦人がこちらに向かって歩いてくる。足下には、萌葱色に菱形模様の入った小袖の裾、その上に薄青色の単衣の裾が歩く度に少しだけ揺れる。足には白い緒太草履を履き、手には市女笠。かずいている袿の間から優美できりっとした顔が見える。少し青白い。きっと苦悩のためにそのようなお色になっておられるのだ。待賢門院さまに違いない。じっと見つめた。こんなにはっきりと待賢門院さまを見つめたのは初めてだった。高貴な気品があたりにほとばしっている。美しい。義清の心は女院の姿に大波のように高まった。
　女院は、しばらく、火葬塚の正面で立ち止まられ、それを睨むようにしておられた。櫓に組まれた松明の上に棺が置かれ、それが赤い炎に包まれ、ごおごお、と音を立てて焼かれているのを想像されているのではないか。棺が焼け落ち、焼かれている白河法王が現れだしたのではないか。もうこれ以上、耐えられないといった苦悶の表情をなさっている。
　それから、ゆっくりとひざまずかれ、合掌されながら、ふたたび火葬塚の一点を見つめ、しばらくお動きにならなかった。そのうちに、小さな声を挙げ始められた。それはか細くて震えていた。細い声が哀愁を帯びて義清の胸を強く打った。
　待賢門院さまにはおつらいことが多すぎる、と思った。
　前関白忠実の娘、勲子（後泰子と改名）さまが長承二年、鳥羽上皇に入内され、長承三年（一一三三年）には皇后になられた。これには女院さまはいたくお腹立ちになられたことであろう。鳥羽天皇の最初の后として、七人のお子をお産みになり、天皇のお母上であらせられる女院さまを差し置いて、入内二年目で、三十数歳になられている勲子さま

を皇后にされるとは女院さまをないがしろにするにもほどがある。これは今まで尽くされたことをお認めにならないことでもあり、女院さまにとっては許されないことである。きっと、そこには藤原摂関家とのいろいろなしがらみがあり、鳥羽上皇さまも苦渋の決断をなさったと思われるが、そのようなしがらみによって上皇といえども自由に決められない世の中とはいったいどういうことだろうかと、義清は腹立たしく、情けなく思った。と同時に、そのような仕打ちを受けられた女院さまはなんとお気の毒なことと思うと、他人のことであるのに腹の底から怒りが噴き上がってくる。

それに、太治四年には通仁親王が薨去され、長承二年には最も可愛がっておられた禧子内親王が十二歳の若さでこれまた薨去された。それに、君仁親王は生まれつき障害を持っておられ、それにもお気遣いをなされている。

さらに、長承三年（一一三四年）には藤原得子が入内され、鳥羽上皇はいたく得子が気に入られ、彼女が来てからは、待賢門院とは、夜、褥をお合わしにならない、とのことである。夜は常に得子さまのところへ通われるということである。待賢門院さまが、どんどん追い込まれているといったありさまで、なんといたましいことか。白河法王さまがお亡くなりになるとはこのように女院さまの運命をかえることなのであろうか。腹立たしくて、悲しい。

女院さまの泣き声は徐々に大きくなり、袖で顔をお隠しになってはいるが、お声は震えながら、風に乗ってススキ野を駆け抜けていく。

その泣き声が何とも耐えがたい悲しみを含んでいて、義清の心をも悲しみに充たされ、涙がほとばしってきて、それを止めることができなかった。涙とともにすすり泣きの声が思わず出た。それでもしばらくは何事も起こらず、義清の声も徐々に大きくなっていった。と、突然、女院さまの声がやんだ。すっくと立ち上がられ、こちらを怪訝な顔をして眺められた。眼には涙を溜められ、それが陽の光を受けて真珠のように光り輝いた。

これはいけない。悟られたと思うと、戸惑いで身体が震えた。

「そこにおられるのはどなたかな」と尋ねられた。

もはや隠れていることなどできない。義清は腹をきめ、すっくと茂みから身体を出した。

「佐藤義清という北面の武士でございます」

「義清か。堀河局（義清の歌の師、源顕仲の娘）から名前はよく聞いておる。なぜここに？」

「申し訳ございません。ある人物から、待賢門院さまが火葬塚へ参られるとお聞きし、居ても立ってもおれず、一目でいいからお姿を拝見したく、礼を失することは重々わかりながら、このようなところに隠れておりました。申し訳ございません」

義清は土の上にひざまずき深々と頭を下げた。

「そんなにかしこまらなくていい。お付きの者もおらぬ故、もっと気楽に。それで、なぜ、泣いておられたのじゃ」

「あまりにも待賢門院さまがお労しく思われ、つい、涙が。僭越なことで、申し訳ありま

せん」
「われのために泣いてくれたというわけか」
「門院さまのことを考えていると自然に涙が」
「それはうれしいことじゃ。われのことを思ってくれる人がいるということは。でも、われはなぜ泣いていたと思われるか？」
「はい、それはもう、いろんなことを思い出されて。たとえば、勲子さまを皇后にされたこと。そんな腹立たしいことがあろうかと。白河法王さまがおられたらそのようなことは絶対なかっただろうにと、白河さまの崩御をお嘆きになられ、涙をお流しになられたことであろうと」
「お前さまの言う通り、白河法皇さまがお亡くなりになられたことは悲しい。通仁親王、禧子内親王が亡くなったことも悲しい。白河法王さまが生きておられるとき、法王さまがはわたしの前から去られるなどとは思いもしなかった。あの巨大な力はずっとわたしの前においでになると思っていた。通仁親王も、禧子内親王も同じこと、勲子の皇后も得子の入内も、そんなことがあろうとは思いもしなかった。この世にあるものすべてが変わるのだということを知らなかった。今、白河法皇さまがここにはおられない。通仁親王、禧子内親王もいない。鳥羽上皇さまも昔の上皇さまではなくなった。すべて、亡くなられたり、移ろわれたりした。それを悲しみながら心に染み込ませるためにここに来ているのじゃ。悲しみが深いほど、仏様はわたしに近づいてくださる。仏様だけが確かなものとしてわたしを慰め励ましてくださる」
待賢門院さまは眼に涙をいっぱいためながら、こちらをしっかりと見つめられた。それからゆっくりと義清の方へ歩いてこられた。義清の鼓動は激しく打った。側に寄られ、義清の手をそっと握られた。何ともいいがたいいい匂いが義清の身体全体を包みこんだ。
「わたしのために涙を流してくれてありがとう。そう、義清は歌が上手だと聞いた。歌のことでもゆっくりと話してみたい。一度、わたしの御所に来ないか。今晩でもいい。そっと二条万里小路第の築地の隠れ戸が開くようにしておくから。今日は家人の他誰もおらぬ。隠れ戸は西側にある一本の桜の木のところだから」
待賢門院さまはそう言うと、手を離され、そっと後ろにお下がりになった。義清は慌てた。
「はい、ぜひ、参上しとうございます。ああ、それから、これを門院さまに読んでいただきたく、書き付けてまいりました。読んでいただけないでしょうか」
義清が懐紙に書き付けてきた歌を恭しく差し出した。
「よろこんで」
待賢門院さまはそれを丁寧に受け取ると、ゆっくりと上着の胸の所に差し入れ、そっと上から押さえられた。義清は自分の頬が撫でられたような気がした。
「ほんとうに御所を訪れていいのだろうか」と思った。いや、いい。すべて一途がいい。待賢門院さまを一途に思って何がわるい。

待賢門院さまに手渡した懐紙には次のような歌を幾首か書付けておいた。

花を見る心は よそに隔たりて身に付きたるは君が面影（五九八）

葉隠れに散りとどまれる 花のみぞ忍びし人に逢ふ心地する（五九九）

一方に 乱るともなき我恋や 風定まらぬ 野辺の 苅萱（六〇三）

もの思ふ袖にも月は宿りけり濁らで澄める水ならでども（六三二）

……

あの夜からもう幾日たっただろうか。

義清は、鳥羽殿の近くを流れている桂川のほとりに出て、河原に腰をおろした。岸の向こうには広々とした野原が広がっている。川の流れは澄んでいて、ところどころで小さな白波を立てている。その上を名の知らない数羽の鳥が悠々と飛んでいる。こちら側の河原では小石が西日を受けて白く光っている。何となく紀伊・紀ノ川を思い出す。

景色はのどかで、このようなのどかな心になりたいと思うのだが、義清の心はその逆である。

心が乱れているということは自分でもよくわかっている。だが、押さえようとしても押さえられないのだ。のどかな風景を見れば少しは治まるかと思ったが、そうはならなかった。待賢門院さまのことが何度も心をよぎる。苦しい。あの夜のことが思い出される。

火葬塚で出会った後、院さまが言われたように、夜、二条万里小路第へ行き、隠し戸から中に入った。そこからすぐの西の対屋へ近づいた。

縁のところから小さな声でお呼びすると、「義清か、よくきてくれた」とおっしゃり、御簾を開けて 廂に出てこられ、草履の紐を解く義清をじっと眺めておられたが、解き終わると、そっとお手をお出しになり、義清が縁にのぼるのをお助けになった。

「遠慮はいらぬ。お付きの者も余所へやったから。あなたとわたしの二人だけしかおらぬ」

義清はもう興奮のしっぱなしで、頭がふらふらしていた。

月夜のため、廂のところの門院さまのご様子がかなりはっきりとわかった。髪は垂れ髪、小袖の下着に 打袴、その上に重ね 袿を羽織っておられた。色はわかりかねたが、それぞれの衣は鮮やかそうだった。おやさしげで色白のお顔がにっこりと微笑まれていて、それはもう天女のお顔としか言いようがなかった。

部屋には燭がともされていてあたりの様子がかすかに見える。門院さまはさらに義清を帳台の中へお導きになり、そこでお座りになった。

最初は歌についてお話になった。今日、渡した歌についてどれもこれも素晴らしかったとお褒めになり、どのようにして歌をつくるのかとお聞きになった、また、門院さまがお作りになった歌を二、三お示しになり、それをどう改作したらいいのかをお尋ねになったりした。さらには、北面の武士の仕事についていろいろとお聞きになり、義清は最近起こ

った出来事などを話した。たいへん熱心にお聞きになっておられたが、「何だか寒そう、ここにお入り」と申され、袿(うちぎ)を大きく広げられた。躊躇している義清の手をそっと握られ、軽くお引きになった。

義清の興奮は極度になった。袿の中に身体を入れると、衣装の香りと下着を通してかすかに匂ってくる女体(にょたい)の香りが義清の頭の働きのすべてを麻痺させてしまった。何だか、昔の母に抱きしめられているようでもあり、あるいは、天女に抱きかかえられているようでもあった。

義清は門院さまの身体に手を回し、しっかりと抱きすくめた。門院さまの身体のあたたかさが伝わってくる。すると、それはもう門院さまと一体となったような気がする。門院さまも義清の身体に両腕を回して抱かれた。それからゆっくりと倒れられた。義清も門院さまに合わせて倒れると、門院さまの顔が義清の前に現れ、眼を瞑られて、義清の顔にお近づきになった。義清もまた門院さまの唇に自身の唇を近づけると、門院さまが激しくお吸いになり、義清もまた激しく吸った。このようなことが起こりえるとはまったく思いも寄らなかった。

再び、門院さまの手が義清の手を取り、胸前の肌小袖の打ち合わせのところへ持って行かれ、義清の手が下着の中へ入るようにお導きになった。義清は初めて、門院さまの肌に直に触れた。柔らかですべすべとしていて、しかも暖かな肌が義清の身体全体を融かしてしまい、この世にいるとは思えなかった。少し右に掌を滑らせると乳首にあたった。乳房を握ると思いの外大きかった。かすかな息が門院さまの口から漏れた。

その後のことはまったく憶えていない。華美な感覚、愛の快感。すべてが溶けてしまうような恍惚。門院さまとの一体感。それらが今も吹き上がってくる。

もう一度会いたい。義清は何度も思う。でも、それが不可能になった。

「もう一度、お会いしたい、行く日をお知らせください」と朝方、御所を去るとき、門院さまにお願いした。「追ってお知らせするわ」とおっしゃった。「名前は堀河で」とも笑いながらおっしゃった。でも、なかなか堀河の文(ふみ)が届かなかった。

ようやく、六日ほど前、堀河の名の文が届いた。そこには、ただ一首、次のような歌が書かれていた。

伊勢の海あこぎが浦に引く網も度重なれば人もこそしれ

もうお会いしないという意味である。(「あこぎが浦」とは津市の岩田川河口から南の海岸一帯。昔、禁漁区)

もう一度会いたい、という思いが押し寄せる波のようにやってくる。苦しい。どうしようもなく苦しい。じっと耐えろ、あの夜の思い出がある。それを心に秘めて一途に思いつづければいい。自分にそう言い聞かせる。

波の音が聞こえるような気がして、川の流れを見る。風が強くなったのか、小波が石に当たって砕けている。

心の内に目をやると例の塊がのたうち回っている。もうじっとしていられないといった感じである。

「悲しみが大きくなればなるほど仏に近づけるような気がする」とおっしゃった門院さま

の言葉を思い出す。「悲しいことは仏さまにすがるより他はない」という意味のようにも思えた。

憶えているお経の「般若心経」や「阿弥陀経」を川に向かって唱えてみた。すると、心が少し冷静になり、元気が出てきたようにも思えた。訳のわからない塊も動きを止めたようである。

すると今度は、昨日、帰ってきた紀伊の家での出来事が思い浮かんでくる。

近ごろ、田仲荘からの呼び出しがめっぽう少ない。それにかまけて、田仲荘に赴くことはしばらく遠のいていた。京での仕事が立て込んでいたせいもある。あまり問題も起こっていないようで、安心していた。それに、仲清はほとんど田仲荘で生活しているようで、彼に任せておけば大丈夫だと思っていた。

ところが、先日、田仲荘からではなく、荒川荘の元幹（荒川荘にいる義清の味方）から文が届いた。「一度、田仲荘に帰ってき、起こっている問題を義清さまによって解決して欲しい」と書いてあった。何か、荒川荘の住人二名が田仲荘の住人に引っ捕らえられ、仲清のところへ連れられていき、田仲荘の屋敷牢に入れられたという。荒川荘からの再三の解放の要求も受け付けず、困っている、とのことである。これなら村戦争になりかねない。その前に、穏便に解決して欲しい、と、元幹が言ってきた。元幹には以前、同じような逆の事件で世話になっている。元幹が言ってくるのだから相当大きな問題になっているのだろう。何とか解決してやらねばならない。そう思い、門院さまのことで苦しさと心の動揺を抱きながら、田仲荘に帰った。

紀伊の家に着くとさっそく、家人で雑掌の善吉を客間に呼んだ。

「何だか、荒川荘との間で問題が起こっているそうではないか」と尋ねた。

「いや、たいしたことではありません。義清さまにわざわざ来ていただくほどのことでもございませんでしたのに」とやや素っ気なく言った。

しばらく会わないうちに善吉の態度が少し変化したように思った。どこがどう違うのかわからないが、以前は、義清が行くともっと「よく来てくれてうれしい」という思いが善吉の身から出ていた。それを感じ、義清も苦労して来たかいがあったと思い、いい気分になれたものだ。だが、今度は違った。そのような気分にはなれない。それに、何が問題なのかもはっきりとは言わない。義清さまに解決してもらわなくてもこちらで何とかするのにといった思いが強く伝わってくる。だったら、荒川荘からはあんな文が届くはずがない。

「それで、弟の仲清はどうした」と尋ねた。

「はい、ただいま国府のほうへ参っております。この度の件で、仲清さまは国守の徳大寺公重さまとたいへんご懇意になさっておられますので、きっといい返事がいただけるとおっしゃっておられました」

「そうか、仲清が解決に動いておるのか」

「はい、この頃は仲清さまがたいへん力をおつけになって、いろいろ解決していただいております。それでみんなの信頼が深まり、わたしも楽をさせてもらっております。立派に

なられました。義清さまもお任せになっていて大丈夫です。ご安心ください」
「ほほう。それほど慕われておるのか。それは頼もしい」
義清は仲清の成長を聞いて、彼がそんなに成長しておったのかと、うれしさが半分起こったが、どこかに引っかかるものがあった。
どのような問題かは、雑掌の善吉が吾に告げていいものかどうかと悩んでいるようだ。仲清に許可を得てからでないとまずいとでも思っているのか。まあよい、それなら後で誰かに尋ねてみよう。
「それでどなたから荒川荘との間に問題が生じているとお聞きになりました？」
「そりゃ、荒川荘では、誰ひとりこの出来事を知らないものはいないだろう。村人が二人も屋敷牢にぶち込まれて帰されないとなると大騒ぎだ。もともと仲のいいどうしでないからな。京には荒川の人たちも大勢やってくる。すでに院庁にも問題は聞こえておるわ」
「はあ」
納得したように善吉は頷いた。
「わかった。仲清が帰ってきてから、彼から様子を聞くことにしよう。ご苦労であった。後はよろしく頼むぞ」
「かしこまりました」
善吉はほっとしたような表情を見せた。これからはたいへんだぞ、二人のご主人に仕えなければならないのだから、といった困惑の表情を見て取れた。
善吉が去った後、馬の飼育を頼んでいる宗太でもいるかと思い、馬屋に向かった。丁度馬に餌を与える時刻らしく、宗太は刈り取ってきた草を馬に与えているところだった。義清が声を掛けると振り向いて義清を見つけ、うれしそうに微笑んだ。頭には汚れた萎え帽子をかぶり、小袖に直垂、指貫といった装束をつけて仕事をしていた。
「義清さま、お久しうございます」
彼は手を止めて挨拶をした。馬も義清を認めて、ヒヒヒンとないた。
「仲清はこの馬を使っていないのか」
「はい、馬をあと二頭ほど飼っております。武芸の稽古に必要と言って、仲清さまがお買いになりました」
「そうか、そうだったな」義清は慌てて宗太の答えに合わせた。
馬のことは仲清からは何も聞いていない。馬を飼うというのは家にとって重要なことだ。それを当主である自分に何の相談もなしに飼うとはどういう了見なのかと、仲清への怒りが起こった。それと同時に、京での見聞きする親子の仲違い、兄弟の仲違いの噂を思い起こした。上皇と天皇との仲違いの噂も同時に。
このようにして、親子、兄弟の仲違いが起こるのだ。それは避けねばならない。このようなことで腹を立てている自分が情けない。義清はそう思った。
「それはそうと、荒川荘との間で問題が起こっていると聞いたのだがどういうことかな」
「それはもうみんな噂し合っていますわ。二人、牢に入れられているって」
「なんで捕まえたのかな」
「何でも、田仲荘の人を引っ捕らえに来た荒川荘の村人を、逆に田仲荘の村人が引っ捕らえて、仲清さまのところへ連れていったそうで。それで、二人は今、屋敷牢へ入れられているのです」
「なぜ、荒川荘の村人が田仲荘の村人を引っ捕らえに来たのだ？」

「荒川荘にある高野寺付近の山の木はカシやクヌギが多く、炭作りに適していることはご存じでしょう」
「ああ、あそこは、田仲荘の村人も、木をとることが許されていたところだ。田仲荘には平野が多く、森や林がほとんどないので、あそこで木々は調達していた」
「ええ、それで、炭作りの季節になり、田仲荘の村人が何人か木を切りに行ったそうですが、荒川荘の村人が番をしていて、田仲荘の村人は追い返されたそうで。それで、或る日、田仲荘の若者が数人で木を切りに行き、彼らを追い返そうとした荒川荘の村人と闘乱（けんか）になり、番をしていた荒川荘の住人を引っ捕らえ、仲清さまの所へ連れていったそうです。何しろ、彼らは、仲清さまに武術を教えてもらっている者たちでして」
「なるほど。以前、両荘で仲良く共有していたところで問題がおこっているのだな。田仲荘にとっては死活の問題だ。それで、その件はどうなっておる。仲清は、木を切ることを認めれば、二人は帰すと言っておるのか」
「そのとおりで」
「ところが、荒川側は認めないのだな」
「今度はかなり頑強で」
「仲清はどうするつもりだろう」
「それはわたしにはわかりません。でも、きっと仲清さまは我々にいい方向で収められます。ご心配には及びません。仲清さまにお任せになっておればいいです。。仲清さまもずいぶん成長なさいましたから」
「ほう、そうか。仲清はえらく信頼されているのだな」
「はい、信頼申し上げております」
　多くの荘民も同じかもしれない。彼がこれほど村人たちに慕われているとは思いもしなかった。義清が北面の武士として仕事をこなしている間に田仲荘では忘れられた人になってしまった。自分の出る幕はなさそうである。
　これは心強いことではないか。大いに安心して、喜んでいいことだ。だが、どこかふにおちない気分が残っている。
「仲清さまは、いつか必ず、以前にあった田仲荘の土地を取り返す、と言っておられます。だから、これに妥協するおつもりはないと思います。田仲荘は以前より力強くなりました。荒川荘などには負けません。わたしも仲清さまから武術を習っています。そういう人が増えました」
「へえっ、お前が武術をね」
「はい、仲清さまは、これからの荘園は自ら守らなければならない。関東ではどんどん荘園の領主が兵を育てて、領地を拡張している。やがて、畿内でもそうなるだろう。そのために、志のあるものには武術を指導してやるとおっしゃって。隣の吉仲荘の平さまなど相当強い武士団をつくっておられるとか」
「武術を教えていることは知っていたが、そこまで熱心とはね」
　それを聞いて、一抹の不安が起こった。いや、危うさを覚えた。

「義清さまも、ぜひ、田仲荘にたびたびお帰りになり、田仲荘の武士の長としてわれわれに武術をお教えください」
「武術をなあ。そうだな」
「ぜひ、我々を誰にも負けない人にしてください」
義清は宗太の言葉に衝撃を受けた。今まで、田仲荘の仕事は領地のいろいろな出来事を上手に調整して、荘民が平和な生活を送れるようにしたり、年貢を徴収したり、野原を開拓して土地を増やしたり、そのようなことだと思っていた。しかし、武術を教え、その長になるというようなことは考えもしなかった。預所とはその土地の武士の長になることなど予想だにしなかった。
これでは、例え、北面の武士を辞めても、田仲荘の預所である限り武士でありつづけなければならない。これまで、北面の武士を辞めれば武士ではなくなると思っていたが、宗太によってそれは違うということが初めて気づかされた。
そして、それは自分が決めたことではなく、佐藤家の長男として、産まれたときから決められていたことだ。はたして、それで自分は満足できるのか。納得できるのか。
自分は歌を詠むのが好きだ。歌を詠みたい。いい歌を作りたい。だが、今までに、武士でいい歌を詠んだひとがいるのか。多くは武士を棄て、出家した人が多い。自分は仏を信じている。仏のことを学びたい。仏に近づく道を歩みたい。仏の道を歩くことと武士でありつづけることとは矛盾しないのか。
わからないことだらけである。いったい、自分はどうしたらいいのだろう。
「義清さま、どうなさいました。わたしが何かわるいことでも」
「いやいや、そんなことはない。宗太が武士になろうとは思いよらなかったから、びっくりしたまでよ」
「武士になるなんて、ただ、武術をならって、田仲荘のお役に立ちたいだけで。稲作りもしっかりやります。馬の世話もしっかりやります」
「そうだな。わかった。それに、宗太の言う通り、この件は仲清に任そう。仲清が何か言ったら、すべて任したと言って置いてくれ。わたしは、明日早くにここを発つよ。仲清には会わないでおこう。会えばまた何だか問題を複雑にしそうだから」
「会って、話し合われても、仲清さまは義清さまを尊敬されているので、決して義清さまに逆らうようなことはなさらないと思います」
「それはわかっておる。しかし、これはもう仲清にすべてを任そう。そう決心した」
「わたしがなにか悪いことを言ったようで、気を悪くされたのでは」再び宗太がが言う。
「そんなことは決してない。いいことを告げてくれた。状況もよくわかったし。感謝している。いや、仕事のじゃまをしたな。草をやってくれ。馬は家族と同じだから、大事にしてやってくれよ。三頭もの世話をするのはたいへんだけれど、頼んだぞ」
「それはもう全力でやります」
「頑張ってくれよ」
義清はそういうと母屋の方へと歩んで行った。
義清は、弟の仲清が国府から帰ってくるまでにここを発とうと決心し、それを果たし、昨日の夜、京の家に帰り着いた。今度の田仲荘行きは例になく心を重くした。
元幹には、この件はすべて仲清が仕切ることになっている。わたしが出る幕がないので、申し訳ないが何もすることが出来ないと文に書いて、家人に託した。

今、こうして桂川をなんとなく眺めていると、自分は人生の岐路に立ちつつあるという思いがふつふつと湧いてきた。自分の行く末を自分で考えろという思いがする。今までも自分で自分の在り方を決めてきたと思っていたのだが、どうもそうではないことがはっきりした。これからは自分のことは、すべては自分が決める。例え今まで通りの在り方をつづけたとしても、それはそう自分で決めたことだとしたい。

十（一一三八年・保延四年、二十一歳）

昨年（保延三年・義清、二十歳）の十月には鳥羽上皇と待賢門院さまとが最も多く使われていた「二条万里小路第」が付け火に遭い、半焼して使い物にならなくなった。以後、今年の二月には待賢門院さまの御所である「鴨神社」、同月「四条西洞院第」さらに同月「二条東洞院内裏」。三月には多くの家が焼ける大火が生じ、その他にも多数の家が焼かれ、京の街には付け火が横行した。特に里内裏や公家の豪邸が狙われている。鳥羽上皇さまも、「二条万里小路第」が焼けたときはさすがにお怒りになり、なんとか付け火を食い止めろとおっしゃったが、その後も「四条西洞院第」が焼け、鳥羽上皇の側近の屋敷などが何軒も付け火された。

院庁も検非違使と協力して、本格的に内裏や公家の屋敷の見回りを強化している。北面の武士も見回りにかり出された。

今夕から夜にかけて義清と従兄の佐藤憲康が組んで、主に、一条から二条にかけての里内裏や高級官僚の館を見回ることになった。

「そなたと組むと必ず何かが起こる」と従兄の憲康が不服そうに言った。

「何を言うか、我々の勘が鋭いということではないか」

「えらく自信満々だな」憲康が笑った。

一条大路から東洞院大路を下って二条大路へと歩いていった。この通りには土御門東洞院第、高倉殿、花山殿、藤原家成殿、など、数多くの大きな館があった。

もうすぐ二条大路へかかろうとするところで、義清が足を止めた。

「おい、あれを見よ」

すでに薄暗くなっていたが、文字ははっきりと読めた。

「次の屋敷のうち、どれが一番先に火災に遭うか」という主旨の張り紙が、屋敷の板塀に貼られていた。それから、次のような名前が書かれていた。土御門殿、土御門東洞院殿、高倉殿、花山院、源有仁第、藤原盛人邸、藤原宣義邸、源頼宗邸。

これらはすべて、東洞院大路と二条大路との間に挟まれた地域の豪邸である。紙の汚れぐあいから、三週間ぐらい経っているような気がした。これはただのいたずらか、それと

も賭けのための表か。
どうも賭のための表ではないか、と思った。これまで幸いにもどこも火事にはなっていない。すると、もうすぐ付け火が行われる可能性がある。賭の胴元と付け火犯とがぐるになって、いちばん賭け人数の少ないところを付け火するのかもしれない。それは我々にはわからない。
だが、賭けの胴元と付け火犯とはまったく何の関係もなかったとして、付け火犯がこの表を見たら、どこを狙うだろうか。
義清ははっと気づいた。
「憲康、今日は、ここに書かれていない豪邸がやられるかもしれないぞ。これは吾の勘だ。抜けている豪邸が一つある」
「どこだ、それは？」と憲康が尋ねた。
「藤原 賴人（よりと）の豪邸」
「強欲賴人と呼ばれている国守。親の 賴統（よりとう）は、受領のとき農民から朝廷に訴えられたが、訴えた農民をことごとく殺し、おとがめなしとし、後は、金に任せて大いに出世した男。子の賴人も、目代（国守の代わりとして地方に派遣された地方在官）をたきつけて不正な取り立てをし、農民を泣かせ、親以上に私服を肥やして莫大な富を持っているという噂だ」
「そう。その通り。賴人は金にあかせて武士を雇い入れ、警護を十分にしているので付け火には遭わないだろうと胴元は考えたのではないか」
「なるほど。金目のものを盗むためではなく、何らかの別の事情で付け火をするとしたら、この辺りで最も恨まれているのは彼ではないか」
「吾もそう思ったのだ」と義清が言った。
「でも、そこを狙うとしても今日とは限らないだろう」と憲康が言う。
「そりゃ、そうだ。だが、吾には何だか悪運のようなものが付いている。吾の日に限って、何かが起こる。そなたも先程そう言ったではないか。吾の勘では今日起こりそうなのだ」
「ううん。では行ってみるか」
憲康は先に立って、もとの道を戻りだした。彼もまた今日、起こりそうな気がしたのではないか。賴人邸は中御門大路の近くにある。
目的の屋敷が見えてきた。築地塀（ついじべい）に囲まれ、正門は閉められている。入ることができない。邸内には人がいるのかさえわからない。辺りも静かなものだ。人も通っていない。
「何も起こりそうにないな」と憲康が築地塀からかすかに見える正殿の屋根を見ながら言った。
「いや、何か殺気のようなものを感じる。何かが起こりそうなのだ」
義清はそう言うと、背負っていた矢袋から、矢を一本とりだし弓につがえた。
「いったいどうした。何もないではないか」
弓をつがえながら、数日前、変な夢を見たことを思い出した。目覚めたときは、ただ変な夢を見ただけと思っていたが、すぐに忘れてしまった。だが、今、こうやって弓をつがえていると、それが甦ってくる。
丁度、今見ている屋敷と瓜二つの屋敷があり、今、自分がいるようなところに立ってい

た。前は正門で、大きく開かれていた。
突然、火のついた松明をかざし、意味不明の大声を上げながら僧衣を着た男が正門に向かって走って行く。門番が出てきて彼を阻止しようとしたが、彼は松明を振り回して、それを除けた。火の粉が無数の赤い虫となって散った。彼は更に走って行く。その途中、自分の衣に松明の火をあてた。と衣が炎をあげ、辺りを明るくした。炎が大きくなり、その中に人影がくっきりと浮き上がった。
彼はさらに庭を迂回して本殿に向かっていくのだろう。火に覆われた男の姿は見えなくなったが、揺れる火影だけが見えた。
しばらくすると本殿が赤々となり、柿色の炎が本殿の辺りから上がりだした。多くの人たちのわめきの声が聞こえ、正門から家人らしい女が走り出てきた。しばらくすると、今度は逆に辺りから人々が門の中へ走っていく。いろんなところにある門が開けられ、そこから人々が入ったり出たりし始め、辺りが騒然としたところで眼が覚めた。
あれは何を現す夢なのだろう。まさか、正夢ではなかろうな。
自分の眼前に衣が燃えだし、炎に包まれた男が走って行く姿がありありと見えた。なんだかそれは、朝廷に訴え、殺された農民たちの怒りの炎のように思えた。
その瞬間、築地塀の上に男がひとり屋敷の中から現れた。それは年貢を任国から運んでくる運搬人の姿をしていた。彼は築地塀の屋根の上に立ち、大声を上げた。
「吾たちは袴垂（はかまだれ）大将軍を師と仰ぐ一党。運送人の中に紛れ込み、この屋敷に入った。金めの物が欲しい者は集まれ、何を持ち出してもいいぞ」
義清は矢を彼に向けた。憲康も彼に見習い、矢をつがえようとしたときである。屋敷の左端にある見張屋の二階から一本の矢が塀の男に向かって放たれた。義清は瞬時に方向を変えそれに向かって矢を放った。放った矢がその矢に当り、矢は二本とも軌道を狂わせ何処ともわからぬところへ落ちていった。
義清は再び矢をつがえ、またも同じところから飛んでくる矢を打ち落とした。
その間に、男の姿が消え、と同時に正門が開かれた。どこから現れたのか、数人の男が火のついた松明を持って現れ、また、他の数人の男が太刀を持って現れた。彼らは素早く門の中へと入っていった。大声が飛び交い、同時に豪邸の一部から火の手が上がり、あちこちの路地から人が走り出てきて、火事の豪邸の中へ入っていく。中には空の荷車を引いてくる者まで出てきた。
再び、築地塀の屋根に男が現れた。
「どなたかは存ぜぬが、矢をはじいて下されたお方にお礼申しあげる」
彼は大声で怒鳴った。
「今日は年貢米を運び入れた。倉にはたくさんそれが積まれている。農民から京の飢えた人たちへの贈り物だ。さあ、奪え、奪え」
男はそう言うと再び屋敷の中へと消えた。
「鳥打ちの競技で鍛えた弓も案外役にたつものだなあ」と義清は笑いながら言った。
「吾たちがこんなところにいてはまずい。はやくどこかへ逃げ出そう」憲康が言った。
「まさに、そう」
二人は、人のいない路地を見つけながら、二条の方へと逃げた。
「やはり、そなたと組むと何かが起こるな」憲康が言った。

「明日、院庁の役人めがいろいろと非難するだろうがうまく逃げよう。里内裏ばかりを見回っていたと言うことにしよう」
「それにしてもすごいやつらがいるものだな。ああいう奴らを悪党（権力者に刃向かう者）というのだろか」
「これからはああいう奴らが増えるさ」
義清はそういいながら後ろを振り返った。家々の屋根の向こうに赤々とした炎が見えた。それは夢で見た炎と同じだった。
吾は悪党にはなれないが、悪党を手助けすることができた。それは愉快なことだった。

十一（一一三九年・保延五年、二十二歳）

悩みの消えぬまま年を越え、親友・季政（西住）に勧められて、彼と二人で、嵯峨 法輪寺の庵に住む空仁という聖を訪れた。
法輪寺は嵐山の中腹にある寺で、和銅六年（七一三年）元明天皇の勅願によって行基菩薩が創建した寺である。
大堰川に掛けられている法輪寺橋（渡月橋）を渡ると、左に折れ、しばらく行くと嵐山に登る右肩上がりの道がある。辺りには竹林があり、その隙間から大堰川が見渡せた。川面はきらきらと輝き、河原には、幾日か前に降った雪がまだいくらか残っていて、白い模様を作っていた。おおと、義清は思わず声を出したくなった。それは紀伊竹房の自宅の館から見える紀ノ川の姿とそっくりだったからである。
竹馬にする竹を探しながら、その向こうに見える紀ノ川を無心で眺めた少年時代のころを思い出した。あのときは、世の憂さなどまったく気づきもしなかった。ただただ、無心で川の色や音を味わっていた。いや、味わっているなどという意識もなかった。ただ、辺りの自然に心を溶かし込んでいた。あの心情こそ無我の心情であろう。
「どうした。何をたたずんで見ている。歌でも思いついたのか」と季政（西住）が歩くことを促した。
ようやく、寺の片隅に建てられた庵に、午をかなり過ぎた頃に着いた。
中に通され、季政といっしょに並んで座った。季政を見ると、彼はすでに何かを決意したように感じられた。堂々としていて、ひとまわり大きくなった。それに何か生き生きとしている。それに義清に何かを与えようとしている。吾を見よ、と言っているような感じである。
先月も、季政は、義清を洛北のとある山寺にいる聖のもとに連れて行き、その帰り、今度は、一年ほど前に出家した空仁（空人とも言う）という男が法輪寺近くの庵にいるの

でぜひ会いに行こうといってきかなかった。
　まずは、空仁とともに、三人で庵の奥の棚にある小さな仏像に向かって般若心経を唱えた。辺りの静けさが、聖なる雰囲気を作り、かすかに入ってくる陽の光で、部屋をこの世の世界ではないものにした。さらに、三人の合わさる声がこの世ならぬ世界へ溶かし込んでいく。
　何とも言えない澄んだ気持ちになった。その瞬間義清の中の白い塊は消え、清々しい気分になった。経には確かに仏の力がこもっている。祈りの力がこもっている。
　それが済むと、運ばれてきた茶をすすりながら、仏や歌の話をし合った。
　義清は先日訪れた聖の庵の話をした。ただ一室しかない板床の家であったが、その周りは桜の木で取り囲まれていた。葉を全部落として、冬枯れの木々ではあったが、枝々に春の花を思い描かせ、葉のない木々の影が部屋に落ちてきて、それがかえって風雅を感じさせた。また、夜になってそこを辞したのであるが、そのときの光景が心から離れず、歌に詠んだので聞いて欲しい、と言って、次の一首を披露した。

　　世を捨てて谷底に住む人見よと峰の木の間を分(わく)る月影（七五四）

「すばらしい歌だ。気持ちがよく伝わる。それでは吾も一首披露する」と空仁が言って、次の歌を詠んだ。

　　かくばかり憂き身なれども捨てはてむと思ふになれば悲しかりけり（千載和歌集・雑）

　義清は、自分が出家するとしたら、同じような気持ちになるだろうと考え、しばし、声が出ず、黙っていた。それから、「いや、すばらしい」と賛嘆した。
　季政は、空仁の歌が引き金になったのか「この歌は誰がつくったと思うか当ててみよ」と言って一首詠んだ。

　　うき世をばそむきはてぬといひしかど　人はは(そっけなく)かなくしらざりしかな（私家集）

「いい歌です。世をすてた吾にはよくわかる。そういう気持ちになる。ひとは誰も自分の思いを知ってくれないと」と空仁(くうにん)が言った。
　義清もまた、まるで自分の気持ちを詠んでくれているように思った。だが、ふと吾に返り、おかしくなった。まるで自分が出家することを決意したかのようではないか。だが、この作者の素直な心を直截に表現しているところが気に入った。ぜひ、季政に頼んで、彼の歌をもっと詠ませてもらおうと思った。
「義清、誰だかわからぬか」
「誰の歌なのかぜひ知りたいものです」と空仁が言った。
「行尊さ。義清には宿敵荒川荘を立巻した人だ」
「そのようなこととは関係ない」義清に強い怒りが起こった。いい歌はいい歌だ、と思った。
「いい歌だ。ぜひ他の歌も詠みたい。素直で、心にひびく」とつけ加えた。
「行尊と言えば、もろともにあわれと思へ山桜　花よりほかに知る人もなし（金葉和歌集、雑上）と詠んだひとだな」と空仁は言った。

「とにかく、すごい修行をする人だそうだ。熊野や大峰で」と季政（西住）が言った。
行尊のことは以前から噂には聞いていた。だが、所詮、宮廷歌人だと思って無視した。そういう自分の態度を義清は恥じた。彼は素晴らしい人かも知れない。
「ではちょっとこれを見てくれ」
突然、空仁は片隅の障子を指さした。さして変わった障子ではない。ただ、墨で文字が書かれている。義清も季政も障子に近づいて文字を読もうとした。

草の庵に心は止めついつか又頓て我が身も住まむとす覧　藤原俊成

（長秋詠草・雑）

これもまた自分の心を代弁してくれている歌に思えた。この空仁の庵室はなんとも言えない優を感じる。この世の住処とは思えない雰囲気を漂わす。実に不思議な部屋だ。俊成がこの庵に魅せられたのがよくわかる。吾もまたこのような庵に住みたい。
「俊成が母の喪の年に、暫くこの寺に籠もっていたときの歌だ。これもそう」といって、和紙に丁寧に書かれた書を私たちに示した。
うき世には今は嵐の山風にこれや馴れ行く始めなるらん　藤原俊成（長秋詠草・雑）
戸口から、寺の家人らしい少年僧が茶の入れ替えにやって来て、新しい茶を我々に勧めた。
実においしかった。静かな雰囲気の中で静かに呑む茶は優雅の極みのような気さえした。
しばらくすると、空仁はどこかに消えたが、すぐに枯れ木と落ち葉を持って外から帰ってきた。
「さあ、これをくべてもう少し部屋を温かくしよう」
空仁は炉に落ち葉をくべ、竹筒で吹くと火は大きく燃え上がった。部屋の板塀に火影が揺れた。また、枯れ木をいくらかくべると、ぱちぱちといって更に火力を増した。
「これで少しは暖まるだろう」と空仁はにこやかに笑った。
「ところで、空仁どのが出家なさったのは一年ほど前でしたね」と季政が尋ねた。
「そう、その通り、出家者の赤子ってところかな」
「どうして官職をお辞めになったんですか」
「前々からいつかは出家したいと思っていた。足の引っ張り合いの世界がいやになっていたもので。実父が六位の地下人（昇殿を許されない下級官吏）の身分から従二位まで上り詰めたもので、辺りの公家からはねたまれ、誹謗中傷が激しく、そのような世がいやになったもので」
「やっぱり、父上が殺害の罪状で訴えられたことが原因で」
「殺害容疑までっち上げ、父を蹴落とそうと思う輩がおり、父はそのことを歎いて病死してしまった。きっかけはそれが原因だが、前々から、いずれこのような結果になるのではと思っておった。それで、出家の準備はしておったのだ」
「空仁さままで、そのとばっちりを。空仁さまは従兄にあたる定長さまの養子に出られておったのに」と季政が言った。
「その通りなのだが、その義父の定長まで神事への奉仕を差し止められてしまったし、そ

の子のわしが黙って済ますわけにはいかない。それで、きっぱりと出家をしたまでよ」
「よく決心がおつきになられましたね」と義清が言った。
「わたしには和歌の道がある。実父の公長（きみなが）、義父の定長も勅撰歌人だし、さらにその先祖である頼基（よりもと）は自分で言うのもなんだが、かなり有名な歌人だった。仏の道を究め、歌を詠んで暮らせる。何と幸せなことか」
空仁はまた、まきをくべ、部屋をあたためた。
「二人して尋ねてきたのは、出家について尋ねたいことがあったからではないか」と空仁が言った。
「出家を思い立って、準備をするのにどれくらい時間がかかりましたか」義清が尋ねた。
「半年以上はかかるよ。貴族は天皇や上皇のお許しがいるし、弟子にしてもらえる僧もいるし、さらには、荘園をお持ちなら、領家の許しも、それに家族の許しもいるだろう。根回しはしっかりとしておかないといけない。特に天皇や上皇にはけっして今の状態が不満だから出家するとは思わせてはならない。あとあとのこともあるし、家族や一家のこともある」
「なかなかうるさい手続きが必要ですね」
義清は相当の覚悟とやる気が必要だと思った。だが、柿色の僧衣に身をくるみ、てきぱきとやっておられる空仁をみると、なんともうらやましかった。
「さあ、芋がゆができた。食べてくだされ」
炉の上にぶら下げられていた鍋から、芋がゆを椀に入れ、折敷の上に置かれた。椀のなかから湯気が立ちのぼっている。
「さてと、わたしは経を唱え、憶える時間なので、少しの時間をくだされ、今から経を憶えますゆえ。ごゆるりと召し上がれ」
そう言うと、奥にこもられ、そこから経を唱える美しい声が漏れてくる。なんとも言いがたい気持ちのよい気分だ。
芋がゆをいただき、しばらく休息した。空仁はまだお経を唱えている。
とんでもない大きなものに包まれている気分になる。今、自分は極楽にいるといった気分である。いつかこの世にも現世の極楽世界があると考えた。それがここかもしれない。
「それではそろそろおいとまするか」と季政が言った。
二人が空仁の庵を辞し、大堰川の舟の渡しのところに着た。すると後から空仁は追いかけてきた。
「もっとゆっくりされると思っていたのに」と残念そうな顔付きをされた。
すぐに渡しの筏がやってきた。
「はやく筏（いかだ）はここに来にけり」（空仁　残集・二二）と述べられた。
うす柿色の衣が陽にはえて天女の衣のように美しかった。
「大井川かみに井堰（いせき）やなかりつる」（西行　残集・二二）と義清が付けた。
このようにして筏が岸から離れていくと空仁は先程の経の読誦で声をからしてしまい、趣のあるかすれた声で「大智徳勇健、化度無量衆ー（法華経の一部）」と唱えた。たいへ

ん尊くおもむきある感じがして思わず次のような句を詠んだ。

大井川舟に乗りえて渡るかな（西行、残集・二三）

それに対して季政が「流れに棹をさす心地して」（西住、残集・二三）と付けた。

季政は心に何か思うことがあってこのように付けたのであろう。それは彼自身のことであろうか、それとも義清のことであろうか。

あまりになごりおしいので筏を返して松の下に着け、空仁に次のような歌で思いを述べた。

大井川君がなごりのしたはれて井堰（いせき）の波の袖にかゝれる（西行、残集・二四）

再び、いろんなことを話し合ったが、ついに意を決して別れることにした。最後に義清は空仁に尋ねた。

「いつまでこの庵におられるのですか」

「いや、わからない。他の寺へ参るかもしれない」

義清は、「一所不住」の思いを知って感動した。僧とはそうでなければならない。能因法師だって、あちこち旅をされ、勧進をされ、歌を詠まれた。大師さまだって、四国八十八箇所を歩かれた。だが、空仁さまがここを出られたら、再び逢うことができるであろうか。それがとても寂しい。

その思いを次のような歌で述べた。

いつか又めぐり逢うべき法（のり）の輪の嵐の山を君し出（い）でなば（西行、残集・二五）

筏は離れていき、井堰の瀬の急流にさしかかり、あっという間に空仁の姿は見えなくなった。

十二（同年、二十二歳）

保延五年三月（一一三九、三月）に北面の武士全員が詰め所前に集められた。みんな萎烏帽子に直垂姿である。義清は彼らの一番後ろに立った。詰め所を背に、前方には院別当（院庁長官・事務方トップ）がこちらを向いて立っている。立烏帽子を被り、直衣姿である。その横に、院掌（いんしょう）（院庁の庶務部長）らしき役人が付き添い、さらにその横に、立烏帽子、水干姿の平忠盛、その横には萎烏帽子、直垂姿の平清盛がまじめな顔をして立っている。

いったい何事かと武士たちはそれぞれ緊張した様子である。やおら院掌が口を開いた。

「この度、鳥羽上皇さまから、北面の武士に院宣が下された。それについて、別当さまからお話をいただくことにする」

院庁別当が威厳を正し、おもむろに口を開いた。

「すでに知ってのとおり、南都の僧衆（僧兵のこと）が、別当隆覚（りゅうかく）の坊を焼き、隆覚を罷免せよという要求を持って入京を企てようとしている。すでに彼らが平等院までやってきている。ここ一両日中に春日大社の神木を担いで宇治を出発するだろう。鳥羽上皇さま

は北面の長であらせられる平忠盛に僧衆の輩（やから）の入京を阻止するようにご命令になった。北面の武士は忠盛どのに全面的に協力して、それを遂行するようにお願いする。白河法皇が北面の武士を作ったのは、このような寺社の僧衆の横暴を阻止するためである。いわば、これは、北面の武士の本務中の本務である。その点を十分わきまえて、日頃の稽古の成果を見せてもらいたい」

集まった武士たちはようやくなぜ集められたのかがわかった。すこし、周りがざわついたが、忠盛がひと言喋り出すと、前以上にしんとなった。忠盛の眼光が鋭さを増した。

「今回、わたしが総指揮をとることになった。闘う相手は僧衆であるが、あれは僧ではない。れっきとした武士である。それを決して忘れるな。仏とはなんの関係もない。だから、怖れることはなにもない。大きな寺が抱えている土地や権益を守るための兵士だから、兵士と兵士がぶつかり合い、命がけの闘乱（けんか）をする。ただし、白河上皇のお達しがある、神木や僧衆、大衆を殺めてははならないという掟である。これを守らねばならない。それがやっかいである。それには、相手をひるませ、奈良へ逃げ帰らせることである。なお、北面の武士の指揮は清盛にさせる。彼はすでに海賊退治の経験もあり、どのようにすれば彼らがひるむか知っている。彼にしたがって欲しい」

そこで咳を二、三度して、忠盛の言葉が終わった。今度は若い清盛が言葉を出した。何だか、ひとまわりも大きく、しかも立派になったような気がする。指導者としての風格が現れている。

「父忠盛は、私兵とともに、密かに宇治へ入り、僧衆が平等院を出たら、すぐさま平等院の門をすべて閉めさせ、門前に兵を立たせ、けっして平等院内へは入らせないようにする。そうして、逃げてきた彼らを奈良へと追い払う。

我々北面の武士の役目は、平等院を出て、京に上る奴らを待ち伏せしていて、一歩も前へ進ませないようにすることである。さらには、彼らをひるませ逃げ帰らせるようにすることである。わかり申したか」

「おおお」と全員がときの声を上げた。

北面の武士たちは馬組と徒歩（かち）組に別れ、馬組は、弓矢に特にすぐれている者が乗っていくことになった。義清は当然、馬組になった。鳥羽離宮の厩舎から馬をひきだすと肩に弓矢を背負いそれに乗った。平清盛も同じく馬に乗った。一列になって歩く。先頭は清盛、そのすぐ後に義清がつづいた。

「これは遊びではないからな。命に気をつけろ、少しでも気を抜いたらたいへんなことになる。さて、義清は弓の名手だから、僧衆の頭（かしら）だけをひるませてくれ、頭（かしら）がひるむと、僧衆側は混乱する。頭はどこにいるかまず見つけよ。それから、僧衆側だって弓を引いてくる輩がいるから気をつけろよ」

「わかった」

義清は最初からこの闘いに出ることに意欲が湧かなかった。しかし、自分の役目だから、しかたがない。清盛にはそれがわかっている。そのような場合が一番命が危ない。気乗りがせず、ぼんやりとしているのが一番危険だ。だが、どう考えてこの闘いに参加すればいいのかよくわからない。いくら忠盛が、彼らは僧ではないと言っても、やはり興福寺とい

う寺の住人には違いない。やはり仏に近い。それが、徒党を組んで強訴するのには、彼らなりの言い分がある。しかし、薙刀を持ち、太刀を持つのはどうも解せない。それに、自分は仏を信じ、それを学ぼうとしている。仏は生きているものすべてに慈悲をかけ、むやみに殺してはならないと言われている。況んや人どうしが殺し合うのは絶対避けねばならない。その教えを学ぼうとしている自分が兵として殺し殺される場面に立つとはどう考えても矛盾している。仏教を棄て、武者として生きるか、武者を棄て、仏の道を歩むか。それならわかる。しかし、武者でありながら仏教を学ぶ。仏の道を求めながら戦いに参加する。はたしてそれは理にかなっていることなのだろうか。人を殺めても、その後で、仏を拝めば、役目だから仕方がないと許されるのだろうか。

そのようなことを考えながら、鳥羽院庁から伏見を通り、桃山を通り、六地蔵、木幡、黄檗を通って、宇治の三室戸の少し手前で、先頭が馬を止め、馬を休ませた。

清盛は、「よし、ここで、後続らを待つ。しっかり、馬を休ませ、武具を点検しておけ」と命じた。かなり時間が経つと、徒歩組が到着した。少し疲れ気味である。これでは僧衆にやられる可能性だってある。そうならないためには弓矢組が活躍しなければならない。

張り切って闘うために、この闘いの意義を考えた。どう考えてこの闘いに臨めばいいのか。

一つだけいい考えが浮かんだ。「そうか、そういうことにしよう」と思った。

自分のすぐ前にいる、いつも懇意にしてもらい、いろいろ助けてもらっている同僚が僧衆によって傷つけられたり、殺されたりしないために弓を引くのだと。

ようやく、闘いに臨む根拠を見つけたような気がした。

「もうすぐ、僧衆たちがやってきます、ご準備を」と言って、偵察の男が報告に来た。

一人の僧が先頭になって歩き、榊に神鏡を下げたものを掲げていた。白い袈裟を頭や顔や首に巻き、白い下着の上に下腹巻きをし、その上に黒い裳付衣を羽織っている。さらには、やや黄ばんだ括袴をはき、石帯（あて帯）や脛巾（すねあて）を着け、典型的な僧衆姿である。ただ、下駄は履かずに、草鞋を履いていた。下駄では長い道は歩けないからであろう。

まだ、こちらの存在には気づいていないようだ。ただ、行列は整然としていた。榊の枝に新鏡が吊されたものを幾つか掲げていた。濃い藍色の葉っぱの中から、光を反射して、銀色の鏡の煌めきが眼を射った。それは我々に畏怖を与えた。身が縮まる思いがする。まだ、誰も矢を放つものはいない。

「神に矢を向けることはできないな」誰かがかなり大声で言った。それを聞きつけた清盛は「あんなのはただの木の枝に鏡を結びつけてあるだけだ」と叫んでいた。

清盛は馬に乗って義清の横にやってきた。義清の馬に彼の馬を添わせながら言った。

「なあ、そうだろう。義清」

清盛はやや緊張したらしく頬を少し紅色にしている。

「はい、そうです」とは誠実には答えられなかった。

「義清は信じているのか」

「はあ」とだけ答えた。

「いくじなしめ」と清盛は口を微笑ませながら小声で言った。
「しかし、頭(かしら)がわかればしっかりと討てよ」
「それはもうしっかりと討ちます」
「頼んだぞ」
清盛は去って行った。指導者として堂々としていた。いつもの清盛ではなかった。彼には何の迷いもなさそうだった。
背負っている矢袋から矢を一本引き抜き、弓につがえた。
一頭の馬が前に走り出し、それにつられて数頭が土埃をたて、一団に近づいた。ようやく彼らが気づいたらしく、集団は、一瞬にして、ばらばらになり、立木の後ろや、小屋の後ろに身を潜めた。矢が放たれたが、彼らは薙刀を振り回し、矢がことごとく打ち落とされた。幾人かは、すでに我々からかなり離れたところを通り、後ろへ回ろうとした。確かに武術の訓練を受けた集団だった。
彼らを後ろに行かしてはいけない。やや後ろに下がり、前方から彼らの頭上はるか上を狙って矢を放った。しかし、薙刀が高く差し上げられてそれらは打ち落とされた。
義清は、木立の後ろにしゃがんでいる敵僧をじっと見つめつづけた。彼は薙刀を杖がわりにして、さらに、道路から田畑の方に離れ、もと来た宇治川の方へと歩み始めた。そうだ、そうしてくれ、と念じた。
彼の姿を見たためか、後二人の僧は、やはり我らから離れた。彼らを狙えば、射貫くことなど訳がなかったが、そうはできない。僧衆を殺めてはならぬという白河法皇の掟がある。僧衆は木立に隠れながら、宇治川の方へと逃げ始めた。
義清はとって返し、馬組の先頭に立った。と、そこへ小石が耳横を唸りを上げて通過した。危なかった。確かにちょっと油断していた。
石つぶてがたくさん飛んできた。それを避ける準備をしてこなかったので、手を焼いた。よく見て、身を避けるより他、手立てはなかった。幾人かは頬に当てたり、胸に当てたりして、馬から下りて手当をしなければならなかった。
何分、相手の人数は我々よりも何倍もいた。うかうかしていると突破される怖れさえ出てきた。彼らの戦意を一気にそがなければならない。それには、首領やそれにつづく者を倒さなければならない。
「首領は誰、首領はどこ」と義清は僧衆の一団を見回しつづけた。かなり後ろにいる身体の小さな、少年と見間違うほどの老人が首領のようだった。
彼の周りには、大きな僧が取り巻いている。彼はさかんにあちこち動き回り、ある集団に声を掛けているような仕草をすると、その集団がどこかへ移動していく。
首領はやつに違いない。だが、彼の周囲には二つも榊の神木が立てられている。それをおおがらな男が守っている。さてどうするか。
老首領は何か大声を上げると、彼らの集団は前へと歩き出す。どんどん、我々の方へ近づいてくる。
義清は弓を引き絞り狙いを定めようとするが、何を狙って矢を放てばいいのか、わからない。
またも石つぶてが耳元をかすめる。今度は後ろからだ。多くの弓組の背をめがけて石つぶてが投げられてくる。

後ろを振り返ろうと思ったが、そうしている余裕がない。何とかしなければ、我々の遮ぎりが突破されてしまう。すでに、石つぶてを怖れ、みんなは後ずさりし始めた。その瞬間、烏の大群が頭上はるか上を飛ぶのが見えた。義清はそれをめがけて矢を放った。それにつられたのか、弓を持っている者達も烏めがけて、矢を放った。それらはことごとく烏を射ぬき、烏がばたばたと落ちた。とその瞬間、今度は、彼らの頭上のすぐ上めがけて義清は矢を放った。と多くの矢がいっせいに彼らの頭上のすぐ上を飛んだ。彼らは動揺していることがわかった。神木が大きく揺れ、後ろに下がった。特に老首領が慌ててていることがわかった。今度は自分たちを狙って矢が飛んでくると思ったようだ。

その動揺を見抜いたように、徒組(かちぐみ)が長い鉄棒を前に突出すようにして、大声を上げ、彼らに向かって突進した。彼らは前方にいる僧衆たちの薙刀を手元で打ち落とした。また徒組の後方部隊が、堅い木の棒で作った「ヤスマタ」で僧衆の腹部や胸を押しつけ、彼らを後ずさりさせた。

義清は彼らの頭上ぎりぎりを狙って矢を放った。矢は頭上を越え、後ろの木に当たって落ちた。それに習うように、多くの矢が彼らの頭上を掠めながら後ろの木々に当たった。

「僧衆に次ぐ、退散せよ。今度の矢はお前達の脳天めがけて放たれる。それを避けよ」

清盛の、力強い、よく通る声が馬上から放たれた。つづけて再び清盛の声。

「上皇から、今回は僧衆を殺めてもかまわぬというお許しを得ている。新上皇は、白河上皇とは違うぞ。よく心得ろ」

義清は意を決め、老首領の耳と一寸違いの所を狙って矢を放った。矢は狙い通り首領の耳のすれすれを通り、僧衆の肩と肩の間を縫って後ろの立木に刺さった。

老僧は驚き、悲鳴を上げる。それから、大声で辺りに何かをわめいている。

と、神木が、突然その場に投げ出され、みんながいっせいに宇治川目指して逃げ始めた。

馬組も徒組(かちぐみ)も勝利の声を上げた。

清盛が馬で、義清(のりきよ)の馬に近づいてきた。

「よくやったぞ。義清」

馬上で握り拳を作りながら片手を挙げた。

義清は黙っていた。

「どうだ、馬上で一首詠まないか」

詠めるような心境ではないと思いながらも次のような歌が思い浮かんだ。

悪(あ)し善(よ)しを思ひ分くこそ苦しけれ ただあらるればあられける身を(ただむかんしんでおればおれるものを)（一四二一）

しかし、義清は清盛には詠んでは聞かせなかった。

「こらえてくれ、こんなとき、歌など出てこない」と義清は言った。

凱旋して鳥羽殿に帰り、祝杯を挙げたが、やはりみんな疲れていて、早々に家に引き揚げ、義清も家に帰るとすぐに寝屋に入ったが、興奮していたためか、なかなか眠れなかった。

しかも時々、悩ましい夢が現れた。

「今日はご苦労だったな」

突然、老僧が現れて、吾に、皺だらけだが柔和な顔付を向けた。
「いい経験をしただろう。だが、今日のは戦いと言うより、ただの遊びのようなものだ。本当の戦いなら、お互い弓をひきあい、刀で斬り合う。血がほとばしり、多くの死人がでる」
その通りだと思った。武士とはそれをするのが役目だ。
「もうそろそろ『自分の……』の……部分がわかってもいいのではないか」と老僧が言った。

最初、何を言っているのかよくわからなかったが、以前、陰陽師(おんみようじ)が言った「吉と出るか凶とでるかは吾の行いによって決まるはずだ」を指しているのだ。それに、その翁はいったい何者なのか。先日、地獄の様子を示しに現れた夢の中の僧に似ている。
「いかにも、そのとおり。ところで貴殿はどなたかな」と義清は尋ねた。
「すでに彼岸にすんでいるものじゃ。だから貴殿のことは何でもわかっている。以前の隠陽師の占いも。彼の最後の言葉『吉の方へ行くには、自分の……』の後の言葉。貴殿は『自分の義務を忠実に行うこと』ととらえたようだが、それは違うぞ」
「だったら、どういうこと？」
「それは言えぬ。自分で考えろ」
「自分の行く道は自分で考えろ、ということか」
「それはそうだが、それでは漠然としすぎて行く方向を示してはおらぬ」
「だったら、どういうこと」
「それは自分で考えろ、すでに わかっているではないか」
「わかっている？」
そこで、老僧は消えた。

あまり眠れぬまま、一夜が過ぎた。昨日の戦いに参加した者はすべて今日は非番だった。だが、近ごろは非番の日が苦しい。物思いが起こってくる。例の塊が意識の底に現れる。
やらねばならないことのある日はそれに意識が奪われ、いろんなことを考える暇がなくなり、一日が過ぎる。しかし、今日のような日は、そうはいかない。じっくりと考え込んでしまう。それに、昨夜もう一つ夢を見た。
夢では、眼前に例の塊が現れ、無気味な光を出した。すると今まで明るかった周囲が急にくらくなり、竹取物語のように、白い塊がぽっくりと割れ、中から紫色の直衣と指貫を付けた平清盛が眉をひそめて現れた。
「昨日のそなたの振る舞いにはいささか咎(とが)があった」と清盛は鋭い声で言った。
「咎が？　そなたからお褒めいただいたではないか」
「それは結果がよかったからだ。しかし、あれはそなたが狙ったところではなかったはず」
「……」
確かに清盛の言う通りだ。あれは老僧が身体を出したところの腕を狙ったのだ。鏡を狙ったわけではない。失敗の弓であった。
「そなたのような名人が失敗するというのは心に迷いがあったからだ。咎はそれだけではない。矢を放った途端、馬をすぐさま動かし、後ろを振り向くべきであった。石つぶてが

そなたに当たったであろう。もしあれが矢であったなら、そなたはあそこで息絶えていたはず。今回の闘いに、そなたは何の迷いもなく、喜び勇んで参加したか？　そうではなかろう。何だか役目だから仕方がないといった気持ちがなかったとは言わせない。それが一番危ない。そういう気持ちがいささかでもあれば命を落とす危険がある。もっと武士に徹せよ。中途半端な気持ちなら、それをはやく吹っ切って武士になれ。そなたはまだ武士ではない」

清盛はかなり怒っているようだった。

確かに武士が仕事をするところは常に命の危険のともなう所である。中途半端な気持ちで行えるようなところではない。それに一途にならなければならない。清盛の言う通りである。

「武」に一途になれるのか。自分は武者になりたいのか。否である。吾は武者には適さない。いや、なりたくはない。だが、……。もし、……、自分が武者を放棄したら。

そこまで、考えたとき、一気に場面が変わった。

妻が泣いている。子どもが泣いている。京には居づらくなって田仲荘に帰ってきたのだが、そこでも村の子どもたちに囃し立てられたんだと言う。

「居候のこども、居候のこども」

「弱虫の親の子、弱虫の親の子」

北面の武士を辞めることは田仲荘の預所も辞めることだ。田仲荘は荒川荘や鞆淵荘とは違う。荒川荘は鳥羽院が文字通りの領家であり、荒川荘を守るのは院の責任である。鞆淵荘はこれも石清水八幡宮が領家で、八幡宮の兵が鞆淵荘を守る。しかし田仲荘はそれらとは違う。開発領主であり、検田権、勧農権だけではない。検断権（警察権、裁判権）までも許されている。田仲荘内においては当主は追捕使であり、検非違使でもある。つまり、自分の土地は自ら守らなければならない。それは、当主は武士でなければならないということだ。また、荘において武士を養成しなければならないということでもある。

ありたくなくてありつづけることは命を落とすことになり、ありたくなくて武士を降りれば、すべてを失い、弱虫というそしりを受ける。それは、仲清の居候になり、佐藤家の厄介者になるということでもある。ではいったいどうすればいいのか。そのようなことを考えていると、夢の中でも一首浮かんできた。

良し悪しの人のことをば言いながらわが上知らぬ世にはありけり（二三七）

悪い目覚めだった。どうすればいいのかという夢の中の思いがそのまま目覚めてもつづいている。どこかへ走り出したくなる。じっとしていられないような焦燥感に駆られる。「ええい、どこでもいい、どこかへ行こう」と思って、家を出てきたが、自ずから京の街の方へと足が向かう。先日作った歌が甦る。

されば（ほらねと）よと見るみる人の落ちぞ入る多くの穴の世にはありけり（二三八）

先日、親友・季政が、「この頃、義清が月次歌会にも出席していないので心配した」と言って家にやってきて、「月次例会にも出席できないのなら、北面の武士など辞めてしまえ」と何度も言った。季政も北面の武士だったのだが、数年前に辞めている。「あんなものにしがみついていても仕方がない。心あるものはみんな辞めているぞ」とさかんに言った。

北面の武士を辞めよと言うが、そう簡単に辞められない。

「ううん」と義清は呻った。
「そうか。まあ、簡単ではなさそうだが、考えてみることだな」と言った。さらにつづけて次のようなことを述べた。
「そこでだ、そなた、聞いたことがあるか。三条大橋の近くに膽西聖人が立っておられるというのを」
「勧進（みんなから寄付を募ること）で雲居寺の大仏をお作りになった、あの膽西聖人さまか。あの方ならもう数年前にお亡くなりになったのだろう」
「世の中ではそうなっているが、実はまだ生きておられるとのことだ。何もかも棄て、ただ、阿弥陀仏の考えを広めたいと、死んだことにしているというのだ。三条に立っている聖が膽西聖人に違いないとみんなが言っている。ほんとうかどうかわからないが、どうだ、行く気はないか」
「そんな馬鹿な。葬儀もしたというのに」
「そなた、一度ぜひ会いたかった、もう少し生きておられたらぜひお会いしたのに、と言っていたではないか」
「そう。あの人は仏への修行もすごかったそうだが、歌もお好きで、歌会もなされていた。一度、歌と仏との繋がりを聞いてみたかった」
「だったら、だまされたと思って、今、行ってみろよ。偽の膽西に会うのも一興ではないか」
親友の季政がそう言っていたのを思い出した。すると、ぜひ行ってみたくなった。それに、それが膽西聖人に違いないという気も起こってきたのだ。相当の老人だということだ。今日を逃したらもう会えないかもしれない。そう思うと、一刻も早く会いたくなった。三条まではかなりある。しかし、早足で行けば昼過ぎには着く。十分に会えるはずだ。

すでに春も終わりに近づき、のどかな風景が辺りを覆っているが、それらにはまったく心を止めずに、三条を目指して、鳥羽の作道を早足に歩いた。
ようやく三条近くまで来た。確かに橋のたもとにひとりの老僧が佇んでいる。網代笠を付け、その下の顎から白い髭が垂れている。白い下着に、襴のついた黒い裳付衣を着、袈裟をかけ、足は白い脛巾を着けて、草鞋を履いている。通る人の何人かは前に置かれたお椀の中に沙金を入れている。
義清は近づいた。老僧に向かって深々と頭を下げ合掌した。老僧の顔は網代笠によってほとんど見えない。老僧の方からは義清の顔がよく見えているのだろう。
「膽西聖人でいらっしゃいますか」と義清が尋ねた。
「故あって名乗らぬことにしている」
「みなは膽西さまだと言っていますが」

「いや、膽西は亡くなった。だが、膽西のことはよく知っておるぞ」
その声は澄んでいた。いい声だ。もし、仏がこの世で言葉を発したとしたらこのような声ではなかろうか。膽西の法話を聞いたものはまずその声に聞き惚れたと言う。この人は膽西に違いない、と義清は確信した。
「大仏を作るのはたいへんだったでしょう」と尋ねた。
「そりゃもう。東大寺さんの大仏よりははるかに小さいが、東大寺さんの大仏はお国がお金を出して作った。こちらはすべて勧進で作った。こちらの大仏の方はみんなの心が込もっておる。それだけいっそうありがたい仏さまだ」
老僧の声はいっそう迫力がまし、小鳥の声以上に澄んでいた。
「膽西さまは大仏を作るだけでなく、橋も池もお作りになった。それに、身寄りのない子どもや年老いた人たちに毎日お粥を振る舞っておられたとか」
「それは今でもつづいておるぞ。何しろ雲居寺付近は困った人たちの集まる場所なんだから」
「考えられないほどの善行をおさめておられます」
「それをするのが僧の役目じゃ。僧はお経ばかりを読んでいるだけが能ではない」
「それはそうと、膽西さまは歌がお好きで、歌会などもさかんにやっておられた。歌と仏の道とはどう繋がっているのか、ぜひお聞かせください」
「確かに膽西はよく歌会をやっておった。沢山の有名な歌人が集まっておったわ。歌を作るのは修行の一つだと思っておった。歌はこの世を深く見つめ、他者の気づかぬことを気づいて詠まねばならない。悟りもこの世をしっかり見つめ、人の気づかぬところを気づき、真実を見つけ、悟りに達しなくてはならない。歌を作るとき、花や小鳥や人々の真の心を見つけてこそいい作品ができる。歌の言葉はすべて真言（しんごん）だよ。だからそれは仏の修行に通ずる。何ら矛盾しない。身を捨ててこそ新しいものが見える。僧になることによって優れた歌を作り得た者は数知れず、能因しかり、行尊しかり」
歌を作るのと仏に近づこうとするのとは矛盾しない、その言葉が無性にうれしかった。自分の思いといっしょだと思った。そうなのだ。歌の道に一途になることと仏の道に一途になることとはいっしょなのだ。それを聞いて、心が晴々とした。だが、自分は歌の道にも仏の道にも、まだ一途にはなっていない。一途からは程遠い。自分はどうすればいいのか。
「それはそうと、御身は何か深い悩みに陥っているようじゃ。何に迷っておられるのか。迷うときはしたい方をすること。したくないことを棄てることじゃ。したくないことにいつまでも執着していてはならない」
「したいことをすれば人に迷惑をかけまする」
「したくないことにしがみつき、悶々としているほうがよほど人の迷惑じゃ。自分を生かせ。自分を生かすことが人のためにもなる。仏のみちでもある。このようなお経を知っておるか」

妻子珍宝及王位（きふ）（妻子も宝物もましてや王位も）
臨命終時不随者（人の死に際して持って行けない）

唯戒及施不放逸（ただ戒律を守り布施を心がけ、気ままなことをしない）
今世後世為伴侶（これだけが現世来世を通じて友となりうるもの）
（大集教巻十六より）

この膽西とおぼしき人の言葉や経は心の芯に入ってくる。自分のしたいこと、自分を生かす道、それは歌を詠むこと、仏の道を学ぶこと。やりたくないことは、他者と争うこと、人を傷つけること、殺めること。

ふと、他人がよこしてきた次の一首が思い浮かんだ。

惜しからぬ身を捨てやらで経る程に長き闇にや又迷ひなん（七三八）

自分はどうか。自分もこの男と同じような気がした。それで次のように返した。

世を捨てぬ心の内に闇こめて迷はんことは君ひとりかは（七三九）

十三（一一四〇・保延六年、二十三歳）

義清は何となく四天王寺へお参りしたくなった。かなり長い間、四天王寺へは行っていない。空仁さまや膽西さまの元を尋ねてから、仏様が何だか近くになったような気がしてならない。八方ふさがりのような自分の前途に出家という行為が残されていたことにはっきりと気づいた。そのためだろうか。別に四天王寺と出家とはそれほど繋がっているとは思えないのだが、あの西門から夕陽丘に落ちる夕陽を見たいと思い出すと、落ちついてはいられなくなった。季政に言うと、ぜひ行こうと言うことになった。なにわまでは舟を使うとかなり速くいけるのだが、季政は往復、徒歩で行こうという。それが修行の一つだと言うのである。義清は、院庁に申し出て休暇をとり、二人して旅に出ることにした。

道々、いろんなことを話しながら歩いた。

以前に訪れた空仁の話は何度も出た。すでに法輪寺を出たという噂も聞いた。空仁の生き方はすごいというのが二人の共通した考えだった。

「それはそうと、北面の武士で貴殿の従兄の佐藤憲康が亡くなったっていうのは本当か」と季政が突然尋ねた。

「ああ急に。前の日、明日、また逢おうと元気に別れたのに」と言った。

「彼の死をいつ知った？」

「別れた日の翌朝、彼といっしょに鳥羽殿に行こうと思って、彼の家を訪れると門のところが騒がしく、泣き声が外まで漏れ出ていて、どうしたのかと思い、慌てて近づき、家人に尋ねると『殿が夜半になくなられた』と告げた。驚いて目がくらむほどだった。彼の家に入ると若妻と老母が激しく泣いている。声をかけようにもかけられなかった。『どうして、どうして』とうろたえながら周りに叫んでいると、女の家人が『何でも急に苦しい苦

しいと訴えられて、すぐに亡くなられました』と伝えた。あんなに元気いっぱいで、したいことをいっぱい言っていた従兄の憲康がもう亡き人になるなんてと信じられなかった。本当に驚いた」
「それで死顔を見たのか」
「ああ、頬がまだほんのりとしていたよ。おい、と声をかけると起き上がってきそうだった。涙が止まらず、着せられている白い装束の上にぼろぼろと落ちた」
「それは驚いただろう。だが、我々の生き死にとはそのようなものだ。それで、その心境を歌に詠んだのか」
泣きながら詠んだ。次のようなものだ。
年月をいかでわが身に送りけん昨日の人も今日はなき世に（七六八）
越えぬればまたもこの世に帰り来ぬ死出の山こそかなしかりけれ（七六三）
「うん、心境がよく出ている。我々もいつ死ぬかわからん。やりたいことはさっさとやらねば」
「うん。吾もそう思った。いつ何時、どういう理由で死を迎えるかわからないと。彼は急な心の臓の病で亡くなったと思っていたのだが、清盛からいやなことを聴いた。そのような死ではない。もっと怖ろしい死だと」
「と言うと」
「清盛の言うには、きっと毒を盛られたのだ。殺されたのだと。何か、心当たりはないのか、と尋ねてきた」
「それで？」
「そう言われれば、憲康が吾に告げたことがある。藤原一族も武士団を作ろうと。平氏も源氏も武士団を作り、その棟梁まで決めている。我々も武士団を作るべきだ。我々は作ろうと思えばいつでも作れる。秀郷流の武者を結集すればいい。そう憲康は盛んに言っていた。奥州の藤原、関東の小山、足利、紀伊の佐藤、それだけ結集しただけで、秀郷流がさらに必ず集まってくる。そのときは義清にもひと肌脱いでもらうよと。彼は近々この思いを持って、関東から陸奥まで説得しに行くと言っていた。吾はいい返事をしなかったが」
「きっとそれだよ。それをおもしろくないやつはごまんといる。例えば藤原氏の中にもいる」と季政が言った。
「ええっ？」
吾はそんなことは思いもよらなかった。
「義清は疎いなあ。例えば、摂関家は文官貴族だろう、同じ藤原でも武官の台頭を好ましいとは思わないやつがいる。例えば藤原忠実」と季政は名前まで挙げた。
「ううん。ああ、嫌だ。兄弟で対立する、同族で対立する。文官と武官が対立する」
「憲康のことを清盛に言ったのか」
「いや、それは言わなかった。」
「それはよかった。清盛だってそれはおもしろくないと思うよ。源氏だけではなく、藤原とも闘わねばならなくなるのだから」
「それは言わなかったが、清盛は、憲康の家に何か変化がなかったとさらに聞いてきた。それで、そういえば、憲康の食事を用意をする女がいなくなったと言ってやった。すると、きっとそいつが誰かにそそのかされて、毒を入れたのに違いない。そして逃げたのだ、と。それに、口封じに、彼女もすでに殺されているだろう、とも言った。お前も気をつけろ、

いつ狙われるかわからないと」
「それは的を得ている。嫌な世の中になったものだ。殺し殺される。まったく末法の世界だ。もし、俗世にいたら、きっとお前も誰かに狙われるぞ。自分は武官だと言うことを忘れるな。武官が文官に勝ったとしても、今度は、武官同士の戦いが必ず起こる。その前に、そのような俗世とさっぱりとおさらばしようではないか。でないと、貴殿もきっとその中に巻き込まれる。武士とはそのようなものだ」
「吾もその通りだと思う。だが、あと一押しが足らない。何かが足らないのだ」
「難しいとは思うが、きっぱりと決意しろ。さてと、今までそなたに言おうと思って、言いそびれていたことがあるのだが」と季政が言った。
「なんだね？　改まって」と言って義清は立ち止まった。
「もし、自分が出家したら、自分の名前を西住（さいじゅう）と決めた。西、つまり浄土に住むという意味だ」
「ほほう、西住か」
一応感心して見せた。先を越されたという思いがし、衝撃を受けた。彼はすでに決心を固めているようだ。自分もうかうかしてはいられない。それにしても、よく似たことを考えるものだ。自分も、もし出家したら名前をどうしようかなどと先走って考えたことがある。西行という名を思いつき、非常にいい名だと思った。
「吾も考えていたよ。西行だ。悔しいから言うのではないが、これはそなたの名を聞いて付けたのではないぞ。先から決めていたのだ」
「わかっている。そなたは他人（ひと）の名を聞いて付けるような人ではない。吾とそなたは親友だから同じようなことを考えて当然。西行か。いい名だ。負けたよ。だってそなたの名は動的だ。君らしい。君は一所不住を理想としているのだろう。それがよく現れている。ところで、京でもうひとり、西の付く出家者がいる。西念（さいねん）という出家者だが、なにしろ極楽浄土を願う気持ちは並外れていて、何十回と全品（ぜんほん）法華経を写経したとか。多くの寺へ供養したらしい。それに、数知れぬ極楽願往生歌を読んだとか、熱狂的な浄土願生者ということだ。すごいやつらしい」
「ああ、名前は聞いたことがある」
「西行、西住、西念、みんないい名前じゃないか」
そのようなことを話しながら、枚方を通り、八軒家を通り、熊野街道を四天王寺へと歩いた。南の正門近くにくるとなにやら騒がしい。多くの人が西の門に向かって走っていく。
「何事が起こったのか？」と一人の男を捕まえて尋ねてみた。
「西念というお人が補陀落渡海（ふだらくとかい）をするらしい。先程、西の門から、舟といっしょになにわの渡辺津（旧淀川河口の港）へ向かって担がれていった」
「何、西念、補陀落渡海？」西行（義清）が叫んだ。
「あいつならやりかねない」西住（季政）も叫んだ。
「補陀洛渡海とは捨て身の行ではないか。今までに数人しかやったことがないという。な

んと思い切ったことを」西行が言う。
「舟の中で餓死して死ぬまで念仏を唱えつづけるというのだから、きっと補陀洛浄土へ行けるに決まっているよ」
「このような偶然はないな。見に行こうではないか。仏のお導きかもしれない」義清が言うと季政も同意した。
みんなの後を、二人は小走りしながら渡辺津に向かった。
港に着いたとき、陽は西にかなり傾き、陽の周りにある雲の端々は黄金色に輝いていた。すでに舟は海に浮かんでいる。補陀落渡海の舟は、長さ数メートルほどの小さなものであったが舟の真中には入母屋造りの箱が置かれ、それがしっかりと舟に固定されていた。その中に西念が入っているのだろう。出口はどこにもない。その箱の四方を小さな朱色の鳥居がかこんでいる。
舟を前にして、多くの人々が念仏を唱えている。南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏、……それが途絶えることがない。
何か大きなかけ声が聞こえると、舟が沖に向かって動き出した。念仏の声が異様に大きくなった。引き舟の櫓がさかんに漕がれ、舟がゆっくりと沖に向かって動き出した。
どんどん舟が沖に向かっていく。それにともなって、なにわの空が夕陽に照らされ、黄色から柿色へさらに赤へと移っていく。さらにその上には、透明な青緑の空がますます深みを増していく。四天王寺の西門は極楽浄土の東門に通じると言われているが、そこに浄土があると思えてくる。無事に西念が浄土に着くように、と義清も季政も合掌しながら念仏を唱えた。
西念の浄土への一途な思い、それが、義清の心にずんずんと入り込んでくる。一途こそ重要。何事も成就するには一途でなければならない。
沖へ行くほど舟の速さが速くなる。すでに点のようにしか見えない。だが、念仏の声は止まらない。南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏……。
西念は命を投げ出して仏に近づこうとしている。その行為を震える心で見つめる。
出家への思いがふつふつと湧き上がってくる。

わが宿は山のあなたにある物を　何に（なにゆえに）憂き世を知らぬ心ぞ（七一六）

世の中をそむきはてぬといひおかん思ひ知るべき人はなくとも（七二六）

また、以前詠んだ次の歌をも思い出した。

厭（いと）へ　厭（いと）へ　ただ露のことをも思ひ置かで草の　庵（いおり）　のかりそめの世ぞ
←　←
（厭（いと）へ　厭離（おんり）せよ　汚れたこの世を離れよ）　（西行・聞書集・一一四）

保延六年（一一四〇）秋、出家の決意は、まず、徳大寺実能（さねよし）どのに話し、自分が出家した後は仲清に自分と同じく預所としてくれるようにと頼み、こころよく承知してもらった。次に仲清に話し、家督を譲り、田仲荘を任すが、どうか子どもと妻の経済的援助はしてくれるようにと頼んだ。これもこころよく引く受けてくれた。自分への出家後の経済的

援助も約束してくれた。次に、鳥羽上皇には頭弁（上皇の秘書的役目と各役所との連絡、調整を行う人）を通して、次の歌とともに出家したい旨、いとまを請うた。

惜しむとて惜しまれぬべきこの世かは身を捨ててこそ身をも助けめ（選集・一八）

上皇からはなかなか承知した旨の返事がこなかった。返事を受け取るやいなや出家しようと決意していた。知り合いの僧に、出家した後の面倒をお願いし、それもこころよく承知してもらった。

ただ、出家を決意してから、心に住み着いた白い塊がさらに大きくなり、しかも意識の上に来っぱなしで、心を乱しつづけた。むしろ萎んでくれるのかと思っていたのだが、思ってもいない誤算だった。どうなるのか塊が破裂しそうな感じさえする。それが破裂すると自分まで木っ端微塵になり、どこかへ飛んでしまいそうである。ただ、それにともなった陰鬱な気分は生じなかった。落ち着かない、常に走り回っていたいような気分である。

今日の午、鳥羽さまからお許しの書状が届いた。もう妻に黙っているわけにはいかない。子どもが寝静まってから、妻を居間へ呼んだ。塊をじっと押さえながら妻を真正面にして座った。

「重大な話がある」と切り出した。妻は義清を睨みつづけていた。すでに目に涙が一杯である。それが紙燭の光にかぼそく光る。

「出家のお話ですか」

妻から切り出された。

「わかっていたのか」

「そりゃ、わかります。ずっと前から、いつ切り出されるか、いつ切り出されるか、と思っていました」

「すまない。一番切り出しにくい人だった。許してくれ、とは言わない。そなたは吾を許す必要がない、恨め、怒れ、罵れ」

「ええ、そうします。でも、なぜ、今なのですか。まだ二十三歳だというのに」

「今でないといけないのだ。今を逃すと、もうずっとそうはできない。もし、そうできなかった吾といっしょに暮らしていても、そなたには少しもいいことはない。萎れ腐った大根といっしょにいるようなものだ。いつもいじいじとしてふさぎ込んでいる男といっしょにいても何のおもしろみがあろうか。

法華経の中につぎのような文がある。子どもが母親に出家を願い出るところだ。少し読んでみる」

義清はわかりやすい言葉に直して読んだ。

母上、お願いですから、われわれが出家して僧になることをお許しください。

如来にお会いすることは、とても難しいのです。われわれは如来にしたがって学びたいのです。

三千年に一度という優曇華の花のように、この世に出現した如来にお会いすることはとても難しいのです。

さまざまな難を逃れることもまた難しいものです。お願いですから、われわれの出家をお許しください。（立松和平訳『妙荘厳王本事品第二十七』）

「わたしは、この子のように、身を捨てて仏のもとへ行きたいのだ」と泣き叫ぶように言

った。この辺りからろれつが回りにくくなった。どうも自分の声でないような気がした。
白い塊が身体の中を走り回っている。大実教巻き十六の「妻子珍宝及王位　臨命終時不随者」と何度も心の中で復唱する。なんと仏の道に進むことは苦しいことか。
「あなたは子どもではありません。大人です。子どもを捨ててもですか」と妻が怒りの籠もった声で言った。
「それはいたしかたのないことなのだ。子どものことを捨てるわけではない。いつも子どものことを気遣って子どもの幸せを念じてお祈りをする。仏はきっと守ってくださる。子どもだけではない。一族みんなだ。お釈迦さまだって二人の王子を捨てられ、修行に旅立たれたのだ」
「だめです。わたしは許しません」
「許してもらわなくったっていい。怒り通せ、殴れ、蹴飛ばせ。さあ、何なりとせよ」
義清は立ち上がった。と、例の塊がいっそう激しく身体の中心で上下左右に動き回る。
「お前だって、わたしから自由になれる。自分の思うように生きてくれ。仲清には言ってある。もし、妻も子どもも佐藤家から離れても経済的援助はしてくれと。仲清は了承している。彼は約束を破るような男ではない。もし、約束を破ったらいつでも吾が飛んでくる。心配するな」
「ああ」と声が出る。白い塊が膨れあがる。ぐんぐんと大きくなる。胸が破裂するようだ。
帯に挟んでいた太刀を抜く。
「あなた、何をなさいます」
妻が近寄ってくる。それを振り払い、萎烏帽子を投げ捨て、髻（もとどり）に刃をあてて、さっと引く。髻が前に転がった。太刀を居間に放り投げると、そこを出て、縁に出る。草鞋が見える。それを履こうと下をむきかけたとき、後ろから帯びが引かれた。
「お父上、どこへ」
いつの間にか、父母がやかましく罵り合っていたので目が覚めたのであろう、五歳の娘が後ろから引っ張っているのだ。
「離せ」
か細くて柔らかな腕の感触が伝わってくる。それを握って振り払う。娘が縁の板の上に転がったような音が聞こえる。
白い塊が割れる。大きな音が頭中を駆け巡る。中から無数の小さな塊が宙に向かって飛んでいく。頭の中が痛い、哀しい。
「お父上」
あどけない娘の声が頭中を駆け巡る。娘の泣き声。妻の泣き声。
「いたしかたのないことだ」義清が叫ぶ。
涙がほとばしる。草鞋を手に持つと、走り出す。後ろを見ない。娘の声が追ってくる。
「お父上、お父上」
身を捨つる人はまことに捨つるかは　捨てぬ人こそ捨つるなりけり（西行・詞花和歌集）
義清は出家の寺へ向かって走りつづける。髪はざんばら髪である。

厭(いと)へたゞ露のことをも思ひ置かで、厭(いと)へたゞ露のことをも思ひ置かで！

義清は狂ったようにそう叫びながら闇の中を走りつづける。

了

注

・内容はすべてフィクションである

・西行の和歌、及び（〇〇）の中にある番号は『西行全歌集』久保田淳、吉野朋美校注・岩波文庫による。その他はどの歌集かも示しておいた。

古今集は「古今和歌集」奥村恆也校注・新潮社による。

その他、参考文献は多数

その他の登場人物　・←実在人物　←　▲　架空の人物

紀伊関係

・奥盛弘(もりひろ)（院使、後、荒川荘の公文になる）

・平野俊春(としはる)（荒川荘の下司）

・徳大寺公重(きんしげ)（紀伊国守）

▲荒川元幹(もとみき)（荒川荘にいる農民で義清の歌の弟子）

▲与一(よいち)、弥右衛門(やえもん)（ともに田仲荘の農民）

京関係

・堀河局(ほりかわのつぼね)（待賢門院璋子の女房、歌人、義清の歌友だち）

・紀政則(きのまさのり)（北面の武士の先輩）

・藤原成通(なりみち)（歌人、蹴鞠の名手）

▲大伴源太（盗人）

・膽西(せんさい)（雲居寺の大仏を造った人、勧進聖(かんじんひじり)）

・空仁(くうにん)（出家者、歌人）

・西念（さいねん）（熱狂的な浄土願生者）

二百九十二枚